ロドスへ侵入！、、、しなきゃよかった

アークナイツと東方にドはまり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アークナイツ二次創作作品
オリジナルオペレーターが主人公。
ドクターは男にしています。
内容は以下の通り
とある男は”何でも屋”と依頼が出れば引き受ける仕事をしていた。
そんな中、ロドスへ侵入しなければならない依頼を受ける。
しかし、なんやかんやあって（序章での物語）ロドスのオペレーターとなる。
しかしその際に、取らなきゃいけない責任が出来、厄介事に巻き込まれていく。

序盤は、主人公がロドスに入社する理由を主に主人公の詳細を少しを描きます。次に、配属チームのいざこざ解決。次に、作戦で主人公の人間性が成長。次にヒロインとの仲が深まっていく
（基本的にドクターではなく、主人公中心に回ります。）
※思いつきで書いてます。暇があれば投稿するので一週間に一話程度と思っておいてください。（投稿切れたら失踪か、飽きたとでも思ってください）
そしてプロットも作ってないのでキャラ崩壊は起きると思います。ご容赦を。
後、私はキャラの性格を安定させるのが苦手です。
なんとなくイメージで書いてるのでキャラ崩壊はあると思います。

ヒロイン予定、、シージ、ブレイズ、ホシグマ、マドロック、スルト以上変更、増加あり（つまり決まってない！）

目次

ロドスへ侵入！の巻き ―― 1
ロドスって、、、怖い ―― 16
勇気ある選択 ―― 27
落ちた先には百獣の王 ―― 48
全身全霊の逃避行の果てにあったのは、、、 ―― 62
脅迫と交渉 ―― 85
尋問後の会話（ドクター、アーミヤ） 106
正義と悪 ―― 113
想いの強さ ―― 131
仕事の終わりの談笑 ―― 146
彼のひみつ ―― 162
ロドスでの最終日 ―― 185
取引の終わり ―― 206
不安の発露 ―― 222
不安の成就 ―― 232
願い ―― 250

ロドスへ侵入!の巻き

物語は嫌でも作動する。
「う、嘘だっ!」
停滞を望んでも、不変を願っても、それが世界の法則。
「そんなこと、あるわけがないっ!」
どんなに奇跡を願っても、時間はいつでも進むのだ。
「事前に調べた!ちゃんと準備だってした!」
あぁ、恐らくこれは罪だろう。
「根回しもちゃんと済ませたんだ!」
なんでも上手く行かせると、欲張った結果がこれなんだ。
「皆、、皆、、っ!」
寂れた路地を駆け抜ける足がたどり着いたは一つの教会。
銃撃戦によるものか銃痕激しく、穴だらけで、玄関から血を流す教会。
「皆、、っ!?」
その血の持ち主は、玄関で横たわる一人の老人。

「爺さんっ！」
俺はこの人を知っている。
誰よりも、この街にいる誰よりも、見捨てられたかの地に住む誰よりも、知っている。
「何があったっ!?ここで何が、、っ!?」
老人の体にあるのは沢山の数穴。
体は冷え、流れる血は生暖かい、嫌悪感の抱ける感触。
開かれない口には、老人の死以外情報がなかった。
だから周囲をみてしまった。
見てはいけない物を、、見てしまった。
「し、シスター、、？」
それは、壁に寄りかかりながら血を流している最愛の人。
「、、ごめ、んね、、下手、こいちゃった、、。」
流れ出る血の量が彼女の命の灯を意味する。
もう、火を灯すことも、蝋を継ぎ足すことも叶わない。
「あぁっ、嗚呼っ、」
口から出るのは懺悔の言葉、
「俺のせいだ、、俺がいたからっ！」

救われないのは分かってる。
救えないのも分かってる。
無意味なのも理解している。
「全部壊れてく、、、俺がいるから、全部っ！」
頬に触れられるは赤い血のついた柔らかい手、
「子供達を、、お願いね、、、」
指向けられたのは床のカーペット。
のし掛かるのは人一人分の死肉の重さ。
託された言葉は呪いか、願いか。
「「お兄ちゃんっ、」」
カーペットの下、隠し扉の中に居たのは数人の子供達。
俺にすがることでしか生きていけない子供たち。
この瞬間、俺の生きる意味は残され、そしてあらゆる手段は奪われた。
「ドクターーーーっ！」
呼び掛けるは死神の鎌。
「いるんだろ！ちゃんと！これを！見てるんだろっ！出てこい！」
涙を流したところで、環境に慈悲はない。

「ドクターっ！出てこいよっ！ドクタ「なんだ？」、、ドクター！」
もし、あの時、あんな依頼を受けなければ少しぐらいは変わっただろうか？
「取引だ！俺の全部をやる！」
もし、あの時、ちゃんと働いた危機感に身を任せられたならこんな結末にはならなかっただろうか？
「これからの俺の全てをくれてやる！」
分かっている、こんなのはしても無意味な後悔だ。
反省なんて望めない、それから得られる成長もない、あるのはただただ失ったと言う事実のみ。
「だから俺を、、っ！」
それでもあえて言おう、
「奴らのところまで、連れていけっ！」
ロドスになんて侵入するんじゃなかった、と。
ーーーーーーーーーーーー
「何でも屋、ロドスに侵入しろ。」
それは久しぶりの高額依頼だった。
依頼内容は極単純。

ロドスという製薬会社の拠点となる移動都市へと侵入し、本部に置かれている大型コンピューターにｕｓｂを刺すことのみ。
そんな依頼の報酬額は三年ぐらい遊んで暮らせるほどのもの。
（どう考えても裏がある。）
普通の依頼は高額なほど難易度は上がる。
それこそ、これほどの金額ならば無名な俺ではなく、有名なプロにお鉢が回ってくるものだ。
依頼主の風貌は完璧にマフィアのそれ。
（身バレはだめ、口外も駄目、報酬は後払い。）
うん、これは完璧、渡ってはいけない橋だ。
「お断り「前金で半分出す。」引き受けましょう!」
気づけば死神の手と握手を交わしてしまっていた。
後悔はある、しかし引き受けた以上成し遂げなければならないのが仕事というもの。
命の危険がある限り、あらゆる可能性を想定して行動しなければならない。
俺はできうる限りの準備をして依頼達成へと動き出した。
それが３日前の話。
依頼を浮けてから、準備と移動時間も含め約４日目。

「、、痛い。」

俺が隠密にロドスへ侵入するため、輸入コンテナの中に紛れていた、

ガタンっ、ゴトンっ、

輸入品のなかで見つけた、人一人入れるタンス。

揺れに何度も頭をぶつけるが、金のためには我慢しなければならない。

輸送が止まるまでは取りあえず、考え抜いた潜入ルートを思い出すことしかできなかった。

（えーっと、まずはコンテナ脱出後、貿易所のダクトへと侵入、その後二つの製造所を通り過ぎ、医療棟を抜ける、そして最後に制御中枢地区へと浸入して本丸を探す、だったっけか？）

地図がほしいところだが、手元にあるのはどうも曖昧で信頼できない情報のみ。

追加記載がない限り、取り敢えずは今は、この情報を元手にあらゆる可能性を想定しなければならないのだ。

（あ、そう言えば、渡されたデータに危険人物リストがあったっけ？）

タブレットを指で撫でる。

・コードネーム：スカジ　詳細：A級バウンティハンター

（うげっ！コイツはヤバイな、戦闘になったらまず勝てないぞ。）

・コードネーム：シージ　詳細：元グラスゴーのトップ
（はっ!?ギャングのなかのギャングじゃんっ!?なんでロドスにいんの!?）
・コードネーム：シャイニング　詳細：元サルカズ医療組織聴罪師構成員
（聴罪師、、不味すぎる、怒らせたら絶対に死ぬ。）
・コードネーム：チェン　詳細：龍門近衛局特別督察隊隊長
（、、ヤバイ、ヤバすぎる。なんだコイツら大物ばかりじゃないか。）
あまりの情報にため息が出た。
しかも、リストの下には元ライン生命警備主任やらカランドの巫女やら敵に回したらヤバすぎるもの達の情報まで出てくる。
（即断即決で決めて言い依頼じゃなかった。）
後悔が噴水のように涌き出てくる
しかし、どれだけ船がおんぼろで、渡る道が嵐の中の激流だったとしても、目的のためには渡りきるしかない。
というか、渡りきらなければ命はない。
「気を引き締めろ、依頼は達成すんだ!」
気合いを引き締め直すと同時にコンテナが停止する。
準備と覚悟を決めた俺は静かに扉を壊し、ロドス本部前へと移動し始めた。

一応、こちらは依頼主の要望で隠密行動を基本としなければならない。
で、あるならば、自分の存在を変装もなしに記録に残してはいけないのだ。
でないと今後の生活にかかわるしな！
ということで、監視カメラの位置をスキャリングし、安全な侵入ルートを探し出す。
（、、ありゃ？ないっ!?）
俺が編み出したプログラムが導き出した道は、遠回りに絶壁の壁を使う手段のみ。
他人の目、警備員の徘徊情報を元にすると、見つからないまま内部に侵入するルートは存在しなかった。
（、、仕方ない、従業員、拉致るか。）
しかし、効率面を考えるとそんな悠長なことはしていられない。というか面倒臭すぎる。
ということで、妥協案として選んだのが、コンテナチェックする従業員を眠らせ、服とカードキーを奪い取り、コンテナの中へと安全対策として連絡機器とともに放り込む作戦を実行した。
スキャンしたお陰で監視カメラには写らず、変装のお陰で誰にも見られず潜入成功。
堂々とロドス本部内へと入ることが出来た
（ここは貿易所か、、なるほど、情報に間違いはないね。）

ロドスの貿易所は意外と散らかっていた。
数多くの段ボール。棚には収まりきらず、所々邪魔にならないように纏められている。
見たところ従業員は十数名。
中には何故か武装した奴もいて”もしかしてここは戦闘狂の集まりなのではないか”と勘違いしてしまいそうだったが、どちらにしろ、これだけ人数が少ないと移動は簡単。
俺は入口付近の食器類をいれた段ボールの裏側に任意式花火発火装置を念のために2つ仕掛けて、ダクトへ向けて移動し始めた。
ルートはこう。
今いる入口から、壁沿いに左回りに移動。
その後、ターンテーブルの上部にあるダクトへと侵入。
条件は極力他人との接触を避け、ダクト侵入を見られないこと。
特に問題なく進めたが、問題はターンテーブル付近での事だった。
「アップルパイ!」
赤髪の女があろうことか、貿易所で狙撃練習をしていたのだ。
「おー、流石エクシアはん。何故か百発百中やな。」

「ふふ～んっ♪賭けはあたしの勝ちだね！次のパーティーの準備よろしくぅ♪」
しかも丁度、ターンテーブルの隣に積まれている段ボールを机にして空き缶を打ってやがる。
これではダクトのしたまで移動できない、
というか仕事場で銃で遊ぶなよ！危ないだろうが！
「、、、。」
隣の狼女もポッ〇ーを喰うだけで仕事してないしっ!?
真面目にやれよ！お前ら俺とは違って高い月収もらってんだろ！
（ちくしょう、さっさとこんな仕事終わらせたいのにっ！）
現実はやはり、うまくは行かない模様。
（、、それなら、ここからは時間との勝負だ。）
ターンテーブル前の段ボールの影に隠れ、花火発火装置のボタンを押す。
ビー！ビー！ビー！
ここは貿易所、流石に火事は総動員で鎮火に移るだろう。
狙いどおり、射撃練習してた女達も慌てて入口方面へと動き出した。
これで侵入者の存在が明らかになる可能性があるが、俺ということが分からなければなにも問題ない。

（普通なら一つの起爆でダクトまでの侵入の時間を稼げるんだけど、、。）
　自慢の脚力でダクトの下まで駆け抜ける。
（危険人物リストを見る限り、ロドスの人事力は非常に高い。）
　が、しかし、花火の音がたった数秒で消えた辺り、このままダクトの侵入するのは無理だ。
　元々、ダクトへの侵入は入口の扉を開けるためにも、ターンテーブルを足場にして二度のジャンプをしなければならない。
（ちっ！戻ってきやがった！）
　備えあれば憂いなし、視界の端で従業員の影を捕らえた俺は、もう一つの花火発火装置を起動した。
　お陰で影はまた入口の方向へと戻っていってくる。
　しかし、この瞬間に登りきらないと時間がない！
　こうなれば一か八か！賭けに出るんだ俺！金のために！
『オオオオりりりりゃゃゃあああ!!』
　ターンテーブルを思いっきり蹴り、左手でダクトの扉を掴む。
　流石はロドス。頑丈で俺一人の体重では取れやしないらしい。
　ボキッ♪バキッ♪

だがそんな事は想定済み、片手を支えに、天井に足を付くことで筋力をプラスしこじ開けた。
とは言え、支えるものがなくなると重力に従って体は落下する。
そこで出てくるのがまだ使われていない俺の右手だ！
「なぁエクシア、今なにか変な音がしなかったか？」
「なに言ってんのさテキサス！今は一秒でも早く花火の原因見つけないとっ！じゃないとサボってた私たちのせいになって減給されちゃうよ！」
「サボってたのはお前だけだ。」
花火のせいで貿易所内部の蛍光灯に照らされた室内が慌ただしくなっていく。
それとは対照的に、光がなく、這うことしかできないダクトのなか。
（っシャァァァっ！俺天才！俺天才！俺は賭けに勝ち申したぜ！）
狭い入口を通るため、瞬時に肩を脱臼させる、成功率五割の技を成功させた俺は、涙を流しながら静かに喜んでいた。
（よしあとは簡単だ！二つ目の製造所に降りて変装後移動するだけ！）
予定どおり、ホコリだらけだが外よりは安全なダクトを進む。
まずは一つ目。
「見て見て！ヴァルカンお姉ちゃん！おいら作れた！作れたよ！」

「凄いじゃないかケオベ、良くできてる。」
製造所内ではフォルテとベッローの種族同士が仲睦まじく作業に打ち込んでいた。
詳しく言うと、ケオベと呼ばれた女がヴァルカンに抱きついている。
うん、美人同士のふんずほぐれずは絵になるなぁ～。
「、、、っ！」
（うぉっ!?やべっ!?）
多少の休憩と思い、眺めようと明かりへと顔を伸ばすと、ケオベと言う女がこちらを急に睨んできた。
「どうした?」
「いや、なんか変な匂いがして。」
「っ!?私臭うかっ!?機械油は落としてきたんだがな、、、。」
くそっ、なんだよここの奴ら。
いくらケモ耳が生えてるからと言って、五感まで獣に真似なくてもいいだろうが！
（、、、さっさと移動した方が安全だな。）
悪いことをしてる分、文句を言えない俺はため息を付きながらも前へと進むことにした。
二つの製造所へとたどり着いた俺は、ワイヤー銃の先端の固定装置をダクトの天井へ

と張り付ける。
扉を精密ドライバーで外し、俺は小型カメラで製造所内部の情報を収集した。
「監視カメラが～、、角に1つ。奥の方向1つ、、こっちの姿は写らないから無視でいいな。他には、、よし、誰もいないな。」
ゆっくりと監視カメラの死角の範囲まで顔を出す。
そして腰に付けていたジャミング機器を投げつけ約１０分間、カメラの視界の変動を停止させた。
（よし、これで俺はカメラに写らない。）
皆さんはこんなことを経験したことはないだろうか？
イケメン俳優は意外と家では全く違う姿をしていたり、アイドルが意外と一人では口が悪かったりするように、他人に縛られストレスが貯まった人が一人になると、テンションが上がったりする現象。
そして、さっきまでのロドスの従業員に縛られストレスが貯まっている状況は、そのような環境にとても酷似する。
（華麗なる着地っ！）
つまり俺は一回転後による足音を立てずの着地して格好つけたのだ。
（ふっ、決まったっ。）

どや顔とはこの時のためにある。
「貴方、、なんでダクトから出てきたのですか?」
だがしかし、人はどうやら羞恥心に驚愕と混乱が合わさった時、摩訶不思議なことだが口をあんぐりと空けてしまうことらしい。
炎国特有のカンフーのための民族衣装。
オレンジ色の髪色に、虎のような耳と尻尾をした女は見るからに武芸経験者。
一職員であるならば誤魔化しようがあるが、その女の視線は完璧に疑いの視線。
と言うよりこの現状、何一ついいわけが通らない。
「ひぇっ、」
存外に、俺は自分が思ってた以上に情けなかったらしい。
精神的にも、肉体的にも絶体絶命。
口からは情けない声が出てしまった。

ロドスって、、、怖い

「貴方、、なんでダクトから出てきたのですか?」

不法侵入の言い逃れができない状況。

目の前では”ワイフー”（胸に付けた職員カードより）と言う名の女性が機嫌な目を俺に向けていた。

唖然とするしかない現実。

加えて、格好つけて恥を去らしてしまった悲しい事実。

「っ、うぐっ、えっぐ、もう嫌だぁぁぁ〜〜〜（泣）」

うつ伏せになって顔を隠すほど、俺の涙腺は大崩壊を起こした。

「なんなんだよぉっ!あんた、なんでばったり入ってくるんだよぉぉっ（泣）！」

「えっ!?なんで急に泣き出すんですかっ!?」

「ダクトは汚いし虫だらけだしぃっ!上司は上司で無理難題押し付けてくるしぃっ!カッコつけたら運悪く見られるしっ!もう嫌だァァァっ（泣）！」

「えっ!?えっ!?、、、えっ!?」

「その上、給料が１０００とかやってられるかよぉぉぉぉぉぉいおいおい（泣）」

「と、と、と、取り敢えずっ、な、泣き止んでっ！」
無き声が製造所を包む。
一見、端から見ればこの状況はワイフーさんが従業員を泣かしているかのよう。
誰かに見られたなら立場が上な彼女は怒られるに違いない。
ワイフーさんはそう思ってか否か、泣き止ませるために不用心にも不審者の俺のそばへと近寄ってしまった。
それが俺の罠とも気づかずに。
「ほんとゴメン。」
肩に手が触れる瞬間、俺はガバッと起き上がりワイフーさんに抱きついた。
そして、抱きつく瞬間腰から抜き取ったスタンガンをワイフーさんの腰に押し当てる。
「ギァッ!?」
俺のインナーは絶縁性。スタンガンの電気は彼女だけを痺れさせた。
体重が自分の体にのし掛かる。
「お～い、誰だぁ?･さっきから五月蝿いギャピッっ!?」
俺の泣き声といい、スタンガンの立てたバチバチ音。
奥の方にいた男の従業員がこちらの様子を案の定覗き込んできたので、男なら容赦の

必要はないと、回転蹴りを首に喰らわせ気絶させた。
「、、、はぁ～っ。」
俺は状況打破と安全確保が出来た現実に安堵し、優雅ではない尻餅を付く。
「ア”ァあ”ぁ～っ、、めっっっっちゃ、疲れた。」
予定にないさっきの攻防で意外と体力と精神力を結構消費したのか、口から風呂上がりのおっさんレベルに気の抜けた声が出る。
「もぉ～、運悪すぎだろぉ～こんなのぉ～っ、」
体は無意識と横になってしまった。
（このまま寝てしまいたい、、、。）
ピピピピピっ♪
「っと、休んでる場合じゃない、さっさと移動しないと。」
しかし、監視カメラに付けたジャミング機器の小さいアラームに、さっさとここを脱出しなければと、意識が切り替えさせられる。
「となれば、まずはこの二人を隠さないと。」
地面に頃がるは気絶した男性職員とワイヤーさん。
このまま放置もいいが、流石にもう少しは自分の存在が
を隠しておきたい。

俺は二人を積まれた段ボールの影へと運ぶ。
（って、待てよ、ここからは貿易所のより製造所のユニフォームの方がいいか。）
ここらからはダクトとかは使わず、まるっきし敵の本部で変装して行動する。
そうとなれば、貿易所のホコリだらけな服装では変な目で見られてしまう。
と言うことで、男性職員の服とカードを拝借することとした。
「、、おぉ～、事後みたい。」
パンイチの男の隣に、それなりに美人な女性が一人。
自分でやったことだが、流石に男女が夜に行う”アレ”をしたみたいだ。
見つかったら大変だと段ボールで隠す俺は相当優しいね。
なんとなく達成感に包まれた俺は、より精度の高い変装として、辺りから医療道具と書かれた段ボールをキャリーに乗せて製造所を出た。
「こ、こんにちわ～。」
一応、通り過ぎ行く人たちに適当な挨拶を交わす。
「こんにちわ。あら？その荷物、医療棟まで？大変ねぇ～。」
「い、いえいえ、仕事ですから。」
案顔を知られてないから疑われる可能性もあったが、案外大丈夫らしい。
（まぁ、仕事場の職員全員の顔と名前覚えてる奴なんてそうそういないか。）

不安が晴れると軽くなる足。
（よしっ、これならゆっくり行くとしよう♪）
余裕が出来た思考はスキップをするほどに調子に乗る。
その姿はご機嫌な従業員。
改めて考えると、このときほどロドスに溶け込んだ時はなかっただろう。
（こりゃあ楽勝だぜ、ふっふふ～ん♪）
だがしかし、それは間違いなく、してはいけない油断だった。

「え？」
いつもの俺なら気づけたはずだ。
前から歩いてくる剣を持った白銀の狼女は危険だと言うことに。
いくら遠回りになることになっても踵を返さなければならないことに。
なにがあったのかって？
それはな、丁度通り過ぎると言う所で、あろうことか狼女は、首を跳ねる勢いで自前の剣で切りかかってきたのだ。
（、、、、あ、っっっぶねぇぇぇっ!?）
絶体絶命のピンチ。スローモーションのように視界がクリアになる。

が、しかし、スキップをしていたのが功を奏したのか、キャリーごと前に倒れ、後頭部の髪の毛を数センチ失っただけで済んだ。
ヒュンっ、と剣の空を切る音と同時に、キュン、と股間が引き締まるのが分かる。
（はっ!?殺気っ!?）
研ぎ澄まされた股間が背後から命の危機を感じさせる。
横に回転すると、殺気まで倒れてたところに剣が突き刺さった。
「おや、避けられてしまった!?、。」
（ひ、ヒィィィィィィィっ?!??）
次の攻撃にもすぐに対応出来るよう慌てて起き上がる。
依頼主の情報にはのっていなかったが、仕事場で剣を持ち、有無を言わさず襲いかかってくる辺りまともな人間ではないだろう。
あの阿保どもめ!危険人物まとめられるなら狂人リストもまとめやがれ!
「君、何者だい?あ、ボクはラップランドって言うんだ、よろしくね。」
ドラマとか本とかで、美人に殺されるなら本望、とか言ってる奴いるが、今なら分かる。
それは両者狂人だから成り立つことだ!俺みたいな常識人にはたまったもんじゃねぇ!

「な、なんでいきなり襲ってくるんですかっ!?」
（ちくしょう、バレたのかっ!?バレてしまったのかっ!?）
頭をフル回転させて、現状を理解する。
だが、情報が足りなすぎて対処のしようがない。
「ん?なんでって、、分からないのかい?」
（バレた、、いや、違うはずだ、バレたならもっと大騒ぎになるはずだ、つまりこれは個人事。）
「わ、分かりません、、、。」
もしかして気絶させた男がこの人の彼氏だったのか、、？
「君から血の匂いががするからさ。」
（、、あ、違うわこれ、）
良かった～、もし彼氏彼女とかだったら罪悪感で土下座するところだった。
しかし、血の匂い、か、、、
「け、怪我でもしてますか?」
「怪我?違う違う、この匂いはそんなのじゃない。
そう、この匂いは、、人殺しの匂い。」
不味い。

「君からは私と同様の匂いがする。
この世に生を受けてから死は隣合わせ。
生きるためにはなんでもして、目的のためなら血を流すことを惜しまない。」
これは不味い。
「でも、君からはどうも不思議な感じがするんだよね。ボクは生まれてこの方、血の匂いを嗅ぎ違えたことはない。なのに君にはこんなに近くまで寄らないと嗅ぎ分けられない。
まるで罪は浄化したかのような感じがする。」
非常にこれは不味い。
「君は何者だい？」
この人の胸がチラリズムしてしまう、、、っ！
「、、、し、知りたいのなら、な、なんで斬りかかって来たのですか？」
「剣で語った方が早いだろう？」
っと、ハニートラップに引っ掛かっている場合じゃない。
さっさと命のためにも逃げなければ。
ラップランドさんは迫ってきたかと思えば、今度は数歩下がり、剣へと手を伸ばす。
「わ、私には！貴方が何を言っているか分かりません！

そしてどうやら邪推しておりますが、私はただの一社員です！」
このままではまた戦闘へと移行する危険性がある。
相手の流れに呑まれてはいけない。
「こここ、こ、この事は！上に報告することになりますからそのおつもりで！」
勢いだけで流れを掴む。
「それではっ！さよぉーーならっ！」
斬りかかられないように、さっさと退散する。
追いかけられないのは幸運で、一つの危機を逃れた俺は、ようやく冷静に思考を保てるようになる。
そんな思考が産み出した現状の解答はこうだった。
”ロドスって怖い。”

「、、、逃げられてしまったね。」
ラップランドは苦笑しながらも少し抜けている剣を鞘へと戻す。
そして、徐に懐から携帯を取り出した。

「あ、もしもし、ドクター?ボクだよ。」
連絡先は自身の上司。
「ん?文句は受け付けないぞって?違う違う、テキサスと同じ時間帯に配属してくれたことに文句はないよ。
どちらかと言えば、有り難うとハグをしてもいいぐらいさ。」
笑いながら上司と話すその声には、明らかにテンションに比例してうわずんだ様子が見て取れる。
「じゃあなんの用事かって?ちょっと面白いことがあってね。報告した方がいいと思って。」
その微笑み方にすらその様子は明らかだ。
説明の途中で嬉しそうに笑う姿には流石の上司も疑いをかける。
「勘違いじゃないのかって?どうだろうね、それはドクターの判断に任せるよ。ボクは報告の責務を果たしただけさ。」
しかし、彼女はそんな疑われることを気にも止めず、話し続ける。
「ん、ん、それじゃ、あとは任せるよ。」
携帯を握り、新たな戦いに身を投じる期待から彼女は身を震わせる。
「あぁ、楽しみだな、あの拭いきれない濃厚な匂い。」

静かな熱い殺気は辺りへ巻き散らかされる。

「出来るなら戦いたいなぁ。」

ラップランドの職員もどきの動きを真似るようにするスキップは、殺気がなければ年相応に少女の姿そのものだった。

勇気ある選択

ロドスは元々、事前調べの情報だと、賛否両論別れる組織の一つだった。
賛成のものはロドスの考えに惜しみなく賛同し、反対のものはとことん反対する。
意志に対する中間がいない、どうも不思議な組織だった。
意見の内容は様々だ。
感染者のために行動に称賛すれば、感染者のみの特別扱いに不平を述べるものもいる。
組織が一人の幼い少女にあることに不満を持つものもいれば、流石だと褒めるものもいる。
要は、ロドスに対する本音は妬み嫉み、感謝感激がその殆どだった。
個人的にはそんなロドスを知って、何となくだが不満をもった。
なに、そんな大層な理由はない。
単純に俺達は救われず、他の人達が救われたことに不満があるだけの身勝手な理由だ。
本来なら、俺が助けたかった人達が救われてたはずなのに、すぐ隣のやつがロドスで

生き残っている。
本来なら俺が守りたかった人達が安全に過ごせたはずなのに、赤の他人がロドスの保護に入ってる。
下らない嫉妬なのだ。
しかし、俺は他の奴らとは違って、それを大々的に言うつもりはない。
ロドスだって全知全能な組織じゃないのは知ってる、俺達含め、助けたくても助けられなかった人はたくさんいるのだろう。
要は本質的には俺と、それこそこの世に生きる人達と、全く変わらないのだ。
助けてたい人がいて、助けられない人がいて、目的のために働き続ける。
ロドスを否定するのは巡りめぐって、自分を否定することになるのを、俺は知っているのだ。
それゆえに、俺はロドスを知った最初、好きにすればいいと、放任する立場に立とうと思った。
けど現在、ロドスの医療棟を見て、その気持ちは揺らぎ始めていた。
「、、、皆、必死なんだよな。」
俺が通った道は収集型治療室。
窓の向こう側では、ベットの上にいなければならない何人もの感染者が、治療のため

に集められていた。
『二番にアラーム！手が空いてる人っ！検査に向かってくださいっ！』
『十番、源石密度０．５ｕ／Ｌ超え、集中治療室へと運んでっ！』
『十二番、血が足りませんっ！輸血パックお願いしますっ！』
響いてくる怒号たちは、本気の意志が感じられる。
間違いなくここにいる人達は、人のためにと信じて動ける人なのは見て分かった。
「、、、。」
命が燃え続ける瞬間が、そこにあったのだ。
俺は気づけば、そんな世界に魅了されていた。
「羨ましいね。」
口からでるのは最低な言葉。
死の間際に生きる人にとって最悪な言葉。
誰も回りにいないからこそ吐いた言葉。
俺は使命ではなく、己が感情で生き足掻く人間に、嫉妬の視線を向けたのだ。
「、、やめろよ、それは捨てたはずだろ。」
捨て台詞のように吐くことで、思考を通常の状態へと戻す。
視線を前に向けることで、もう無駄な景色に惑わされない。

俺はこの自身の醜さと対面する時間を、無視することで下らない一瞬の一時だと忘れることにした。

ーーーーーーーーーー

ラップランドと言う女性に追いかけられてから数十分後、、

医療棟を抜けた俺は、清掃員を捕まえ、ようやく中枢区画へと侵入できた。

（見るからにヤバイ人達が増えたな～、、。）

しかしそれと同時に、見るからに危険人物が増え、隠密行動が難しくなる。

ロドスの職員の間を通り過ぎる度、可笑しな挙動が命に繋がることを自覚させられた。

しかし、こちらに用があるのはロドスのネットワークの中枢となるコンピューター室のみ。

無駄な騒ぎを起こす必要もない。

こんなもんは堂々としてりゃあ問題はないのだ。

その証拠にほら、

ハンマーを持った物騒な人も、大きな剣持った人も、腰に突撃銃をぶら下げた人も、火炎放射機腰に掛けた人も、俺のことを訝まなかった。

（あれ？ロドスって製薬会社のはずだよな、、？）

とにかく、俺の変装は完璧だったのだ。
「っと、ついたな。」
自分の実力の高さに自身を覚えてると、ようやくコンピューター室を見つけた。
回りには誰もいない。入るなら絶好のチャンス、、、と思ったが、丁度入り口に監視カメラが仕掛けられていた。
（全方位型の監視カメラ、か、、、廊下にあるから死角はなし、製造所と同じ方法は取れない。）
ここで立ち止まれば、カメラの向こう側の人間に疑われる可能性がある。
（さて、侵入方法はぁ～、、、っと、会議室？）
歩きながら悩んでいると、コンピューター室のとなりにある会議室が目に入った。
扉はどうやら清掃員に渡されるカードキーで開けられるらしく、侵入は容易。
時間帯も、音がしないあたり、今は会議の時間ではないようだ。
「そうすると、、、」
会議室に侵入し、コンピューター室の一番近い窓へと向かう。
「真横に約１０メートル。」
窓の外は断崖絶壁、高さはそれなりなもので打ち所が悪ければ死ぬと、俺の雑な頭でも理解できた。

「、、、思い付いてしまっちった、、。」
しかし、どうしようもない俺の頭はとある作戦を思い付いてしまう。
俺は自分がしようとしてることに呆れながらも、状況整理のためその場に腰を下ろした。
（、、、正面からの侵入方法はないこともない。）
誰かから専用のカードキーをどうにか奪い取れば、清掃員なのだから鍵を使えば怪しまずに入れはするだろう。
しかしロドスの人員が問題だ。
異常事態の対処が早く、違和感にはすぐ気づく。
俺の勘が言ってる、十中八九上手くはいかない、と。
「と言っても、こっちの方が危険、と。」
成功率は高くても、失敗すれば重症は必須。
「命綱は衝撃に弱いワイヤー銃一つ、屋上には、、流石に人がいるか。」
先にワイヤーで安全確保したいが、人にバレては今までの努力が無駄になるためそうもいかない。
「、、はぁ、パルクールか。」
そろそろ、時間的にも仕事をしなければならない。

（覚悟の決め時だ。）

窓を開け、半身を出す。風が強いせいで体が押されるが、向かい風なのは運がいいだろう。壁により平行で移動できる。

「すぅぅ〜〜、、、　はぁぁーーー、、、　よしっ！」

作戦はこう、まずは鏡用の出っ張りを使って斜め前に大きく飛ぶ。恐らくそれでも飛距離は足りないだろうから、放物線を描くように壁を蹴ることでそれを補助。そして、コンピューター室の窓際に着地。

踏み外せば失敗するのは確実。

適切な力加減を外せば何一つうまく行かないだろう。

「さぁっー行くぞっ！」

しかし、何かを成すには挑戦をしなければならない。

俺は肺に空気を貯め、小さな出っ張りを手の支えにし、斜め上へと飛び出した。

とは言え、どんなに頑張っても人間の出せる力は少量、鳥のように羽ばたくこともできなければ、猿のように優雅に腕を使うこともできない。

では諦めて届かぬまま、落ちることを選択するか？

そんなわけがない。人間には動物にない知恵がある。

「、、、っ、」

飛距離が足らないと分かった俺は、四足歩行ででき得る限り高速に手足を回転させた。
本来、人間が地面を蹴るとき、斜め４５度の角度で最大限の力が入る。
しかし、俺の場合は斜め5度から１０度の感覚で、一歩一歩がとても弱い。
故に回数を重ねた。そして足の裏を壁と平行にすることで、放物線とはいかなくても目的の角度で動くことができた。
「あ、、やべっ」
だが、コンピューター室の窓まであと5歩の地点。
爪先の力加減を強めてしまい、次の一歩を踏み外してしまった。
これでもう足は使えない。
（とどぉけぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!）
となれば残るのは手のみ、俺は窓の際へと限界超えて左手を伸ばしきった。
しかし視界の中で捕えた現実が、あとちょっとなのに届かないことを告げる。
（やばいっ！落ちるっ!?）
危機を感じた俺の脳ミソは、血流を使って知恵を振り絞ることにした。
落ちれば死ぬと言う可能性から生存本能が０．００１秒で眼に映る景色を解析。
蓄えてきた記憶と経験が、極単純な答えを産み出した。

壁によくある、細く小さな長い凹み、
俺の右手はその凹みを爪だけでも利用することで、足りない距離を届かせた。
「、、、っ！」
左手の指だけでも、届けば後はこちらのもの。
右手、肩、腰、左足、右足の順に窓の際を登る。
「、、、はぁ～、い、い、行けた、行けてしまったっ。」
まだ安全と決まったわけではないが、ようやく腰を下ろせたことにため息が出た。
出来れば二度とはしたくない、と言うか絶対しない。
「窓は、、鍵がかかってるか。」
さっさとこんな命懸けの仕事は終わらせるべき。
そう考え窓を開けようとするが、鍵がかかって上がらない。
俺は腰に下げたサプレッサーつき小型銃を取り出し、窓に穴を空けることで鍵を解除する。
「よし、侵入完了。」
目の前にはようやく、ロドスの中枢となる七列にも並んだ大型コンピューター。
本当にようやく、今回の依頼の本番を始めることが出来る。
「依頼内容はロドスのコンピューターにこのｕｓｂを刺し込むこと。」

目的通り、左から四つ目のコンピュータに、俺はサイドポケットにしまっていたｕｓｂを刺し込んだ。

そして、同時に携帯用タブレットも接続する。

「、、なるほど、潜入型ウイルスね。」

目的は簡単、俺が持ち運ばされたものを知ることと、追加依頼で指令されたロドスのセキュリティの特定解除。

「凄いなロドス。ウイルスすら侵入させないか。」

案の定、ロドスのコンピューターは、ウイルスの入ったデータを外部データとだけ認識するだけで内部には入らせなかった。

依頼主の方々はこれを想定して追加依頼したんだろう。

これはこれは、セキュリティ解除には骨が折れそうだ。

「、、なるほど、こいつにアクセスできるのは製作者が許可した者のみ。それ以外は問答無用で弾く仕組みなのか、」

タブレットで一つづつ障壁を解除していく。

「１０種類の相互監視型ウイルス対策ソフトに２０段階の暗号キー、一つづつ攻略してくと丸々一週間はかかるな。」

想定以上に厳しいロドスのセキュリティ。

「仕方ない、元々仕組まれてるプログラムに似せて、内部へと送り込むか。
はぁ～、侵入しなければ働かないソフトでよかったぜ、もしそんな機能も追加されてたらすぐにバレてたわ。」
となれば、セキュリティの解除よりは、このウイルスを別のデータで包むことで対策ソフトに安全だと誤認識させる方が手っ取り早そうだ。
俺は集中するためにも、無言で汗を流しながら作業へと移った。
とは言え、完璧に内部へ侵入させることはできないだろう。
受け取った前金から見合う仕事量は最低でも１０分。
その１０分は全力で仕事に挑んだ。
「ふぅ、ここが限界かな。」
自分の技術が成せるとこまで来て、丁度１０分がたった。
やれることは全部やっただろう、と流れ出る汗を拭う。
ピーッ
そんな時、丁度扉から開閉のアラームが作動した。
（誰か来たっ!?）
すぐさまコンピューターの影に隠れる。
「いや～、ごめんねぇ～?急に護衛任せちゃって。」

「何てことはない。これも私の責務、ドンと頼ってくれていい。」
　コンピューター室へと入ってきたのは、クランタ族の重装備を着た金髪女と、サルカズ族の青みがかった髪をしたエンジニアっぽい女だった。
「しっかし、ドクターも急だよね～、”外に出歩くなら護衛をつけろ”って、ここロドスだよ？」
「なに、ドクターのことだ。何か考えがあるのだろう。」
　女二人は左から五つ目のコンピューターにようがある様子。
（やばい、サルカズ族の人はともかく、クランタ族の方は多分騎士の出だっ。直接戦闘になったら非常にめんどくさいぞっ！）
　俺はコンピューターを盾にして物音を立てぬように隠れる。
「それにクロージャさんは曲がりなりにも私の上司。
　本来なら私は四六時中、護衛をしなければならないのだぞ？」
「装備を新調しただけで大袈裟じゃない？」
「何を言うっ！この盾！この鉄槌！私はこんなに手に馴染むものを見たことはないっ！クロージャさんに敬意を示すのは当たり前のことだっ！」
「ね、熱意が凄い、、、ま、まぁ、壊れたらちゃんと言ってね、その都度修理するからさ。」
「勿論だ！大切に使うことも約束しよう！」

雑談に加え、ロドス内と言うことで油断しているのだろう。こちらに気づく気配がない。

良かったと安心するべきか、早く逃げなきゃと焦らなければならないか。

とりあえず俺は静かに移動を、、、

（あっ!? ｕｓｂとタブレットっ!?）

どうしようっ!? 一つのコンピューターを隔てた先にお二方がいらっしゃりやがるっ！

もし戻るときに俺のいる方面へと来たら、あれは簡単に見つかってしまうっ！

（畜生っ！ここで見つかったらヤバイってのにっ！）

ロドスのことだ。侵入者がここにいると知られたら絶対にコンピューターを検査するに違いない。

そうなれば、依頼主のウイルスは簡単に見つかり削除されるだろう。

その結果に起こるのが俺の依頼失敗の事実。

（取れる手段は、どうにかして二つを回収して隠密に徹するか、別の行動を起こして錯乱させるかの二つ。）

とりあえず優先すべきは、道具の回収っ！

唸らせ俺の腕っ！鳴らすなよ俺の足っ！

つま先立ちで移動し、服の擦れる音にも気を付けながらジリジリと置きっぱなしの道具を取りに行く。
あからさまにその姿はこそ泥のそれだが、やってることがやってることだけに文句がでない。
しかし！プライドで飯は食えないのだ！
後、数センチ、、、っ！
ポキっ♪
（あ、間接鳴っちゃった（・ω＜）テヘペロ☆ミ）
「誰だっ！、、『トッ、』、、クロージャさんっ！」
「え？、、、きゃっ!?」
「ちっ、、、防がれたか、、、っ！」
（あーーっ!!持ってて良かった変装用マスクっ！）
何かあったか簡潔に書こう。
先ず、俺は間接が鳴ったので瞬時に道具を回収し、コンピューターの上に避難。
クランタ族の女は音に反応し、俺の居たところへと武器をもって近づいた。
バレるのも時間の問題。
だから俺はロドスに目的を知られないためにも、コンピューターを蹴り、腰にかけて

いたナイフをサルカズ族の女に向かって振りかぶった。
それをクランタ族の女が防ぐ。
そして均衡状態へ↑今ここ
「クロージャさん、下がってて下さい。」
「う、うん！分かった！」
「何者だ！素性を明かせ！」
「、、、。」
俺は投げ掛けに応じず、ナイフを構え直す。
「黙りか、、、 投降しろ！今なら命は保証する！」
「、、、 私は仕事を全うする。邪魔をすると言うならば、、、 覚悟しろっ。」
（うわ、恥ずかしっ。）
「そうか、ならば、、、 死力を尽くして相対することとしよう。」
（ごめんなさい、そこまでやる気ないです、）
殺しはしたくない。出来るなら大事にせず逃げ出したい。のが本音だ。
とは考えるものの、まだ自分の頭の中にはまともな逃走経路が思い浮かんでいない。
「行くぞっ！」
一応、余計な勘繰りをさせないため、殺さない程度に攻めに出る。

（な、なんだこの人っ!?なんであんな盾を持って身軽に動けんだよっ!?）
本命をクランタ族の女を抜けることのように見せるためナイフを牽制用に扱う。
要はナイフで相手の視線を錯乱させるつもりだった。
飛び交うナイフと盾のぶつかり合う金属音。
適当な相手なら、ナイフに集中し、死角をつくのが楽になる。
そのはずなのに、この女は盾で余計に遮られていながらも、軽々と盾を操ることで俺の全ての攻撃を防ぎきっていた。
（流石は騎士の出、鍛え方が違うんだろうなっ！）
勘か予測か、恐らくこの人相手には死角からの攻撃は通用しないと考えた方がいいだろう。
（じゃあ、こればどうだっ！）
相手は盾を軽々しく使えるほどの筋力がある。
そして防御と言う点では正確な勘もあるのだろう。たしかに厄介だ。単純な攻撃では通じないのは当然だろう。
しかし、防御に回ってる時点で、後手である不利を持ち、そして盾を持つことで身軽さには俺に分がある。
俺は圧倒的速度でナイフを振り回し、隙を作っては抜けそうな時に付く、要は当たる

までフェイント作戦を決行した。
（よっ、ほっ、ほっ、そいやっ、）
大事なのは腕だけ使うのではなく全身を使い攻撃すること。
体力の消費は早いがそのお陰で相手は翻弄出来る。
「、、っ!?、、ぐっ、」
想定どおり、クランタ族の女は辛そうな声を溢す。
（よし、抜けることが出来たら首を蹴って気絶させるとし、、えっ？）
後一押しで抜けられる、そう確信した時、、
「はぁっ！」
「ぐぁっ、」
女は盾で凪払ってきた。
やるとしても鉄槌によるものだと思っていた俺は、まともに盾の衝撃を喰らってしまう。
（くそっ、これだから戦闘慣れしてる奴はっ！）
痛む節々、しかし追撃されないためにも、直ぐ様体勢を立て直した。
「あっ！眺めてる場合じゃない！連絡しないとっ！」
顔を上げると、後ろのサルカズ族が携帯機器を取り出そうとしていた。

（ヤバイっ！）
焦った俺は最大限の速度でクランタ族へと突撃する。
視界のなかでクランタ族はどう来ても大丈夫なように盾を構え直した。
ナイフと盾がぶつかり合う。
左肩上から鉄槌が振るわれた。
俺は左手で鉄槌を上から叩き落とし、その勢いで体を浮かせ、クランタ族の首もとを折らない程度の強さで蹴り飛ばした。
「ぐっ!?」
しかし、クランタ族は足を踏ん張って耐えてみせる。
肉体の頑丈さが尋常じゃない。
（これでも通じないのか、いいのが入ったと思ったのにっ、）
しかし、一瞬でも怯ませることはできた。
クランタ族の首にある足を軸に回転し、サルカズ族の方へと手を伸ばす。
「あーーーっ!?私の携帯ガァァァぁぁぁぁっ!?」
俺はナイフでサルカズ族が手に持っていた携帯機器をぶっ刺した。
それが最悪の事態を生む、
（よし、連絡手段は壊せたッ、危ねぇっ!?）

サルカズ族の叫びと同時に、腹めがけて向かってくる鉄槌。
ナイフを盾に受けたことで大ダメージにはならなかったが、俺は窓際へと吹っ飛んだ。
「ぐっ、、、うわぁ!?」
倒れるように転がるも、さらに追い討ちとして向かってくる鉄槌。
どうやらクランタ族に容赦はなくなったらしい。
攻める速度が威力と共に倍増した。
（ヤバイヤバイヤバイっ!?この人こんなに強かったのかっ!?）
俺はクランタ族の攻撃を防ぐので精一杯。
攻撃に移ろうにも反撃の余地は与えられなかった。
どんどんと窓際へと押されていく。
このままではまともに鉄槌を喰らうだろう。
（くそっ、逃げるしかないかっ！）
元々、俺が狙っていたのは二人の気絶。
俺の本来の狙いを察せられないためにも行った錯乱作戦だがら、連絡手段を絶ったことでその可能性は急増したかと思ってしまった、
だがこれは流石に想定外。

目の前のクランタ族を気絶させることは叶わないだろう。
となれば、自分の命を守るためにもうこの部屋を脱出する他ない。
しかし、、、
（くそっ！距離を取ることができないっ！）
それをクランタ族は許さなかった。
盾で行く手を阻まれ、鉄槌で手段を減らされる。
後手を取られたことで、俺が唯一勝っている身軽さの利点が通用しなくなっていた。
その上、、、
（誰か来るっ!?）
鉄槌の床やナイフを叩く衝撃音。
それを聞き付けてか扉の向こうから微かだが多くの足音が聞こえてきた。
このままではじり貧、脱出する方法もなくなってしまう。
（、、、っ！）
そんな時、俺の視界に映る穴の空いた窓。
（本当にいつもいつもっ、最悪な予想がついちまうなっ！）
俺はクランタ族に向けて最小の動作でサプレッサーつき小銃を向けた。
すると、予想通りにクランタ族はサルカズ族のためか一度距離を取る。

お陰で出来た一瞬の時間。
「しかたねぇよなぁ！」
俺は窓へと走りだし、窓に数個の数穴を空け、窓を脆くする。
そして苦笑しながらも行う決死の覚悟。
俺は窓を突き破り、外へと飛び出した。

落ちた先には百獣の王

前略

お父さん、お母さん、元気ですか?

私は毎日を刺激的に生きています。

これはとある仕事での出来事なのですが、これが凄いんです。

朝には荷物のように段ボールのなかに入り、移動には爆弾とダクトを使わなければなりません。

笑えるでしょう?でもこれが事実なんです。

その上、通りがかった従業員には襲いかかられるんですよ?何か血の匂いがする~とか言われながら。

そして本来の業務を達成するために、断崖絶壁で窓から窓にジャンプして、終いにはナイフを女性に向けて振るうんです。

私じゃなかったら疲労と罪悪感で死んでますよねぇ~。

、、え?貴方の体が心配?

アッハッハッハ、大丈夫ですよ~。

この心も体も新しいことに挑戦できるほど健康体ですよぉ～。
ん？新しいことって何かって？
紐なしバンジージャンプです♪
「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイっ!!!」
重力に逆らわない自分の肉体。
肌に感じる風の圧力に俺の生存本能は最大音量の警報を上げていた。
「ちくしょうっ！」
俺は直ぐ様、伸縮性のマスクを脱ぎ、ナイフの柄と自分の手を縛り付ける。
「ガ嗚呼アアアアアアアッ!!」
そしてナイフを全力で壁に突き立てた。
腕が取れそうなほどの振動が体全身に響き渡る。
緩急に脳みそが揺られるが、そんなこと気にしている暇もない。
取り敢えず今は耐え抜くことが最優先なのだ。
叫ぶことで痛みを緩和させる、
パキッ
「あっ、」
が、しかし突然、ナイフが真っ二つに折れた。

（っ!?さっきの戦闘で限界が来てたのかっ!?）
再度、体が重力に従い落下する。
足が空中を舞い、腕が空中を泳ぐ。
速くなる落下速度に恐怖することで現状を正しく認識した俺は、とっさにワイヤー銃を屋上に向かい発射した。
（この際コイツの強度は考えない！今は生存率を上げる！）
俺が使っているワイヤー銃は闇市で売られている非正規品。
ワイヤーの強度が高いから愛用しているが、コイツには大きな欠陥がある。
銃とワイヤーを繋ぐ部位の強度が弱いのだ。
「クッソォォォォォォォっ!!!」
しかも、あくまでコイツは仕込み銃。
普通のより長く設定されてはいるが安全な落下距離を稼ぐには圧倒的に足りない。
（本当の本当にっ！俺ってこんなのばっかりだっ！）
だから俺はワイヤーに限界が来る直前、壁を蹴ることで振り子のように前に進んだ。
（頼むぞワイヤー銃！少しぐらいは耐えてくれっ！）
真っ逆さまに落ちるよりかは、転がるようにした方がまだ生きている確率は上がる。
俺は口で右手に巻かれたマスクを脱ぎ取り、今度はワイヤー銃を握る右手を覆った。

ワイヤー銃が壊れないことを祈って。
バキっ
（マジかよっ!?）
元々、狙っていたのは、どこかの窓を突き破り安全を確保する方法。
成功確率は低いが、出来れば命の安全は必ず確保できる。
しかし失敗すれば、、そんな最悪が今、実現した。
ワイヤーと銃が分離したのだ。
流れる時間がスローモーションになる。
視界の中で粉々になる銃がまるで俺の行く末を描いてるかのように感じた。
（あ、俺、死ぬんだ、）
頭の中がクリアになる。
不純物はなくなり、現状の理解にスペックの全てが使用される。
無駄な程に五感が冴え渡ってしまったのだ。
お陰で、このままでは死んでしまうことを理解する。
運が良くても重症、死ななかったとしても動けずロドスに捕まるのがオチ。
つまり俺には生き残る術は残されてい「ないわけねぇだろっ！」
生存本能が勝手に体を動かした。

恐らく、ワイヤー銃のお陰で働いた斜めの合力を利用するつもりだろう。
俺の足はその力を使うためにも壁を地面に見立てて走り始めた。
「うオオオオオりゃァァァァあああアァァ!!」
全力も全力、体力の消費なんて考えない。
生き残るためにはなんでもする。
関節が痛くなろうとも足を止めず、ゲシュタルト崩壊を起こしたとしても根性で足を回す。
「やるしかねぇよなぁっ!!!」
間近に迫ってくる地面。
俺は地面と平行に飛ぶように壁を蹴り飛ばした。
しかし、このままでは大怪我は免れない。
どんなに斜めに動いて重力の力を分散させたとしても、流石に体が耐えられない。
だから俺は左手を振り上げた。
「くたばれぇ!」
地面を力一杯、殴り付ける。
俺が生き残るために出した答えは、重力の力を弱めるために出した答えは筋力の全てを使うことだった。

殴った力と重力、そして走り続けた結果から生まれた威力に、俺は後方へと転がり回る。
身体中から地面へ叩きつけられた衝撃が走る。
ようやく体が止まったのは、ズサァーとそんな擬音が似合うほどに転げ回った後の事だった。
笑いたくなるほどに最悪な状況。
吐きたくなるほどに痛む体。
泣きたくなるほどに渦巻く後悔。
それ以上に感じる生き残れた現実。
「ハハッ、漫画も侮れないね、、、。」
娯楽で読んだ漫画の主人公のやっていた行動を真似したお陰で生き残れた俺はついに気を失った。

ーーーーーーー

「アハハ、兄ちゃん！兄ちゃん！遊ぼうぜ！」
それは少し寂れた教会の中だった。
一人の押さない少年が自分の腕を引く。

「あれ？外に行くの？気をつけていってらっしゃい。」
廊下で会うのは箒を持ったシスター。
彼女は慈愛に満ちた表情で笑いかけてくる。
「もうお兄ちゃん遅い！みんな集まってるよ！」
外で向かえてくれたのはポニーテールを揺らす少女。
少年に合わせて少女は俺を導くように手を引いてくれる。
「お兄ちゃん、休んでる時にごめんね。皆がどうしてもって聞かなくて。」
朗らかに笑いながら迎えてくれるのは本を持った銀髪の少女。
少女はその優しさで俺の居場所を照らしてくれる。
「お兄ちゃん！今日なにしようか！鬼ごっこ？かくれんぼ？それとも隠れ鬼かな！」
抱きついてくるのはおかっぱ頭の可愛らしい少年。
彼は誰よりも美しく笑い、誰よりも目を輝かせ、映す視界を彩らせてくれる。
「、、、ッ！」
見上げた世界に居たのは、ちゃんと今を生きる子供たち。
こんな自分を信頼してくれる少年たち。
こんな自分を信用してくれる少女たち。
そして活気溢れるこの世界。

「「お兄ちゃん!!!」」
気づけば俺は、子供のように泣きじゃくっていた。
ーーーーーー
バシャッ！
顔に感じるのは液体に濡れる感触。
その冷たさは氷のようで、微睡んだ意識を少しだけ覚ましてくれた。
「、ん、、んん?」
「、、起きたか。」
目を開けると第一に見えたのは、スレンダーな生足と女性特有の大きい胸。
そして、胸から覗かせるアスラン族特有のライオンのような耳。
（この人は確か、、リストにいた、、シージって人だったっけ、、）
頭を打ったのか、記憶が朧気だ。
思考がぼやけて正常な判断ができない。
「、、気絶して、、何分ぐらい経ちましたか?」
「2分ぐらいだ。」
目が覚めたと言うことは取り敢えず無事だったということだろうか?
確かめようと体を動かそうとすると鈍い痛みが走る。

痛みで顔を歪ませると、ライオンの女性が口を開いた。
「高いところから落ちた割には大丈夫そうだな。」
「、、、これのどこをどう見たらそんな言葉が、、、というか見てたんですか？」
「あぁ、窓から飛び出るところからな。」
この痛みのせいか、色々と鬱憤でも貯まっていたせいか、少しだけ彼女の言い方にイラッとする。
「、、、助けてくれてもいいじゃないですか。」
「無理な相談だ、あの高さでは私も下敷きになりかねない。その上、お前を助ける義理がない。」
（、、、それもそうだな。）
しかし、彼女の言い分も全うなもので反論の余地はない。
そしてこの現状も自分の愚かさが産み出したもの。
省みるは己の未熟さだろう。
「、、、身体を起こすぐらいは手伝って貰うのも駄目ですか？」
だが、それなりにムカついているので、意趣返しとは言えずとも右手を前に差し出して面倒事を押し付けた。
「、、、いいだろう。」

グイッと持ち上げられる上半身。
身体を起こそうと肩を上げると、左肩に強い痛みが走った。
「いだっッ、」
「大丈夫か?、、、左肩をやっているな。」
視線を向けると少し歪んだ左肩が映る。
(なるほど、代償は左肩の脱臼か。)
「運が、、、良かったんだろうな〜。」
本来なら成功しても左腕は使い物にならないような事態。
これは幸運の賜物だと、俺は納得することにした。
「あまり触らない方がいい、悪化するぞ。」
自力で骨を戻せないか左肩をさわろうとすると、その動きを言葉で静止させられる。
「これでも何回も脱臼程度は直したことがあるんですが。」
「しかし、専門家ではないのだろう?より安全に直すためには適した場所で見て貰った方がいい。」
「そう、、、ですね、じゃあ、そうするとしますか。」
この場を去るためにも立ち上がろうとする。
「医療班には連絡をしておいた。後10分ぐらいで来るだろうから今は休むといい。」

「、、、っ!?」

片足を上げたと同時に告げられる最悪の報告。

（駄目だ、ここで動揺するな！悟られるぞ！）

このままでは捕まるのが確実となった今、この場を逃げ出す手段を超高速で考え出す。

動揺を見せないよう心のなかで深呼吸し、慌てて逃げ去ろうとする体を意思の力で押さえつけた。

「、、ありがとうございます。ですが、これぐらいの軽症、ドクターと上司への報告を優先します。」

「治療を優先しない上官なんていないと思うが？」

「ご心配ありがとうございます。しかし貴方は知らないでしょう？自分の上司がどれだけ怖いか。」

一応それらしい身震いの真似をして現実味を出す。

仕事の失敗で依頼主に殺されかけた経験があるけど反映していないよ、ホントだよ？

「それにこれは自分の業務ですので、それではさようなら。」

とんずらをこくのはこそ泥の必権。

俺は命のためには恥も尊厳もかなぐり捨てて、その場から逃げ出した。

ーーーーーーー

「、、、。」

私は走り去って行く男の背中を眺め続ける。

見た感じは大丈夫そうだが、恐らく体は全身打撲に加えて、脱臼や内出血も起こしているだろう。

「、、、不思議な男だ、」

普通なら動けないほどの痛みのはずだが、どういうわけか男は軽症の類いで済んでいる。

肉体強度ゆえか、それとも訓練で手にした技術故か、特殊なアーツ故か、

男が離れていった今、それを確かめる術はないだろう。

忘れた方が賢明だと考えたその時、突然、そんなものを描き消すかのように携帯機器が鳴り始めた。

『緊急連絡失礼します!シージさん!至急武装してドクターのもとに向かってください!』

機械の向こうから響いてきたのは私の所属する組織の代表、アーミヤの焦ったような声。

「何かあったのか？」
『侵入者です！クロージャさんが襲撃されたました！』
「クロージャの容態は？」
『幸いなことに二アールさんが側にいたお陰で傷はありません！ですがこの時期の襲撃、レユニオンが関係していると思われます！』
　事態は急を要する様子。
『現在、ドクターの指示のもと緊急チームを編成しております！シージさんは早急にドクターの元へと集まってください！』
「了解した、尽力をつくそう。」
　走って自室へと向かう途中、私は先程の男のことが引っ掛かった。
「アーミヤ、少しいいか？侵入者の特徴を教えてほしいのだが。」
『勿論です！二アールさんの情報によると清掃員の格好をしており、背丈は１７５の２０代の男とのことです！
　素顔についてはマスクをしていたこともあり情報はなく髪は「黒髪か？」は、はいそうです！』
　なるほど、つまりあの男が、、、侵入者か。
　私は携帯をしまい、直ぐに武器を握りしめる。

これは少しばかり急がなければならなそうだ。

全身全霊の逃避行の果てにあったのは、、、

ロドスアイランドは基本的にその構造が複雑だ。
移動都市ゆえに国土の1センチすら利用しようと計算された重層構造に、住民が便利に過ごせるよう仕組まれた住宅地を中心に枝分かれした裏道の数々。
初見では迷子になるのは必須のことであった。
とはいえ、道がある以上、進めばどこかは行けて、方角がある以上、目的地へとたどり着くことは必ず出来る。
加えて、俺は無法地帯となった天災の跡地出身。
裏道のような細く枝分かれした道は慣れっこだ。
その上、地図はなくてもロドス出口の場所は分かってる。
だから、迷ってないはずだった。
「あれ?ここの左、道ないんだ。」
なのに、、、
「あれ?ここも?」
なのに、、、

「、、、。」

なのに、、、！

「高い塀、、、右に行くしかないか、、、」

なのに、、、!!

「、、、っ！」

なのに、、、!!!

「あからさまにおかしいだろ！」

お前始めての都市だろ？といわれるかもしれないが、俺にも言い分がある。

俺が道を決めるとき予め確認するのが、建物と影だ。

基本人が建てたものには、場所であったり時間帯であったり、色々と理由がある。

それはその場の環境を見れば大体情報が落ちてるものだ。

故に道筋が分かる。確かに予想でしかないが、今まで仕事で出張に行った都市の殆どが、それで間違いなかった。

だからここまで、全ての予想が外れるのはおかしいのだ。

「なんで！なんでどこもかしこも！壁があるんだよっ!?」

土地感覚が狂いそうだ。

それどころか、このままでなにも出来なかったことに腹が立つ。

「越えようにも高すぎるし、一番上には有刺鉄線！挙げ句の果てには意味の分からない建物まで！なんだこの都市はっ！」

日も落ち始め、誰もいない路地で俺の叫びが響く。

（道聞こうにも誰もいないしよぉ！）

路地にあるのはゴミ箱ぐらい。

本道に戻ろうにも歩いて一時間の距離の場所。

最初に人目を避けて行動したのが間違いだった。

「ホームレスとかいないのかよ、、。」

道のまま来て約一時間、恐らくここはロドスの出口から約２０ｋｍ地点。

飯も休む場所もないため歩き続けるしかないが、流石に疲労がヤバイ。

「、、仕方ない、休憩しよう。」

金属の壁を背に腰を下ろす。

（しかし、この時間帯で、なんで誰もいないんだ？）

時間帯で言えば、今は日が落ち始め。

住宅地に遠くはなっているものの、夕飯時なのに人がいないのは少しおかしい。

（だけどまぁ、こんな変な道だもんな、それに多分ここ付近に飲食店はないだろうし、しょうがないね。）

だが現状の環境がその理由を説明する。
これには納得する他あるまいて。
（休んでる場合じゃないんだよなぁ～、、　多分追手も来てるだろうし。）
休憩時間は約５分。
足を休めるには不十分だが、呼吸は整えられる。
とりあえず今は今後の対策案を考えることに、、
（、、　ん？あれ？今一瞬壁にヒビが、、）
嫌な予感が働いた、
（、、　っ！）
思考がこの異常を分析しようと、変な考えが浮かぶ。
俺は急いで休憩を止め、俺の道を阻む壁のもとへと向かった。
「、、　っ!?」
結論から言おう。
自分の予想が間違っていなかった。
壁は殴っただけでボロボロに崩れる偽物、金属に似せた岩壁っ！
となれば、これは追手が俺を出口に遠ざけるための策っ！
俺は遠回りでも出口へ道なりに走ることにした。

「くそっ！早すぎるだろ！」
姿はない。だが、俺の行く先々に偽壁が用意されている時点で先手は取られている！
恐らく俺の位置も確認済みだろう。
「武器もないのにっ、あぁ～もう、俺ってこんなのばっかりだぁ！」
またも俺はこんな依頼を受けたことを後悔した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

『ドクター、聞こえてる？対象、走り出したよ。』
とある暗がりの屋上、マスクとフードを被った男が通信機片手に地上を眺めていた。
「気づかれたのか？」
『分かんない、けど壁を壊してたよ。』
「、、、勘が鋭いな。」
『どうする？捕まえる？』
「いや、そのまま追っていてくれ、レッド。」
ドローンの荒いモニターに映るのは後方を何度も確認する一人の男。
気づいているのだろうが、その男のまわりには何人もの刺客が放たれていた。
『こちらマドロック、バレたのなら壁を作るのを止めるか？』

「いや、進行の邪魔にはなるはずだ、出来る限りでいい、作り続けてくれ。」
『ドクター、じゃあルートは予定どおりでいいの？』
「あぁ、アンジェリーナ、そのままバレずにマドロックを最終防衛地点まで運んでくれ。」
　ドクターと呼ばれた男は、走り逃げる男を捕らえるためか仲間に細かく指示を出す。
「メイヤー、そろそろミーボの出番だ、分かりやすく対象を追ってくれ。見えるが追い付かない程度の距離を保ち続けてくれたらいい。」
「ｏｋドクター！行け！ミーボ達！」
　屋上から何体もの犬型ロボットが放たれた。
「シー、想定以上に対象の移動が早い。小自在で動きを止めてくれ。」
「、、、わかったわ。」
　そして、男の行く先に放たれる龍に似た鋭い爪を持つ存在。
　男の動きは全員の予想では止まるものだと思われた。
「す、凄いっ！あの人、どんな障壁をものともしていませんっ!?」
「、、、あの正確な動き、特殊なアーツかなにか、、、アーミヤ、どう思う？」
「アーツを使用してる感じはありませんが、、、シージさんの報告では左肩は外れているはずです。もしアーツを使用していないなら相当の実力の持ち主だと思います。」
　しかし男は小自在を攻撃し、作ったスキで飛び越え、攻撃されても全て避けきってい

た。

その動きは男の実力を表し、兎耳を生やした少女を感嘆させる。

ドクターと呼ばれた男はニヤリと笑い、通信機器を再度耳に当てる。

「ブレイズ、対象がポイントαに到達したら強襲をかけるんだ。」

『了解！生きたまま確保を優先するでいいんだよね？』

「私たちの狙いは無傷での目的達成。捕らえられなくても削げれたらそれでいいさ。」

通信機の先は行く先の高層ビルで男を待ち構えるチェーンソーを持った女。

その上、さらにその先には、、、

「ホシグマ、私の予想では恐らく対象はそれでもそっちまでたどり着く。」

『それは凄いですね、ドクターの用意した罠が全く通じないとは。』

「耳が痛いな、だが正直、想像以上の敵だったのも事実。ここからは消耗戦、だからこそホシグマ、悪いが君には対象の心を挫く一ピースになってもらう。」

『なんなりと、ドクター。』

1本の角を生やした緑髪の重装兵。

彼女の手には四方が鋭い刃となった般若の顔が印された盾。

そして、、、

「ただそれでも対象は諦めないはずだ。だから最後のピースとして、シージ。」

『、、、了解した。』
影に紛れ腰を下ろすのは、ハンマー持った一人の百獣の王。
「さぁ、場面は整えた、、最終局面を始めよう。」
ドクターは密かに身を震わせる。
彼らにとって手に入れるべきは身柄か情報か、はたまたその全てか。
男を取り巻く環境は、ドクターの手によって今、完成した。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
「チクショオっ！」
それは心からの叫びだった。
裏道を駆け抜ける足が我武者羅に動き続ける。
「やっぱりバレてたよ！ってことはもう俺の行動は把握済みだよなっ！」
誰に言うわけではない、しかし犬みたいなやつが追いかけ始めた辺りからイラつきが止まらないのだ。
（泳がされてるわけだ、この今も！）
この現状をみたら誰もが分かるだろう。
今の俺に逃げられる余地はない。
入念に用意された土壁、追いかけてくる犬、そして後方で一定の距離を保ち続けてい

る狼女。
全てがブラフか真実か、
ようは情報、人員、知略、地略、戦略、武力、全てにおいて俺が不利。
「いい度胸だ！ここまで来たらやるだけ全部やってやる！」
追い討ちとばかりに見えてくるのは、見たことのない化け物。
その手には鋭い爪があり、喰らったら大怪我は間違いないだろう。
「遅い！その程度で止められるかっ！」
しかし、どこが攻撃してくるか分かるなら、関節がその生物にあるのなら、観察次第でどのように避ければ良いか分かる。
予想通り、化け物は攻撃速度は多少なりとも早いが、大振りで腕を振り回すだけ。
手首辺りに素早く右手で一撃、
振りかぶって来る左肩を右足で蹴り止める。
そして最後に左足で脳天直撃。
その威力で化け物を越え、再度走り出す。
倒す必要はない。今は逃げることに重点をおくべきだ。
「はっ、止められないからって三体に増やすだけか！」
恐らく近くにこの化け物を出す術師がいるのだろう。

視界に突如現れるのは先程と同様の化け物三体。
化け物は浮くことも出来るらしく、頭上を越えられたからと斜め上に礼儀正しく並んでいた。
「芸がないんだよ！出直してこい！」
それならと俺は化け物より早い速度でジャンプする。
負けじと腕を振るってくるが体を捻り避け、踏みつけることで動きを阻止、
横にいる二体も止めるべく振るってくるが、俺は爪の先が縦に重なる一瞬で掴みとり、引きちぎることでその場を抜け出る。
その後も何回も化け物と対峙するが結果は同じ。
俺にとってロドスの罠である化け物は何一つ通用しないことは証明された。
俺の生き残る確率は上昇したのだ。
「、、、っ!?」
だが、左角を曲がろうとする直前、上から一人のチェーンソーを持った女が舞い降りてきた。
「この先は行かせないよ！」
振るってくるチェーンソーに当たれば即死だが、生憎とチェーンソーの重りのせいで動きが遅い。

「だったらもっと訓練してこいってんだ、遅いぃっ!?」
バック回転で避けての足蹴り。
入ると確信した攻撃は、チェーンソー女は軽々と受け止められた。
（ヤバイっ!?体真っ二つは御免だ！）
掴まれた左足はこのままでは動かせないのに、彼女はチェーンソーを片手で動かせる模様。
攻撃されないためには腕を封じる他ない！
俺は右足でチェーンソーを持つ手を蹴り、動かせなくした。
だがこのままの姿勢では、体は地面へ落ち、チェーンソー女の攻撃を抑えることは維持できなくなる。
そんな一見不利な状況。
「寝てろっ！」
しかし考えてみてほしい。
俺は一瞬と言えど両手を使えて、相手は使えないのだ。
これは逆に言えば好機、俺は顎に拳を掠めるべく、顔面に向けて拳を振るう。
「、、、驚いた、君、結構動けるね。」
なのに拳が掠めるのは空のみ。

チェーンソー女はバックステップで避け、あろうことか、チェーンソーを足目掛けて振るってきたのだ。
（危ないっ!?）
地面に手をつけることで逃れたが、右太ももに少しかすってしまう。
動けなくなるほどではないが、激しく動けば悪化するのは間違いないだろう。
「治療したら？」
チェーンソー女が笑って見せる。
「、、、問題ないです、悪化する前に、逃げるので！」
俺はまた距離を詰め、今度は姿勢低く腹を目掛けて殴ろうとする。
しかし、今度は合わせて俺に拳より早く振るわれるチェーンソー、
「あんたも芸が、、、っ！」
俺は体を殴ることからチェーンソーを叩き落とす作戦に移行する、
が、その瞬間、視界の中で微かに女がニヤリと笑う姿が映った。
嫌な勘が働き、足がその場で後方へと飛び蹴る。
「あっづッ!?」
チェーンソーは確実に避けたというのに、焼ける服と真っ赤になる肌。
（そうかっ！この人のアーツは熱系っ！）

あのままチェーンソーを壊そうとすれば俺の手は焼き切れて、後退が一歩遅ければ足が焼き切れる大惨事になっていた。
普通ならここで一旦、さらに距離を取る。
情報の欠如等で不利なのと、体勢の建て直しや作戦の考案などで利点が一杯あるからだ。
だが生憎と、俺には余計な考えを巡らす時間すら惜しい。
（なら都合がいい！）
俺はすぐに女の元へと駆け出した。
女は表情を驚愕で染め、チェーンソーを戻すように振るう。
真っ正面から殴りに来た敵には正しい対処法だ。
正しいが故に、その行動は簡単に読める。
「、、っ！」
まだ女のもとまで到達していない俺は女の顔面目掛けて、後退の時に拾った掌サイズの石を投げた。
体勢が石を避けたことで少し変化する。
左下から右上へと上がってきたチェーンソー。
胸前で止まり繰り出されるは突き。

「っ!?」

俺は後一歩のところで、地面の石を蹴り上げ、顔面へシュートした。

左目を狙ったことで、遮られる視界の左半分。

だから俺は視界が遮られている方向の壁へ飛び、その壁を足場にしてチェーンソー女へとライダーキックを繰り出した。

（今度の今度は対応出来んだろっ！）

速度が勝っているお陰で掴める先手。

左足はチェーンソー女の肩へと届き、空いた右かかとでチェーンソーの側面を蹴り飛ばす。

熱の余波を利用し傷も焼き塞ぎ、痛みはあるものの左肩以外肉体はまともな状態へと戻った。

「はっ！小手先が通じるなんて、ロドスも大したことはないですね。」

作戦が上手く行ったことで調子に乗り、そのせいか口から自然と悪態が出る。

尻餅をついていたチェーンソー女はそれを聞いてか、ゆっくりと立ち上がり、まるで次は格闘戦ですよとでも言うかの如く体の調子を確認し始めた。

「ハハハ、一応、これでも私はロドスのエリートオペレーターを担っててさ、流石にやられっぱなしは不味いんだよね。」

嫌な予感が大音量で働きはじめる。
本能が逃げた方がいいと告げた、となれば、三十六計逃げるに如かず。
「おさらばっ！」
「逃がさないっ！」
今度はチェーンソー女と殴り合い有りの競争劇が幕を上げた。
チェーンソー女の剣幕が凄い。
と言うか、猛攻撃過ぎると言ってもいい。
両手で繰り出されるのは、殴りと突きと掴みの三段階。
基本的に当たったら最後、抵抗する術もなく負けてしまうもので、俺はそれを左肩が使えない状態でしのがなければならなかった。
「ちょっと！こっちは左肩外れてんのに！」
「ロドスは大したことないんでしょ！」
「根に持ってるっ!?」
攻防早数秒、速度は加速し、さばくのにもキツくなってきた、
これは一か八か賭けに出るしかない。
どんどん狭くなっていく通路。
どんどん攻撃と同時に早くなる移動速度。

俺に当たらないせいか、どんどん上がっていくパワー。
右拳が顔面目掛けて向かってきた。
（ここっ！）
その拳に躊躇はない、その力強さが示す通り、恐らくどんなことが起きようと力で捩じ伏せることが決まっている。
避けなければならない。小手先に頼る俺なら一番喰らってはいけない技だ。
「、、っ！」
だからこそ、俺は壁を足場にその拳へ、飛び込んだ。
「チクショウっ！」
その拳が脱臼した左肩へ当たるように。
ゴキンっ
走る激痛に涙を流しながら耐え、肘を曲げることで女の右手を弾く。
そして右拳を左腕に向けて殴ろうとすると、チェーンソー女は自己防衛か使える右手で俺を殴ろうとした。
それこそ俺の狙っていたこと。
俺は予定調和のように、左腕に向かっていた自分の右手を殴りかかってくる右腕へと向ける。

「いい加減にっ！」
これで、女に残された攻撃手段は足以外消え失せた。
それに加えて、俺は女に勝利を疑わない目を見せる。
戦闘において人は、基本的に相手の表情を読む。
戦闘慣れしてる人ほどその傾向が強い。
恐らく、戦闘における感情はどんな物事よりも表情に出やすいからだろう。
だからこそ、それを利用すれば、相手の行動は大方制御できるのだ。
つまり俺は、チェーンソー女にとって一番有効な攻撃手段である足蹴りを誘うことが出来た。
「ぐっ、」
右膝蹴りが脇腹へと入るが、同時にチェーンソー女は右足以外不自由と化す。
「しろやっ！」
俺はその右足を蹴り払い、女の右腕を掴むことで、後方へと渾身の力で投げ飛ばした。
これで、俺とチェーンソー女に距離が出来る。
俺はすぐさま出口に向けて走り出した。
追ってこないと言う確信はない。
が、しかしスピードで言えば俺の方が早いか、少しでも距離が空けば追い付かれない

自信がある。

「ハハッ、俺の、、、勝ちだっ！」

捨て台詞のようにダサい言葉を吐くが、先の戦闘で結構時間と体力が喰われた。

体は休まないとロドス出口まで絶対持ちはしないだろう。

しかも、、、

（、、っ、痛い？、、、うわ、マジかよ、あの女。）

投げる途中に女から、もう片方の横腹を攻撃されたことを、遅く響く鈍痛で理解した。

走る度に息苦しくなり、痛みが走り、足取りが重くなる。

（くそっ、滅茶苦茶休みたい、、、。）

しかし、止まってはいけないと本能が足を進ませる。

休んでは今までの努力が水の泡となると分かっているのだ。

「あぁ、もう！そんなこと言ったって！走るしかないだろっ！馬鹿やろう！」

追ってくる機械犬を蹴り飛ばし、立ち塞がる化け物を殴り倒す。

「消えろ！」「邪魔だ！」「死ねっ！」

暴言を吐きながらも続く攻防。

腹が痛くても、足を止めず、肩が痛んでも、手を止めず、それが約５分間、チェーンソー女と分かれてから道が続くほどに続いていた。

続いていたはずだった。
裏路地へと入り、約2時間後。
「、、？」
あからさまにそれがぱったりと止む。
嵐の前の静けさと言ったらいいのだろうか、前にしか進む道はないと言うのに、前に進めば最悪が待ち構えてる予感がする。
角を抜け、角を抜け、角を抜け、漸くたどり着いた一つのＹ路地。
「、、またかよ。」
進行方向に立ち塞がっていたのは一人の鬼。
盾を持つことから重装兵なのだろうが、見るからにフル装備。
「やっと来ましたね、お待ちしておりました。」
（この人相手に抜けられるかな～、、。）
億劫になる心象とは逆に、鬼は自信満々に口を開いた。
「投降をお勧めします、ここを越えるならば、、全力でお相手いたしましょう。」
鬼が出す圧に俺は実力を知る。
こいつは駄目だ、意識がもう一つの右の道へと抜けようと視線を向けたが、、。
「ここは、、通さない。」

全身真っ白なフル装備をしたハンマーを持つ重装兵が降ってきた。
余りに奇想天外な登場の仕方。
（こいつも不味いっ、今の俺じゃあまず勝てないっ！）
色々混乱している俺は目の前の二人との戦闘における勝率を０％と判定する。
慌てて踵を返す、が、、、
「うげっ!?」
後ろにいたのは大量の化け物と機械犬。そしてリストに乗っていたロドスの指揮官”ドクター”と代表である”アーミヤ”、そして先ほどまで戦っていたチェーンソー女。
これで四方の全ては塞がれた。
（、、あぁ、そうか、、、）
まるで予定調和かのように囲まれた事実。
まるでここに来ることを想定したかのように配置された人員。
まるで完全完璧完勝を狙ったかのように用意された武具の数々。
俺はそこで漸く、この現状が敵により用意されものだと言うことに気づいた。
「ハハッ、アハハっ、アーッハッハッハッハッハッ！」
あからさまな任務失敗。

今まで、何度も失敗を重ねたことはあるが、こんなにも呆気なくも敗北することは経験したことがなかった。

故に笑えてくる。この理不尽さに笑みが溢れる。

「なるほど、最初から俺に勝機はなかったわけね。」

これはこれで色々と諦めがつく。

しかし、それでも意地がある俺にとっては苦笑を漏らさずにはいられない。

「そういうことだ、」

それに答えるかのように、y路地にそびえる建物の影から出て来たのは、見知った顔のライオン女。

「マジかよ、、。」

口に加えるのは煙草か飴か。

その様子に圧倒的な余裕を見せられ、もう開き直るしかないのだと自覚させられた。

「お前は初めから手の平の上だったんだ。」

ライオン女の言い分は正しく、諦めがつくほどに非常にムカつく。

俺は皮肉っぽく笑って尋ねる。

「もしかしてあの時から気づいたんですか?」

ライオン女は何気もなく、まるでそれが当たり前だと言うかのように言い切った。

「いいや、私が気づいたのはあの後だ。だがドクターはその前からお前に気づいていたらしいぞ。」
俺は苦笑をこらえるかのように上を向く。
（なるほど、情報は漏れていたわけね、、多分白銀の狼女にあったときだよな。）
恐怖か武者震いか、足が震え始める。
「戦えばよかった、なんて今更か。」
ガンガンガン、足を殴り、震えを止める。
今から命を賭けて、この人達に勝たなければならない。
「仕事じゃなかったら諦めてるんだけどなぁ。」
「ん?もしかして、私とやる気か?」
ライオン女は戦闘態勢を取った俺に呆れを示した、
「これでも仕事には忠実でいたいんです、」
自分でも馬鹿だと思う。
変な嘘までついて、命を危機にさらすなんて、愚の骨頂だ。
でも、なんとなくだけど、大丈夫だと思ってしまうのだ。
この人達相手には最後まで我儘を貫いて良いと思ってしまったのだ。
「、、嘘が下手くそだな。」

ライオン女は手に持つハンマーを構え直す。
諦めがついたのか、苦笑が限界に来たのか、無意識に自分を嘲笑うように頬が上へと上がる、
「あぁ、ホント、、、俺ってこんなのばっかりだ、」
俺は後は同にでもなれと言う精神で敵の中へと挑み、、、そして呆気なくも、ハンマーに殴られ、気を失った。

脅迫と交渉

「あぁ、これは、、、夢だ。」
それはまるで薄暗い深海の中。
身体は動かず、意識は朦朧とするなか、やけにクリアになっていた視界が、これは現実ではないと認識させていた。
加えて目の前には虚影が現れる。
『あな、たは、、、強い、子、、、』
影像のように映るのは、赤ん坊の頬へと手を伸ばす一人の女性。
手は血にまみれ、その目には慈愛を満たしている。
『どうか、、、幸せに、、、』
しかし、糸が断ち切れるように突如として息を引き取る。
耳には緊急事態を知らせるアラームが鳴り響いた。
「なんだ、、、これ、」
この光景になんの意味があるのか、この時間にどんな効果があるのか、目的もはっきりしないまま虚影を見せられ不快感に満たされる。

それなのに、そんな虚影は瞬きをすれば泡のように消え、光が指すようにまた次の虚影が映し出された。
『な、なんと言うことだっ、、これは、い、異常事態だぞ。』
ガラスの向こうで佇む白衣を着た数人の大人達。
彼らが除くのは椅子に縛り付けられた一人の少年。
『全てのデータが異常値を示している、、これは一から見直す必要があるっ、』
楽しそうに頬を歪ませる大人達とは対照的に、少年は涎を垂らしながらも必死に呼吸をする。
『凄いぞ！ナンバー7！こんなのは始めてだ！』
項垂れるその姿は子供がして良いものではなかったが、スピーカーから聞こえる大人達の声に少年は嬉しそうに微笑んだ。
『凄、い、、、？凄い、んだ、、よかっ、た。』
それはまるで親に褒められた子供のよう。
『あぁ、だから、、、まだ耐えてくれ。』
『嗚呼ア”ア”ああアアアアアぁぁぁっ!!!』
無慈悲にも、大人達が押した赤いボタンで子供の身体に強烈な電流が走り続けた。
「っ！」

見てるだけで心が締め付けられるこの虚影に、俺は思わず目を剃らす。
それの代わりとでも言うか、目を剃らした先で一つの虚影が映し出された。
『ナンバー7！走りなさい！お願いだから、ちゃんと走りなさい！』
いくつかの死体が転がる廊下。
そこを一人の女性が少年の手を引き走る。
その廊下には銃撃音が響き渡っていた。
『皆、皆がっ、、、僕を庇って、、、っ』
『分かってる！それもちゃんと分かってるから、、今は足を止めないでっ！』
白衣を着たその女性は時折、自分達が来た後方へと銃を撃つ。
その姿はまるで誰かを足止めするかのようで、そのはずなのに、憎悪を持った視線は少年へと向いていた。
それでも彼女は連れ逃げるかのように少年の手を引き続ける。
そして彼らがたどり着いたのは、暗号でしか開かない一つの金属扉。
『いい、よく聞いて！この扉を開けたら真っ直ぐ走り続けなさい！息が切れても進み続けなさい！』
彼女は少年の肩を掴み、記憶に焼き付けるためか力強く説得する。
『そうすれば貴方は助かる！貴方だけなら絶対に助かるから！』

しかし少年には少年の想いがあったらしい。
『や、ヤだよ！皆を助けないとっ！もう僕一人なんていやっ!?』
だがそれも力差がなかったら通用した話。
女性は少年の我儘をビンタ一つで黙らせ、目尻に涙を浮かべた瞬間に抱き寄せる。
『ごめんなさい。結局、貴方達を私たちの我儘に付き合わせてしまった。』
『いや、、、嫌だ、、、』
少年は言葉の真意を理解しているのか、いないのか、ただ、涙を流しながら女性の言葉を聞き入れる。
『その上、まだわたしの贖罪に貴方を付き合わせている。本当に、、、ごめんなさいっ、』
女性の操作で金属扉が開かれた。
少年は初めて見る外に一瞬、気を取られて覚悟も出来ていないのに突き飛ばされる。
それはどんな見方でま、どんな理由でも、少年にとっては最悪なこと。
閉じた扉を少年は何度も叩く。
『やだ、嫌だ！嫌だよ！』
『貴方は生きなさい。わたしも含めて、皆が貴方に生きてほしいって、願ったんだから。』
『い、嫌だっ！開けて！ここを開けてっ！『言うことを聞きなさい！』、、、っ！』
しかし扉は開かない。頑固として開こうとしない。

『走れ！生きるためにっ！走りなさい！』
扉の向こうから聞こえるのは銃撃音。
少年は涙を流しながらも、その背中を森の奥へと隠していった。
「止めろ、止めてくれ。」
その姿を見た俺はその虚影から目を剃らしたくなる。
しかし涙を流すほどに願っても動かない身体。
俺の心を知ってか知らずか、周囲を纏うどす黒い靄が追い討ちとばかりに次の虚影を写した。
『駄目だ、これは駄目だ。』
それはとあるスラム街、
銃や刀を装備した少年は下に転がる死体を眺め、一言、呟いた。
『こんなの、、、こんなのはっ、、、』
その嘆きは一種の懺悔によるものか、少年の目には光が灯ってはいなかった。
『こ、このっ、、、化け物、がっ！』
少年の足を掴むのは、もう武器を持つ力すら湧かない死に際の兵士。
少年は無意識に銃を脳天にぶちこみ、首を慣れた手際で斬り離した。
『ぼ、僕はっ、今、、、何をっ、、、』

血糊のついた刀が少年に現実を教え込む。
飛び散った血痕が少年を己の所業を叩き込む。
『だ、駄目っ、溢れるっ、、溢れてしまうっ！』
少年が頭を抱えると同時に、少年の頭に銃弾が掠めた。
少年の動きは止まる。
『、、お前らか、、』
少年の視界の先にいたのは、何人かの進行中の兵士。
少年に恐怖の色はない、少年にあるのはただ純粋な怒りのみ。
『お前らがいるからっ、』
少年は武器を持ち直す。
『許さない、』
肩に銃弾が通る。
『許さない、許さない、許さないっ！』
足に銃弾が通る。
『殺す、殺してやるっ、』
しかし、そんな事実を消すように消えていく傷痕。
少年は目を赤く光らし、理不尽を吠えるように叫んだ

『全員っ、ぶっ殺してやるっ！』
始まるのは戦場では余りに珍しい、多を一が蹂躙する光景。
「頼むっ、もう、、止めてくれっ、」
あまりの悲惨さに俺はその場で頭を抱えた。
だが耳に響く、血肉が刻まれる音と人の断末魔。
耐えられなくなった俺に、虚影を包む黒い靄が手を伸ばしてきた。
身体を伝って口の中へと入ってくる黒い靄。
まるで死んでくれとでも言うかのように俺の呼吸は封じられた。
俺は溺れるようにもがき苦しむ。
「、、っ!?、、っ!!」
全ての虚影が俺のその姿を見て嘲笑う。
（誰かっ、、助けて、、っ！）
夢の中で俺は意識を失った。
★
これは捕らえられて毎回思うことなのだが、目覚めと言うのは意外とすんなりと来るらしい。
不快感の強い悪夢による覚醒に、俺は気づけば自分が寝ていたことを自覚した。

（ここは何処だ、、）
姿勢的に恐らく椅子に座らされている。
手足が動かないことから縛られているのは確実だろう。
と言うことは捕まったのか、、？
「やぁ、おはよう、ずいぶんと遅い目覚めだけど良い夢でも見れたかな？」
手錠の擦れる音を出してしまったからだろう、
俺の覚醒が感づかれ、頭上からは少し低い男の声がした。
「、、貴方は？」
重い頭を持ち上げ見つけたのは、向かいに座る一人の男。
楽しそうにニヤケる男は、なぜかこちらに探るような視線を送ってくる。
「私はドクター、ロドスで指揮官を勤めているものだ。君の持っていたデータには私のことも載っていたが、見なかったのか？」
ドクター、、、あぁ、ドクターか、確かに、、、載っていたような気がする。
、、、ロドスの幹部かなにかで、人心掌握がうまいとかなんとかで、、。
「、、、ここは？」
「ん？ここは取調室、君のような犯罪者に聞き込みを行う所さ。」
取調室、、取調室、、取調室、、、

そうか、俺捕まってるんだ、、、
「俺、、何時間ぐらい、、、寝てましたか？」
「え～っと、半日ぐらいかな、今はもう夜を越えて、、おっと、もう昼だ。」
「、、なる、ほど。」
じわじわと戻ってくる記憶。
じわじわと肌を流れ出てくる冷や汗。
じわじわと積もり積もってくる現状の危機感。
「はっ!?」
「今度こそちゃんと起きたようだね、おはよう、侵入者くん。」
全てを思い出した俺は驚きのあまりガバッと顔を上げた。
ドクターはそんな俺の様子を見て楽しそうに笑う。
「さてと、君もちゃんと起きたことだし、そろそろ尋問に入ろうか。」
優しそうな表情に隠れ切れない鋭い眼光。
見て分かった、この人相手には嘘が通用しない。
「まずは確認だ、君は早朝、輸送コンテナに紛れロドスに侵入。従業員に変装後、貿易所に入り花火事件で錯乱。」
そんな視線を向けられながら始まる尋問。

「第二製造所では二人の従業員を口封じのため気絶させ、その後、コンピューター室でロドスのエンジニア、クロージャを襲撃。ここまでに間違いはないかな？」

頷くべきか、無視するべきか、依頼の規約にも挟まれた俺は取り合えず、現状の打破に尽力することを決める。

「、、、。」

本命と依頼主がいることさえばれなければそれで良い、と考え、ボロがでないように頷くだけ頷いた。

「しかし、強襲は護衛である二アールに阻まれ失敗。逃げようにもうちの二アールが出口を塞いだために窓からの脱出を図る。」

チラッとこっちを見たことから真実かどうかを聞きたいのだろう。

これは隠すほどのことでもないと頷くと、ドクターは声を出して笑った。

「じゃあ、あの映像は本物だったわけだ！アハハハハ！凄いね、君！あんな無防備に落ちてあんな無茶な機動をして退けたわけだ！」

なんだろう、褒められているとは思えない。

「教えてくれないかなっ！君はどうやってあんな無茶を」

『あ、テステス！ちょっとドクター！雑談してないで早く終わらせてよっ！色々仕事が貯まってる上に、私の鬱憤はまだ！』

『く、クロージャさん！取り調べを邪魔したら駄目ですよっ！』
　なんとなくドクターの笑いに腹が立っていると、角にあるスピーカーから怒鳴り声と、それを静止する声が響いてきた。
「、、、あれは？」
「あー、君が襲ったクロージャだよ、もしもし！人体実験は全てが片付いてからだぞ？」
（人体実験っ!?）
『はぁっ!?拷問が終わったら身柄を私にくれるって言ったじゃないのこのｑｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@っ!!』
（拷問っ!?）
　色々と不穏な言葉が俺の周りに飛び交う。
　冷や汗なんてレベルじゃねぇ、これは、、、最悪の事態だ！
「はぁ、出来るわけないだろ、大切な身柄なんだから。用が終わったら良いけど。」
（良いのかよっ!?）
「全く、うちの組員は皆癖が強くて困るね。」
（あんただよ！一番ヤ、バ、イ、の、あんただよっ！）
　ドクターのさらりと告げる死刑宣告に俺はどうしよう！と思考を巡らせる。
　しかし、ドクターはそんなことを考える暇も与えてくれない。

「と、まぁ、仲間がしびれを切らして暴れるのも困るし、そろそろ本題に入ろうか。」
今までのおちゃらけた雰囲気とは一変して空気に鉛のような重さが入る。
ドクターの笑っているその眼光に、かすかに殺気が込められたのだ。
その様子に俺はゴクリの唾を飲む。
「私達はね、君を捕らえた後、短い時間ではあったが最大限の調査をしたんだ。」
デスクにばらまかれるのは、俺が侵入した跡の写真。
そして、ｕｓｂ含め、俺が持っていた道具一式。
その中でもドクターは、ｕｓｂをわざとらしくいじり始めた
「君の侵入経路は勿論のこと、君の実力、君の目的、君の個人情報を含め、出来うる限りの調べられるもの全てを、ね。
そしたら知る必要のないことまで出てくるわ出てくるわ、
会議の末、君の目的は何通りかの結論に分かれた。」
ドクターは淡々と告げる。
「クロージャを含めた幹部の暗殺や戦争前の重度の混乱、他にもロドスのネットワークの破壊やハッキングによる機密文書の収集等。」
ドクターが口にしたのは、何ならそっちの方がよかったと思える策。
色々と複雑な俺は内心同様、百面相になってしまう。

「全部筋が通ってる、それに私達からしたら全て最悪の事態だ。
誰もが正直全ての予測を否定しきれなかった。」
ドクターはやれやれと肩を上げる、
「幹部は一番高い最悪を想定し動く派と、まだ様子を見るの二つに分かれたよ。
ま、しょうがないよね、時期が時期だし。」
（時期？）
俺はドクターの言葉に引っ掛かりを覚える。
「ただ、そんななかでも幹部は共通してゆっくりしている時間はないという思いがあった。
要は、皆、ロドスの安全が欲しかったんだ。
だから幹部たちはある決定を下した。」
しかし、そんな疑問など次のドクターの言葉ですぐに消え去った。
「どうせこの事件は極秘、だったら君をいち早く吊り上げて絞れるだけ搾り取ろう。だって。」
顔が青ざめるのがわかる。
その雰囲気を感じたのか、ドクターは楽しそうに笑った、
「そこでお鉢が回ってきたのが私だ。」

俺の心境なんて気にせず話を進めるドクター。
そろそろ罪悪感がヤバイ。
「何でだと思う?」
「、、性格が螺曲がっているから、すか?」
ドクターの問いにへへっと苦し紛れの笑みで返す。
すると、ドクターは嬉しそうな笑顔に邪悪さが混ぜられる。
「惜しい!答えはね、、私がロドスで一番、嫌がらせが得意だからさ。」
俺の体は無意識にその言葉に反応した。
「勝負事において私はね、一番に相手が守りたいものを攻撃する。」
非常にシンプルで単純な言葉、
「例を出そうか、そうだな〜、、例えば、子供、とか。」
ドクターの口から出るのは俺にとって最低最悪な、一番聞きたくなかった言葉。
「これは体験談なんだが、ちょっと前に子を持つテロリストを相手にしたことがあった。
あのテロリストは強かった。少数だが持ち合わせる戦闘技術は立案した作戦を再度調整させるほどのもの。」
ドクターが話す事実は普通の悪人が聞いても本来ならなんとも思わないだろう。
だが、ドクターは俺に対してはその事実が何よりも効くのを分かってやっている。

わざとらしく、ちゃんと聞こえるように話してくる。
「連携する力も強かった。正直私の作戦なんて使い物にならなかったよ。
だから私はそこで、そのテロリストが一番嫌がることを考えた。
もう、、、分かるだろ？私は子供を拉致する作戦を実行したんだ。」
俺は思わず視線をそらした。
しかし、ドクターの笑い声が嫌でも耳に入る、
「したらどうなったと思う？テロリストはね、簡単に降伏したよ！あれだけ信念やら正義を語っておいて！子供を盾にされたらごめんなさいと土下座だ！あれには本当に笑
「やめろっ！」、、、。」
結論から言おう、俺はドクターの罠にはまってしまったのだ。
恐らく俺を挑発するように放った言葉は、俺という存在を分析するためのもの。
その挑発に耐えられず乗ってしまった俺は負けと言えるだろう。
「何でも屋、ヨルノ。」
笑っていたドクターの表情が真剣なものに変わる。
「悪いことは言わない、お前が行った悪事とお前を働かせた、依頼主を言え。」
決して冗談ではないドクターの一言。
それを聞いた瞬間、俺は自分の立場を自覚させられた。

考えるべきは身の安全か、仕事に対する責任か。
迫られたのは究極の二択を前に、死ねない理由と生きるための最低限のプライドが頭の中で渦巻いた。
降伏を選べば命は助かるだろう、誰も傷つけていないことから減刑だってありえる。
しかしあくまで俺の扱いは犯罪者、その後の安全までは確約されない。
じゃあ、徹底抗戦は？これも結局は意地の張り合いだ。
守ると決めた約束を破ってまで生きたいとは思えないからこそ、そう思うのであって、本質的にどちらの選択も命の保証はないのは事実。
「、、、。」
負けに敗けを重ねるか？
頭に貯まる血を下へと落とすように見上げる天井。
「、、であるならば、選ぶのは両者か。」ボソっ
俺はドクターへ、目を合わさずにこう告げた。
「俺は、、、貴方方が欲しい情報を握っている。」
はったりで良い、俺を殺すには惜しい、それなりの重要人物であると示せればそれで良い。
俺がしたことはまだバレていないのだ、今ならまだお前達と対等だと見せつけられ

る。
「貴方方の明日を決める情報だ。方針を、意志を、大切なものを変える情報のはずだ。」
勿論、今ロドスが抱えてる問題なんて知らない。
「、、、3日後の夕方、報酬の受け渡しがある。」
今後、俺の町にどんなことが起ころうと俺の知ったことではない。
俺には俺の生き方がある。
俺は真っ直ぐにドクターと相対する。
「取引だ。俺を、、、解放しろ。」
罪悪感と不安と恐怖に押し潰されるな、
俺なら大丈夫だと確信しろ。
臆したなら、その瞬間から食い破られるぞ。
笑わなくなったドクターの圧に根性で堪える。
「、、、信頼とは、自分から信じることから始まる。」
俺はドクターの言葉に冷や汗を流す。
「故に人は信頼するため時間を要する。時間をかけ、信頼できる理由を探す。本能で動くものも同様。
それを踏まえて、、、もう一度聞く。お前、今、何て言ったんだ?」

この殺気は本物だ。体は本能に従い強張ってしまう。
「俺を、、、解放しろ。」
俺たちの間に流れる数秒の沈黙。
恐らく後数秒、後一秒でも長くドクターの殺気に当てられていたら、俺は降伏していただろう。
俺が口を開こうとした瞬間、ドクターは急に殺気を消し、楽しそうに両手を上げた。
「分かった、そうしよう!」
「え?」
呆気ない決定に虚を突かれる。
「しかし、私も立場上、ロドスの利益となる作戦を成功させないといけないんだ。君の解放は2日後の早朝。それまでは監視、軟禁に、尋問をさせてもらう。あ、一応言っとくけど子を持つテロリストは嘘話だから安心してね。」
目蓋があまりの事実を受け入れられず、夢ではないかと瞬きの回数を増やした。
『ド、ドクターっ!?』
スピーカーの向こう側の人もドクターの決定にどうやら同様を隠せないよう。
「えっ、と、、本気ですか?」
俺は思わず真意を確かめる。

「勿論。」
ドクターは何食わぬ顔で肯定して見せた。
「な、なんで、、」
「なんでって、、君は私を信頼してくれたじゃないか？
私が嘘をつく可能性も考慮して、私が悪人であるかもしれない事実も理解して、それでも自分の持てる誠実さに逆らわず君は私を信頼して情報を提供してくれた。
なら私も約束するさ、それにこの取引は私にとっても悪い内容じゃない。」
「俺、悪党ですよ？」
「言っただろう？私はこれでも人を見る目はある。
確かに君のしたことは悪事だ、そこに議論の余地はない。
しかし、あらゆる情報をもって私は君と言う人柄を肯定的に捉えたんだ。」
ドクターは優しい顔を向けてくる。
その途端、取調室の扉が開き、なに考えてるんですか!?ドクターっ!?リストで見たアーミヤという少女が入ってきた。
ドクターはよっこいしょ、と立ち上がり俺に屈託のない笑顔を見せてこういった。
「まぁ、要は、私は君を気に入ったんだよ。」
俺は、まるで風船から空気が抜けるようにその場で脱力する。

そして天井を仰いで大きなため息をついて本音を漏らす。
「はぁ、、、運が良いのやら悪いのやら。」
体重を預ける椅子は重みに耐えきれず、俺のため息きにキィと悲鳴を重ねた。

「あ、一応言っておくと、2日と言えど、ここで過ごすからには仕事をしてもらうから。」
「はぁっ!?」
「働かざる者食うべからず。」
「いやいやいや!?俺捕虜ですよっ!?」
「だから?」
「いやいやいや!阿呆ですか!?逃げますよ!」
(自分でいうのもなんだけど!)
「ハッハッハ、まず逃げれないから安心していい。」
「実際逃げれたんですが。」

「最終的には捕まえただろう。
　それに、逃げたら末代まで呪いながら地の果てまで追いかけるだけだ。」
（実際にそれが出きる組織だから洒落にならない。）
「いやー、こんな時期に無賃金労働力を確保できるとはね～。有り難いね～。」
（こいつっ!?俺を扱き使う気だっ!?）
　俺はデスクに顎をつけ、今度はとても大きなため息をついた。
「、、、俺、あんた嫌いです。」
「そりゃどうも。」
　ドクターの笑顔が本気でむかついた

尋問後の会話（ドクター、アーミヤ）

「ど、ドクター、良いんですか？」
「ん？何が？」
それはとあるロドスの廊下でのこと。
取調室から共に出たアーミヤはドクターの顔を覗き込んでいた。
「あの侵入者のことです。あんな約束までして。」
「ロドス代表としての見解は？」
ドクターの問いにアーミヤは思考を巡らせ答えを出す。
「犯罪者として捕らえるべきだと思います。
侵入者をみすみす逃したとあっては、後々、ロドスの評判に関わりますかは。」
「確かにね。ロドスは嘗められてはいけないね。」
ドクターはアーミヤの正しい判断に苦笑する。
「それに、恐らくですが、彼は蜥蜴のしっぽです。
泳がしたとしても大した情報を得られるとは思いません。」
「それも同意だ。時間をかけて侵入じゃなかった時点で、それも外部に依頼となっては

裏を掴むのは困難だと私も思う。」
「だったら、尋問で彼の悪事を暴き、最悪の事態に備えるのが第一だと思います。」
「それもそうなんだけどねぇ～。」
アーミヤはドクターの煮え切らない考えに疑問を待つ。
（何かあったんでしょうか、今までのドクターならもっとこう、、、）
アーミヤにとってドクターの判断は信頼できると判断してる。
いとの掴めない作戦だったとしても、今まではその全てが最後には大きな意味をもっていたという経験があるからだ。
それに元々、アーミヤにとってはトンデモなことがない限り、決まった事実を塗り替えるつもりはない。
たが、ドクターのはっきりとしない判断を、アーミヤは不思議に思っていた。
「ドクターは彼に吐かせることはできないと、考えたんですか？」
「いや、多分だけど彼は演技は上手くても嘘はつけないタイプだ。少し押せば簡単に吐くと思うよ。
と言うか、あんなにコロコロと表情を変えてたからね、もう彼が行った悪事は大体見当がついてる。」
「そうなんですかっ!?」

驚くアーミヤにドクターが手渡したのは侵入者の持ち物であったｕｓｂメモリ。
「これは、、、」
「そのなかには調査結果ではなにもデータが入っていないと言う結果が出た。そうだよね？」
「はい、そうです。なのでロドスの機密データを保存するために持ち込まれたものと、判断されていましたが、、、。」
「そうだね、私も最初はそう考えた。」
アーミヤの瞳に思い出し笑いをするドクターが映った。
「でもね、尋問中、彼の視線は何度もｕｓｂに行っていたんだ。」
「え？」
「私はおかしいと思った。彼の目の前には、データが入ったタブレットも置かれていたんだ。だと言うのに、何回も何回も何のデータも入っていないｕｓｂに視線が行った。」
ドクターからの情報は事件の真相を明かすもの。
アーミヤの表情が真剣なものへと変わる。
「人は基本的に一番心配な物へと視線が行く。
細部にまで渡って検査するよう技術部に。」
「わかりました、最優先でするよう通達しておきます。」

アーミヤのドクターへ向かう視線にはもう疑惑はない。
あるのはただただ、純粋な敬意のみ。
（やっぱりドクターは凄いです。）
自分とは異なる才能と実力。
アーミヤはそれに嫉妬ではなく尊敬を感じ、自信も日々精進しなければやる気を奮い立たせていた。
だが、しかし、、、
「、、あれ？でも、ドクター、そこまで尋問が上手く行くなら、彼から依頼主の情報も収集出来たのでは？」
ふと、気になった質問をドクターへ投げ掛ける。
ドクターは、うぐっ。と声を上げる。
「ん、ん～、出来た、だろうね。」
「なら何故それをしなかったのですか？」
「、、、。」
ドクターはキョロキョロと辺りを見回し、小声でアーミヤに告げる。
「彼が気になるんだ。」
アーミヤは首をかしげ、数秒間考えを巡らすと、えっ!?と顔を赤らめた。

「あ、そう言う意味じゃないよ。ただ、彼の正体がどうも気になるんだ。」
　アーミヤの顔が真顔に戻る。
「え～っと、情報部の報告では、彼は”見捨てられた街”でどんな仕事でもこなす何でも屋として働いてるとのことですが。」
「うん、それは表向きの情報。私が知りたいのは彼の裏の情報だよ。」
　アーミヤはさらに首をかしげる。
「彼に何かあるんですか？」
「ん～、まぁ、勘でしかないんだけど、、 彼は普通じゃないと思うんだ。」
「普通じゃない？」
　ドクターは自身の懸念を指を折り曲げなから伝える。
「まず、データでは彼の殆どの仕事は掃除などの雑務と書いてあった。もしそれが本当なら、そんな一般人が急にロドスになんて侵入する？」
「、、、」
「それに彼の戦闘技術は直接見てわかったが、あれは幾度と修羅場を経験した者の動きだ。いくら見捨てられた街に住んでるとしても無理がある。
　それに、なおさら、ただの便利屋がそんな技術をもっていること自体がおかしい。」
　ドクターの意見にアーミヤも考えさせられる。

「それは私も思いました。彼の動きには典型的な型が感じられない辺り、あの戦闘技術はいくつかの戦場を渡って手に入れたものだと思います。

ということは、、私たちが掴まされたこの情報は偽の情報、、」

ドクターは肩を上げる。

「まぁでも、こればかりは天災後の感染生物の襲来とかがあるから、一概に判断はできないね。」

アーミヤは頷くことで肯定を示す。

「ただもう一つだけ、彼を不思議付ける事実がある。」

ドクターはアーミヤの耳元へと顔を近づけ、小さな声で自分の知っている事実を伝えた。

「気づいてた？彼の体に数時間前に着いた傷がさっき見た限り全て失くなっていた。」

「、、っ!?」

アーミヤは手元のタブレットから尋問中の動画を見る。

確かにそこには顔や首に合った小さな傷は、画質は悪いもののきれいになくなっており、何なら足に出来ていた大きな火傷痕は綺麗さっぱり消えていた。

「ドクター、持ち物検査では彼はアーツユニットを所持していませんでした。」

アーミヤの情報にドクターは悩まされる。

「となると、本人が持っている種族特性か、はたまた生まれつき回復力が高いのか、」
「しかしドクター、私は、、、」
「分かってる。今まで沢山のアーツを目の前にしてきた私達には、彼の能力はアーツによるものとしか思えない。」
元々、ドクターは指揮官が本職ではない。
どちらかと言うと研究職に近く、気になることは調べないと気が済まないたちだった。
それはアーミヤも知っての通り。
だから独りでに悩み唸り始めるドクターを見て、アーミヤはジト目を向けた。
「もしかしてですけどドクター、、、もしや彼を調べたいから取引を、、」
アーミヤの真に迫った推測にドクターの歩む足は早くなる。
「いやーハッハッハ、仕事が沢山あって困るなー。急いでやらないと調べられないやー。」
「あ、ちょっと、ドクター!・ちゃんと仕事はして貰いますからね!」
その背を追いかけるアーミヤ。
二人は廊下の奥へと、その影を縮めて行ったのだった。

正義と悪

それは取り調べも終わり、俺が柔らかな寝床を確保するために動かねばならない時の事だった。

「さぁ！今回もやってきたぜ！第２０回！憂さ晴らし専用格闘大会！」

俺は何故かロドス訓練室に設けられたボクシング用のリングの上に立たされていた。

「ルールは単純！一対一で相手を死に至らしめなければなんでもありのガチンコバトルだ！」

リングの回りには金を握った野郎共。

「進行と解は審判この俺様！インドラが勤めさせて貰う、皆、よろしくなぁ！」

ウェェェェェェェェいいいいいい!!!

楽しく叫び散らかす辺り、恐らくこれは賭け事の一つにでもなっているのだろう。

「そしてぇ！実況はこの二人っ！現役アイドルっ、ソラと！地下拳闘士っ、ビーハンターぁっ！」

どうやら俺は最悪な事態に強制的に巻き込まれたようだった。

「じゃあ早速！第一回戦の出場者の紹介だ！青コーナー！新人オペレーター、ヨールー

ノー！」
ヒュオオオオオオオオおおおおお!!!
あぁ、どうしてこうなったのだろうか。
俺が想像した勾留生活はもっと質素な場所で穏やかに過ごすのではなかったのだろうか？
「ドクターからの話では、この挑戦者は我らが王率いる特殊部隊を相手に何十分と戦闘を続けた記録があるようだ！
喜べ野郎ども！今この瞬間！最高の舞台になることは確定したぞ！」
真向かいにいる人を見て俺は項垂れる。
「そして！赤コーナー！そんな新人が無謀にも挑戦する相手とは、、我がロドスのエリートオペレーターでありながら皆の希望！ブーレーイーズー!!」
フォオオオオオオオオオおおおお!!!
拳を合わせヤル気満々な辺り、多分手加減は一切してくれないのだろう。
というより、俺をボコボコに出来ることに最大限の喜びを感じてやがる。
「なんと今回！ブレイズの提案により、特別ルール！クリーンヒット5点先取が採用されているぜ！」
ため息をつくのはこれで何度目か。

もう色々と抱え込んだ反動か、体ごと放心状態になることは無理もないと思いたい。
「これが何を意味するかわかるな?あぁ、あぁ!その通りだ!このルールは挑戦者にも勝ち筋に残している!」
と、考えたところで無意味なのは現実が証明している。
歓声が沸き上がるこの状況が、逃れられない定めだと告げてくる。
諦めからの後悔か、無機質な天井を見上げ呟く。
「なんでこうなっただろう、、」

遡ることそれは一時間前、、

「さて!そろそろ君の事を教えてくれるかなっ!」
取り調べ中の取引が終わり、形だけの尋問が始まるかと思われた時のこと。
ドクターは学者としての血が疼くのか、それともただ単に俺の肉体の秘密が気になるのか、ロドスの指揮官として聞かなければならないことをすっぽかし、俺の個人情報を聞いてきた。
俺はそれに嫌だと拒否をした。
「じゃあ血を採取して良い!?色々人体検査して良いかな!?」

すると、提案されたのは医療会社故に恐ろしいと感じる検査方法の数々、
承諾したら絶対ろくなことにならないと、取調室の向こうから漂ってくる殺気で理解した。
だからこそ突っぱねる。嫌だと。
「報奨としてお金あげるから。」
金を払う時点でろくなことがないと、同様に拒否。
「あれだ、ロドスの高級店のお店を奢ろう。」
そそられるが後が怖いので、同様に拒否。
「あー、んー、え～っと、あ、そうだ！オリジムシ缶！」
得体の知れない食べ物なんて食べられないので拒否、、
「え、なにそれっ!?」
「いる?」
「いらんわっ！」
え～、美味しいのに、とバリボリと音を立てながら甲羅ごと感染生物を食べるドクター。
俺は嫌悪感を抱きドン引きしていたのだが、ドクターがゴクンっと飲み込んだ後、大きなため息をついてきた。

「はぁ～、これでも駄目かぁ～。」
（何で行けると思ったんだろう？）
「どうしても教えてくれない？ちょっと秘密を喋ってくれたら良いんだけど？」
「そもそも秘密をベラベラ喋るほど親密じゃないでしょう？調べるのは勝手ですけど、俺からは絶対言いません。」
　机に項垂れるドクター。
　職務を全うしろよとは思うが、スピーカーから文句が出てこない辺り問題はないらしい。
　仮にも大都市に位置するロドスがそれで良いのかとは心配になったが、その瞬間、このドクターが何故幹部を勤めるのかを理解した。
「じゃあ、仕方ないね。少しばかり処遇を優遇しようと思ったけど一応厳罰を貸すか。ブレイズー！」
「は？」
　ドクターから発せられる不穏な言葉。
　それと同時に後方の扉が大きく開かれる。
「呼んだ？」
　入ってきたのはいつぞ夜のチェーンソー女。

嫌な予感は最大音量で警笛を鳴らした。
しかし、今思えばその警告はあまりに遅すぎた。
「うん、君の要望どおり、彼にはあれに勤めて貰うことにしたから。後は頼んだよ。」
「え！いいの!?」
「勿論、そろそろ皆の息抜きもさせなきゃいけなかったしね、」
俺はもっと早く自分の処遇について交渉するべきだったのだろう。
「アハハハハ、」
「んフフフフ、」
ロドス組員の二人の笑顔がやけに目に残る。
突如、左手首の腕輪だけ残し手枷足枷が解除された。
俺がえ?え?と戸惑っているとドクターが答えを出してくれる。
「その腕輪はクロージャ考案、磁力による強力接着での腕輪型手錠。電気ショックや爆発、さらにｇｐｓの機能を追加できることからここでは重宝されているものだ。
２日後の昼に私のところまで来たら解除するから、、ヨルノ君、それまではくれぐれも逃げないように。」
何ともまぁ徹底した逃走対策。
さっきまでどうやって隙を作り逃げようかと考えていたので冷や汗が止まらない。

「何を、、させるつもりで？」
さらには追い討ちとしてドクターは良い笑顔で言い切った、
「私考案、ガチンコの殴り合い大会だよ、」

そんなこんなで現在、、

「要は、いいように使われるんだよなぁ。」
俺はチェーンソー女に訓練室へと連れられ、リングの上に立たされていたのだ。
凄まじい歓声に諦めのため息が出る。
「それに、相手があの人な時点で悪意がある。」
真向かいで体調を確認するチェーンソー女。
表情に喜びあることから、これは狙ってのことなのだろう。
「いつぞ夜の再戦をしようって訳ね。」
俺だけがヘッドギアやグローブなどのいくつかの防具をつけさせられている辺り、恐らく容赦はなく、最初から本気で来るのだろう。
適当に負けるが一番良いのは火を見るより明らかだった。
「じゃあ全員いいな！ちゃんとどっちに掛けるか決めたよな！」

インドラと言う名の解説者が元気よく拳を突き上げる。
そろそろ時間らしい。
俺はチェーンソー女同様、リングの真ん中へと進んでいく。
「よろしくね。」
「ハハ、、、 絶対に嫌です。」
「レディ、、、 っ!」
チェーンソー女のこめかみに力が入るのが分かる。
俺は足をちょっと曲げ、いつでも体を自由に操作できるよう腰を下げた。
「ファイト「マジ、かっ!?」っ!」
それが幸を制したのだろう。
コンマ一秒でも横に避けるのが遅れたら、顔面に直撃していたであろう拳、それが頬を掠めるだけ済む。
「ぐぁっ!」
しかし刹那にその拳を横凪にされたことで、避けることの出来なかった俺は顔面から見事なまでに地面に叩きつけられた。
ヘッドギアがなかったら気絶もので間違いないだろう。
「ブレイズ!クリーンヒットっ!ワンポイント!」

起き上がろうとするが脳が揺れたせいか体に制御が効かない。
（は、早い、、、っ!?切り返しが、間に合わなかった、、、っ！）
無様ながらに四つん這いになりながら呼吸を必死に整えることしか出来なかった。
「立て。」
背中から感じる殺気とドスの効いた声。
「ガ嗚呼アあァァァっ！」
チェンソー女の台詞に、俺の生存本能は直ぐ様立ち上がり、殺されないために殴りかかる。
すると即座に、残像でも残すかの如く何度も振り向けられる拳。
（ま、マジかよ！この人！本気で俺を殺しに来てやがるっ!?）
最初の一撃を肘で弾くことが出来たからなんとか凌げたが、一撃一撃がとてつもなく重いことを受けることでようやく理解する。
「おー！凄いです！ブレイズ選手の猛攻撃に挑戦者は手も足も出ません！どう思いますか！ビーハンターさん！」
「さすがはロドスのエリートオペレーターだ！その実力は凄まじいものだぜ！是非私とも戦って「はい、ありがとうございましたー。」、、、。」
そんな時、実況席からの声が耳に入る。

（当たり前だ！こんなの！理不尽すぎるんだよ！）
恐らくだがチェーンソー女は先の戦いで俺の出方は予測済みなのだろう。
俺は肩や足や膝をも使っているのに対し、拳しか使っていないのに攻めきれない。
（くそっ！隙がない！）
俺も対抗手段を得るためにチェーンソー女の戦い方を思い出そうとするが、記憶の中のチェーンソーが邪魔でまず出来ない、
（そもそもな！俺には！武術なんて！ないんだ！）
愚痴りたくなるとはまさにこの事。
戦場で武器が落ちていたりするならともかく、試合形式の武術が物言う勝負では俺は圧倒的に不利。
攻撃が出来ないと悟った俺は、とりあえず怪我だけは避けようと防御に全力を注ぐ。
「緩いっ！」
がしかし、チェーンソー女の攻撃には技によるものなのだろう。
俺の防御が間に合わなくなってきた。
（ちくしょう！ちくしょうちくしょうちくしょうっ！）
それならと、グローブで捌き、直接合わせることで相手の攻撃手段を潰す。
その上で出来る限りの攻撃手段を残そうとするが、防御に全力を注がなければならな

い時点でそんなことは不可能。
（くそっ！何も、、、っ！出来ないっ！）
　要は攻撃において技術のない俺が後手を選ばされた時点で、されるがままなのは明白な事だったのだ。
　さらにはチェーンソー女は全くもって本気ではなかったのだろう。
「はぁっ！」
「、、、っ!?」
　両手を弾かれた上で、俺の間合い外から体当たり。
　全身で諸に喰らった俺はぶっ飛ばされ、ロープへと背中を預けることとなった。
「ブレイズ！クリーンヒット！トゥーポイント！」
　肺が圧迫され、脳が揺れ、目が回り、唸ることしか出来ない俺はさらに無様に床に手をつく。
「こりゃ、またブレイズの勝ちだな。」
　回復のためか不必要な情報をガン無視していた耳が、偶然にも外野の声を拾う。
「ごほっ！がはっ、ごほっ！」
「はぁー、これじゃあ期待外れだよ、まさか、、、これで終わり？」
　さらに、追い討ちとばかりに聞こえるチェーンソー女の呆れ声。

（、、ふ、ふざ、けんなよ、っ！こ、この野郎っ！）

さすがの俺も、それらの声に腹が立つ。

勝手にリングに立たされて、そっちの勝手でボコボコにされて、、

だが、体は動かない。あまりのダメージに回復を優先させる。

「、、ねぇ、1つ、聞いても良い？」

肺が酸素を取り入れ、心臓が脈打つことで全身へと血を巡らす。

「君は、君たち悪人は、、どうしてそこまで他人を傷つけられるの？」

思考は状況の整理に全力を注ぎ始めた。

「君がしたことで何人もの人達が被害を被ったか、わかってる？」

真剣勝負なんだ、他を気にする必要はない。

それならばと視線を目の前の敵だけに向けてしまう。

「何人もの人たちが、貴方の悪事のせいで、どれだけ理不尽な目にあってるか分かってる？」

俺は最大の敵意を持って、チェーンソー女に問いた。

「な、なんで俺に、、そんなことを、、聞くんですか？」

そしたら最大の軽蔑の視線で答えられた。

「私の前で生きている悪人が君だけだからかな。」

俺はその台詞を効いた瞬間、体に熱が回るのを感じる。
まるで今すぐ動き出せとでも言っているかのようだった。
本能も同様、俺の中にある少しのプライドが、本能に戦闘心を抱かせる。
俺はひといきで、顔面目掛けて今度は最速に、最大限の力で、殴りかかった。
「、、、っ!?」
が、そんなのは予測済みか、澄まし顔の彼女は突き出した俺の右手は両手で捕まれ、これはたしか柔道の投げ技だったと思う。
地面へ叩き付けられるかのように俺の右手はチェーンソー女の肩へと持ち上げられた。
「、、、っ!?」
しかし、突如として、チェーンソー女の掴む手は離れる。
距離は一定に離れた。
「ヨルノ!クリーンヒットっ!ワンポイント!」
そして、審判の声がリングに響く。
「おっとぉ!何が起こったのでしょうかぁ!」
その判断に外野からは困惑の声が広がった。
それもそうだろう。あからさまにチェーンソー女に入るはずだった点が俺へと入っ

たのだから。
「ブレイズ選手が投げたかと思ったらヨルノ選手に点数が入りました！これは審判の誤審でしょうか！どう思いますか！ビーハンターさん！」
実況者も困惑している様子。
「いや、これは誤審じゃないぜ！ヨルノ選手は投げられそうになった瞬間にブレイズ選手を殴ったんだ！
投げられそうになった瞬間、普通なら受け身に集中するところを！自身の危険を省みず！いいや！省みたからこそ！ブレイズ選手を倒すことに集中したんだ！」
が、さすがに見えるやつもいたらしい。
外野は疑問と感嘆の声で染まった。
「な、なるほど！だからブレイズ選手は手を離してしまったんですね！」
ヘッドギアなしで喰らった俺の拳。
宙に浮いていたから与えられたダメージは弱かったかもしれないが、それなりに効いただろう。
煽りの意味を込めてヘッドギアと外した俺は、殴られた頬を抑えるチェーンソー女に向かって、最大の嘲笑を込めて言い放つ。
「ははっ、随分と雑魚い正義だ。」

それが引き金か、鬼のような剣幕で彼女と俺は密かな殺し合いが始まった。
技を使うことで最小限の力で相手を押さえつける事を目的とする女の攻撃。
技が使えない以上女を上回る冷静さと反射神経を持って相手を潰す俺のカウンター。
掴み捕まれ、掠り掠め、殴れば殴られ、蹴られれば蹴り、、、
その一部として、俺は運良く、チェーンソー女の両手首を上から掴むことが出来た。
「っ！」
即座にその手を引っ張り、顎に膝を入れようとする。
「甘いっ！」
しかし、自分の腕を捻ることで俺の掴みから逃れ、その腕を振り落とすことで俺を地面に叩き付けようとする。
女の手は後服を掴んでいた。
「おらぁっ！」
だが、それで終われるほど俺も甘くない。
意趣返し、そして反撃とばかりに、足を腹に引き付け全力で女の腹を蹴り飛ばす。
「うぁっ、」
情けない声をあげて膝をつく女に、俺は休む間も与えるかと追い討ちに殴りに行く。
確定ダメージにを与え怯ませたお陰か、俺は先手を取り形勢は逆転した。

「どうした！この程度かっ！」
「ぐっ、」
攻撃は最大の防御、攻撃の手を緩めない。
技術で勝てないならば考える隙を与えなければ良いだけのこと。
「なぁ！教えてやろうかっ！俺が悪事を働いた理由をよっ！」
悪者風に装い、女が一番気になっていることをつく。
すると女は意識の1つが無理にでもそちらに行き、俺の対策に遅れを取る。
ほら、その証拠に、女は戦闘中に出してはいけない驚きの顔を出していた。
「簡単な話だ！儲かるからだよっ！」
殴りに合わせて一つずつ、ネットにいくらでも載っているような事を言い放つ。
「お偉いさんにとって！都合の悪いやつを殺せばっ！七桁の金っ！」
内容なんてどこかの小説で読んだことのあるものを丸パクリだ。
「機密情報！重要参考物！隠し事をさらせば金は八桁にも上るっ！」
でもロドスの組員なんて現実が小説よりも奇なりと知っている連中の集まり。
「街は焼き討ちに！子供は人質に！ははっ！正義様々だなぁ！」
はったりが十分に効く。
ほら！お陰で女はこんな時なのに感傷に浸りやがった！

（攻撃が抜けるっ！）
　勝利を確信、、　出来なかった。
「ふざけるなっ！」
　突如として女の力が急激に上がったのだ。
「かはっ、、、　っ！」
「ブレイズっ！クリーンヒットっ！スリーポイント！」
　攻撃に使用した右拳は弾かれ、防御の力の一切を攻撃へと移していたことから、腹に女の拳が直撃する。
（あ、やっちまった、、）
　俺はスローモーションで動く視界に、女の怒りに満ちた表情が映り理解する。
　女の戦意を削ぐために行った煽る行為は、度が行き過ぎていたのだ。
（これを、狙ってたんだ、、）
　女の歪む顔を見て、調子に乗ってしまったのだろう。
　火に注いでいた水が油になっていることに気づけなかったのだろう。
（不味い！次の一撃を喰らえば負ける、、　っ！）
　女は準備していたのだ。俺に隙が出来るこの瞬間を。
　これは女が掴んだ執念の一撃。

そしてその一撃が生む、勝利の一撃。
「ブレイズっ！クリーンヒットっ！フォーポイントっっ!!」
俺は顔面を殴られる。
「どれだけ人を傷つければ！、、、気が済むのよ！」
盛り上がる歓声の中、恐らく俺だけにチェーンソー女の悲痛な叫びが届く。
（、、分かるかよ、）
後方へと倒れていく最中、
（俺が、、知りてぇんだから、、）
俺の意識は暗闇へと、、落ちてった。

想いの強さ

「なんでよ!」
それは俺の中で、唯一朧気になった記憶の一つ。
実験室のような部屋の中で、弱り切った俺はお姉ちゃんに抱き留められていた。
「約束したじゃないっ!私が頑張れば!この子は傷つけないって!」
お姉ちゃんの体はボロボロだった。
至る所が傷だらけで、着ていた服は焼き破れている。
「なんでっ!なんでこの子に!こんな酷いことをしたのよ!答えなさい!」
そんなお姉ちゃんが睨むのは、白衣を着た俺らがお父さんと呼んでいた大人。
父だった人は薄ら笑いながら身の潔白を説明する。
「何を怒っているんだ?検証を望んだのはそいつ自身だぞ?」
振り返ればあまりにふざけ倒したその様子。
それが姉の逆鱗に触れ続ける。
「ふざけないで!またっ、あんたが!あんた達がっ!この子の優しさに付け込んで!」
「俺は何も言ってないさ、俺はただこいつの要望に応えたで、本当に何もしていない。」

「、、、要望？、、、またっ、ふざけたことをっ！あん「お姉ちゃん、、」、、、っ!?」
しかし、その正しき怒りは守るべき対象だった俺自身が遮った。
「僕が、頼んだんだ、、、少しでも、お、お姉ちゃんの、、、力になりたくて、、」
他意はなく、ただひたすらに、その一心を胸に抱いて、お姉ちゃんの怒りを沈めようとする。
痛みの根本を失くそうと、自分の正しさにしたがって行動する。
恐らく、これが俺の中で最大の愚行。
俺の想いは、何よりも大切なお姉ちゃんを、さらに絶望させるだけだった。
「だから、、、もう、大丈夫、、、だから、ね。」
最悪の記憶だ。
本能が封じるほどの最悪を、夢として強制的に見させられるものの中では一番に見たくないものだ。
しかも、夢なら変えられるかも思った瞬間に、記憶の俺と同様に意識が落ち始めていくのだ。
「、、、許さないっ、」
薄れていく視界の中、お姉ちゃんがお父さんに向かって殺意を抱く姿を捉える。
（、、、泣かないで、、、）

頭に記憶の俺の思考が流れ込んでくる。
感情がその想いで溢れ出てしまう。
「あんた達は、絶対にっ、許さない、、、っ！」
夢の中で唯一動く心の全てが、中後悔と罪悪感で渦巻く。
お前のせいなのに、と悲しみで染まってしまう、
「俺は善意で行動したと言うのに、酷いやつだな。」
「ふざけないでよ！こんなことをしておいて善意ですってっ！嘗めるのも大概に……」
消えていく過去の記憶。
落ちていく視界を復帰した意識がまた違う記憶を写し出した。
「いい、良く聞いて。」
それはお姉ちゃんの部屋のなか。
ベットに腰かけた俺は向かいにいるお姉ちゃんに両手を握られていた。
「私は今から、貴方にあげられるものを全てあげる。」
幼い俺は何一つ姉の言うことを理解できず首をかしげる。
「、、？全部？」
「そう、私が持っているもの全部。」
お姉ちゃんの視線は慈愛に満ちていた。

昔の俺ですら無意識に疑う感情を停止させるほどに愛に満ちた瞳。
「私の知識も、技術も、力も、記憶も全部。」
だから俺はこの時、疑問ではなく心配を口にした。
「お姉ちゃんはなにもなくても大丈夫なの？」
この時のお姉ちゃんの表情はなんとも複雑なものだった。
嬉しいのか悲しいのか、まるで絶望に触れながら幸福を噛み締めるような表情。
でも昔の俺にそれを見抜けるほどの経験はない。
見抜かなければならないのに、その実力はありはしない。
「、、、うん、大丈夫。私には貴方がいる、貴方がいてくれるから、何一つ問題ないの。」
それどころか、自分を頼ってくれていると思い、心が浮わついてしまう。
お姉ちゃんの強い抱擁に安心してしまう。
「だから、受け取ってくれる？私の騎士様？」
してはならない『契約』を交わしてしまう。
「うんっ！」
やめろ、やめろ、やめてくれ、、、頼むから、、、やめてくれ、、、っ！
夢を見る俺は最悪の記憶を前にしてもなにも出来ない。
何をするつもりか、お姉ちゃんが俺のおでこと自分のおでこを合わせた。

「いい？この後、貴方は寝てしまう。疲れはてて、寝てしまうの。
でも、安心して、私は何時までも貴方の中にいる。」
「お姉ちゃん？」
止めろっ！止めるんだっ！その力を、、、使わせるな！
夢に向かって叫んでも、記憶から逃げて忘れようとしても、その光景は変わらない。
「私には貴方がいるように、貴方にも私がいる。貴方は絶対に一人じゃない。ちゃんと、
私が、そばに、いるから、、、」
手を伸ばす。
「だから、どうか、、、自分を責めないでね。」
「え？」
しかし、光景の中で昔の俺が糸が切れたように気絶した。
そして、ベットに寝かした俺のおでこに、お姉ちゃんはキスをして微笑む。
「、、、大好きよ、何時までも。、、、お休みなさい。」
俺は夢の中で気絶した。

ーーーーーーーー

私の目の前には今、床に仰向けで倒れる一人の男がいる。

「はぁ、はぁ、はぁ、」
その男とは因縁とは言えないが、それなりに恨み辛みを向けるほどの関係がある。
故にさっきまで殴り合いを喧嘩をしており、均衡していた戦いは私の一撃で状況が好転した。
（確実に入ったっ、これでこいつは動けないっ、）
後一撃、今度は確実に戦闘不能にさせよう。
私は倒れて動けない男に近づき拳を振り上げようとする。
が、突如として閉じていた男の目蓋から真っ黒な瞳が現れた。
「嫌な夢だよ、、本当に。」
男は視線を下げて私を見る。
そして、一つため息をつき、男は私に問いた。
「なぁ、あんたは、、貴方は俺にどうしてほしいんですか？」
歓声が辺りの声をも消す中で、私の中で渦巻いてたどす黒い感覚が無意識のまま男に私の本音を伝えた。
「消えてよ、お願いだから、、私の回りから、消えて。」
私はその言葉を言った瞬間、自分がどんな酷い事を言ったのかを理解する。
でも後悔より、その男の表情の異質さが先立った。

「、、、。」

男は、微かにだが笑っていたのだ、

貶されて、恨まれて、憎まれて、それを望んでいたかのように喜んだのだ。

「ははっ、まぁ、そうですよね、俺なんてのは生きてるよりかは死んだ方が幾分かは世の中のためになるってもんです。

俺のせいで死ぬ人がいるのだから、そりゃあまぁ、そうですよ。」

私はその姿に異質なものを感じる。

触れてはいけないなにかを感じる。

「でもごめんなさい。俺は、どうあっても、どんなことがあっても、、絶対に、死ねないんです。」

男は後転する動作で体を縮め、足裏をこちらに向けながら床に手をつけた。

私は即座に胸の前に腕を交差すると、予想以上に重い蹴りがその上から放たれた。

「、、、うっ！」

防御したと言うのに私の体は、その衝撃に耐えきれず後退する。

（なにこの力っ!?さっきまでとは全然違うっ!?）

さらに私は驚愕する。

男は私を足場とすることで宙へ浮き、体を二回転させ華麗に床へと着地したのだ。

「そのうえ、何よりも尊敬していた人ととある約束をしちゃったんですよ。」
その一連の動作は華麗の一言に勝る。
「俺の存在を否定するものには、最大の敬意と敵意をもって否定する。」
観客は沸き上がり、制限時間の三分の二が経ったことを知らせるゴングが鳴る。
それと同時に、男の色づいていた瞳が無機質なものへと変わる。
「だから耐えてくださいね。でないと貴女、、死にますよ。」
自分達の存在を、自分達の譲れない意志を証明する最終ラウンドが、男の拳をきっかけに開始した。

約5分後、、、

「はぁ、はぁっ、はぁッ、」
「、、、。」
結論から言おう。
『遊ばれた。』
男の最初の戦法は高い柔軟性に自身の器用さを掛け合わしたようなものだった。
故に本気を出さなくとも技で捌けたし、男が意外な力強さを持ってても工夫のない動

きに対応は簡単だった。
でも今は違う！
どんな理由かわからないが、１２０％まで向上した身体能力に、高い柔軟性と機敏さに加え、彼自身の器用さが合わさっているのだ！
（なんで、、、息の一つも、、上がってないのよっ！）
戦っている間、私の勘は言っていた。男の拳は喰らえば大怪我を負うほどの強烈な武器。
あり得ないほど高い身体能力が産み出す速度は、私が持ち合わせる経験と技術をフルで使ってようやく防げるほどのもの。
私は強制的に全力で防御することしかできなかった。
その証拠で私の体力は、本能が命令した集中に使われ、防いだ場所、腕、肩、足、お腹はその振動が響き渡り痛みを叫ぶ。
「君は、、そんな力を、、どうやって、、っ！」
私は久々に焦り散らかす。
理由は単純、こんな圧倒的な力を見せつけられた私の視界には、まだ男が本気を出していないと結論付けていたからだ。
時間は迫っている。

しかし、このままでは私は負けてしまうのは間違いない。
「下らない問答をするつもりはないです。」
私の時間稼ぎをわかってか、男は床を蹴りだす準備に入る。
（来るっ!?）
突如、男の足が私の顔横にあることを感じた。
とっさにガードするも、あまりの威力に耐えきれず姿勢を崩す。
なのに、後ろから聞こえる着地音。
（ヤバいっ！）
危機感を覚えた私は一つの賭けに出た。
未だに残る男の蹴りの衝撃。
私はそれに逆らうのではなく、後方へと倒れるように体を自然に任せる。
そして体が地面から４５度の角度になった時、床と平行になるように地面を蹴った。
すると、視界の橋で男の拳がこちらに向かってくるのが一瞬だけ捉えられる。
後は私の経験が生き残るために、足を曲げ、男の速度に合わせてその拳に足裏を合わせる。
その拳を足場にして宙を回転し着地。
「、、、っ!?」

賭けの結果、私は奇跡的な防御と仕切り直しの瞬間を得ることができた。
「経験に勝るものなしって聞くけど、、こんなにも、か。」
でもそれに加えて男に、成長のための材料も与えてしまう。
リング外は過去一の盛り上がりを見せているのに対し、私の精神は余りの状況にとても冷静なものとなっていた。
（まだ加速するのっ!?）
だがそれは結果論として、この状況では間違いなく正しい行為だった。
男は自分の攻撃が通じないとわかれば、どうやってか、さらに自身の速度を上げてきたのだ。
（あと一歩遅かったら食らってた！）
あらゆる可能性を考え続けられる冷静さのおかげだろう、私はなんとかその攻撃を防ぐことが出来る。
「ブラフっ!?」
しかし、右手で私の視界から隠された男の左拳の影を見て、第一撃が私の防御崩しに使われたことを悟る。
私は本能が警告するまま、無理やり右膝その腕を蹴り上げ、なんとか男の拳を横へとずらす。

「、、、っ！」
男が次の攻撃な移るために出来た一瞬の時間、その刹那でなんとか払われた腕を体の前へと持っていく。
すると、男が即座に放った再度の右拳がその腕へと直撃し、体には振動だけを伝えるだけにとどまった。
「ぐっ、」
しかし、床に無様に転がってしまうのは避けられない現象。
「くそ、、、っ！」
ゴロゴロと転がる自分の姿に、悔しさと痛みもあったから私は自然と愚痴がでる。
こんな姿、エリートオペレーターである私が見せていいものじゃない。
（まだ終わってないっ！）
顔を上げると蹴りを入れようとする男が映る、
私は恐怖心を根性で押さえつけ、このまま負けてしまうのならばと男の懐へ飛び込んでいった。
男の蹴りは足に当たるが、間合いを縮めたことで痛みは微弱。
ならば！男の反応が遅れた今が決着をつけるチャンスっ！
「決めるっ！」

飛び込み肩固め。このまま床に頭を叩きつけ気絶させてやるっ！
「、、、えっ、」
でも次の瞬間、自分が倒れそうになっていることに気づく。
（マジっ!?）
私は自分の姿勢が、男にしようとしたものと同じことに驚愕し、それと同時に理解する。
男は私の肩固めに力を入れようとした刹那に合わせることで、自身な有利な力比べの土俵へと私を引きずり込んだのだ。
（やだ！負けたくない負けたくない、負けたくないっ！）
私はとっさに、自由な左手で男の腰を掴み、多生の自由しか効かない右手で男の腕を掴む。
「ウオオオリヤァァァァァっ!!」
「、、、っ!?」
そして技とはいえない無様さで、男をリング端へと無理矢理に投げ飛ばした。
しかし威力共に雑魚い力任せな投げが男に効くわけがない。
少し距離が離れた程度しかず効果は得られなかった。
しかも頬には殴られたのか痛みが残っている。

「っ、負けて、たまるかぁぁぁっ!!」
でも、一瞬の時間と自由にできる間合いができたならそれでいい。
負けたくない想いが即座に次の行動に出る。
だからなのだろうか、後から気づいたことだけど、このときの私には冷静な判断はできていなかった。
私の攻撃はシンプルに、小細工も技もなく、ただ単純な力を持ったただの右拳だったのだ。
男は当然ながらに避ける、、、ものだと思っていた。
カーンっ！
しかし私の拳が届く前に、試合終了のゴングがなった。
「っ!?」
その瞬間、私の視界に朗らかに笑う男が映る。
（何で笑って、、）
悪意も、敵意も、殺意もない、尊敬しか感じない瞳。
私は敵だった男を敵と捉えられなくなり、私自身の感情すら分からなくなった。
「ふごっ!?」
「あっ、」

心の整理がつかず、一瞬止めるのが遅れる拳。
止まるものと思っていたからか、避けることも防御もしなかった男の顔面に、私の拳は直撃した。
ウオオオオオオオオオーーーっ??!?!!
最後の最後で決着がついたことに盛り上がる観衆。
男は後方へと吹っ飛び、リング外の床へと落ちる。
「あ、え〜っと、その、、」
審判がお前の勝ちだと示す頷き。
「わ、私の！勝利だぁぁぁぁぁ!!!!」
なんとなく拳を突き上げ、試合の終了を宣言。
勝利に溺れるとはまさにこの事。私は今までにないほどの盛り上りに、底知れぬ達成感を感じたのだった。

「助けて、、、くれませんかね、、、？」

仕事の終わりの談笑

選手控え室にて、、

「、、疲れた。」

壁に背を預ける俺は、眠気を誘うほどの疲労感に静かに愚痴っていた。

「いや～、初戦は凄まじかったですな～。」

「あんなのやられたら俺達の出番がないぜ。」

「けど結局はブレイズの勝利だったからか、運営人からしたら掛け金が巡らず儲からなかったらしいがな。」

「ハハハ！初参戦で嫌われたのかあの新人オペレーター！」

「こりゃあ今後こき使われることになること確定だな！」

「ちげぇねぇ！」

「「アハハハハハハ！」」

目の前では試合が映し出されたモニター前に集まる選手たちが、事情も知らず勝手なことを言ってやがる。

彼らの台詞に文句の一つも言いたくなるが、疲労困憊な上、あっちは俺に気づいてな

いのだから反応するだけ無駄と言うものだろう。
（、、それに、否定できないしな～。）
首にかけた支給品のタオルで汗を拭う。
扇風機が効く中、少し肌寒い。
（はぁ～あ、喉、、乾いちった。）
しかし、そんなことを気にする前に、汗の流しすぎか、体が潤いを求めてることを知る。
捕虜の身としては基本的に勝手な行動は出来ない。
本来なら飲み物を買うために一人行動とか絶対にダメな行為だ。
（、、たしか、この腕輪ってｇｐｓ機能ついてるんだっけ？）
が、しかし、大変な仕事をさせておいて飲み物の一つも買えず、ましてや居場所も常に監視させられて、その上で監視役のあの女がいないのだ。
（、、ま、いいか、さっさと買ってこよう。）
どちらかと言えば、こんな杜撰な警備であるロドスが悪いと言えるだろう。
俺は堂々と飲み物を買うために立ち上がろうとした。
「これ、どうぞ。」
すると、頬に冷たい濡れた感触が伝わってくる。

顔を上げると、そこには緑髪の1本角を生やした女が、ドリンクを片手に俺に差し出していた。

「、、、え～っと、貴女はたしか、、、あの時の、、、」

俺の記憶が、この女を知っていると呟く。

思い出されるのは俺が捕まる直前の戦闘シーン。

「はい、あの時に貴方の行く道を塞いだ者の一人です。名前はホシグマと言います。以後お見知りおきを。」

やはり、あのデカイ盾をもってた人か。

心当たりに納得した俺は、お礼を言いながら飲み物を受けとった。

グビッと水を喉に通すが、なにやらホシグマさんがじーっと俺を見ていることに気づく。

これはなにか雑談しないといけないのだろうか？

「、、、以後お見知りおきをって、犯罪者に言う台詞じゃないですね。」

「そうですか？私はこれでも警備隊の任を受けていまして、危険な者達相手には抑止力として名前を覚えてもらっています。」

雑談がてらにきいたセリフが常人じゃない。

もしかしてこの人はドMなのだろうか？基本的に警察でも人を用意に殺せる人に自

分を覚えてほしいとは思わないが。
「き、危険なことしますね。」
「承知の上です。ですが仕事上、必要なことですから。」
自信満々に胸を張るホシグマさん。
俺はその自信満々な様子に、まっすぐな人だなぁ～、と言う印象を受けた。
（俺にゃあ真似できん生き方だ。）
俺が苦笑していると、とある嫌な考えが頭に浮かぶ。
「、、もしかして、俺の監視役、あの人からホシグマさんに変わりました？」
「ドクターの言った通り、貴方は勘の鋭い人なんですね。
そうです。変更と言うわけではないですが、私は貴方を監視する追加の人員です。」
予想は的中。ホシグマさんは見た目などの外的情報によると、敵に回すととてつもなくめんどくさい人の部類。
「そんなに嫌ですか？」
おっと、感情が表に出ていたようだ。
「いや、普通同姓の人の方が良かったな～、と思いまして。」
とっさに出る本音も合わさった言い訳。
「あ～、申し訳ありません、流石に此方と致しましてもそちらの性癖に合わせるわけに

は、、」

とんでもない勘違いをされてしまった

俺はとっさに言葉の真意を説明する。

「なに勘違いしてるんですかっ！気が楽って意味で言っただけです！」

「ハッハッハ、冗談です。」

くそっ、なんだろうこの、チェーンソー女とは違った面倒臭さは。

ロドスにはまともなやつはいないのか？

「ちなみに私が選ばれた理由はドクターによると、貴方が女性を苦手にしていると思ったから、とのことです。」

「あの性悪野郎め、、、っ！」

訂正、ロドスのトップにあんなやつがいる時点でまともなやつなんてここにはいない！

「この短時間で十分に嫌われてますね、ドクターは。」

当たり前だ！どんな思惑があったかは知らないが、俺をこんな目に遭わせた本来の原因は判断元であるドクターにある。

普通、罰則なら清掃とかそこら辺なのに、それを踏まえてなお、わざと俺をぼこぼこにしたんだ。

結果的には俺の自業自得だから文句は言わないが、俺の怒りは当然のもの。
「それはそうと、、、」
怒りに身を震わせていると、ホシグマさんの声音が微かに変化した。
「貴方と戦ったブレイズさんのことですが、、、」
「なんです？」
「試合中の彼女の言葉はあまり気にしないであげてください。」
こんなこと言うのもなんですが、とそう呟かれた事実に俺は虚を突かれる。
「、、、聞こえてたんですか？」
確かにそれなりにデカイ声ではあったが、歓声でかき消されるものだと思っていた。
聞こえたとなればそうとうの地獄耳
「いいえ、なにか怒鳴っているな、ぐらいではっきりと聞こえたわけではありません。ですが、自分は人の口の動きで何を言ったか大体わかってしまうので。」
それはそれは、なんとも便利のようで不便な特技で。
（しかし、聞こえていないのならこれはチェーンソー女の名誉的に誤魔化した方が、、、いや、俺が気にすることじゃないか。）
関心と共にバレても仕様がないと考える。
となると、誤魔化すより、自分の中にある疑問の解消を優先してもいいだろう。

「あー、俺が聞くのもなんですけど、、あの人に何かあったんですか？」
俺自身、他人に憎まれるのは正直、どうでもよかった。
気分は当然ながらに悪くはするが、世の中をどう生きるか決めるは本人の自由。
自由に生きている俺だからこそ、誰に敵意を向けられても特に気にはしないことを信条にしていた。
しかし今回は、そうもいかない。
真っ正直に、その想いをぶつけられた。
憎めない痛みで、その想いをぶつけられた。
彼女の強さをもって、体にその想いが刻まれた。
（今は、良い機会だ。）
分からないなら分からないままで良かった。
でも今、俺の目の前にその答えが転がり、それを掴むことが出来る。
俺が求めていた答えへと手を伸ばすと、ホシグマさんは苦しそうに目蓋を一瞬だけ歪め、苦笑するように表情を戻した、
「最悪な話です、前の任務で彼女が特に守りたかった人達が、特に嫌う人々に理由もなく奪われたんです。」
（なんだ、良くあることか。）

予想通りの答えに俺は、そうか、と特になにも感じない。
しかし、個人的にチェーンソー女の想いの強さを知りたい俺は、どんなにつまらないことでも話を聞きたくなる。
、、、これは事前確認が必要だな。
「俺、常識疎くて、あまり気を遣えないんですが、、、その内容は聞かない方がいいですか？」
俺は小説が好きだ。パッピーエンド、バットエンド、なんでもござれ。
俺が好きになる条件はただ一つ。そこに俺の興味を引く物語があるかどうか。
「私はお勧め致しません。貴方にとっては気になることでしょうが、先程言った通り、最悪なだけの話ですから。
聞くだけ気分を害するものと思われます。」
ま、この人がここまで言うのだから、俺が聞いたところで無意味なのだろう。俺が楽しめる内容ではないはずだ。
それに他人の不幸自慢なんてのは、聞くだけ虫酸が走る。
俺はこれ以上その内容に触れることはしないと決めた。
、、、とは言え、この重い雰囲気、フォローぐらいは入れておいた方がいいのだろうか？

「一応言っておきますけど、、俺、別にブレイズさんを恨んではいませんよ。」
頭をガシガシとかきながらそう呟くと、ホシグマさんに目を見開き驚かれた。
「、、あんなに理不尽な目にあったのにですか?」
「まぁ、確かに、振り返れば随分と酷い目には遭いましたけど、そもそもあの人の怒りは尤もなことじゃないですか。」
俺は理不尽な過去を何ともないように平然と告げる。
「他人の命を思いやれる人が、命を弄ぶやつを嫌うのは、何一つおかしくない、当たり前のことですよ。
それこそ、私利私欲で何の責任も持たず人を殺せる奴なら特に。」
「、、、」
「今回死者は出てませんけど、もしかしたら、何人もの人が死ぬ可能性がまだあるんです。なら俺が恨まれるのは至極当然だと思いますよ。」
人の価値観は、簡単に他人には受け入れられない。
「悪人にも命はありますよ?」
ホシグマさんは何を理解したいのか、なんともつまらないことを尋ねてきた。
俺はそれに、溜息をつくように、あたかも当然のように、自分の考えを話す。
「この世は因果応報、命を大切にしない奴の命が雑に扱われても仕方がないんじゃない

ですか？
だって、命を大切に、扱わないんですから。」
まぁ、そんなこと言っていたら、お前はどうなんだって話になるよな。
「だから俺自身、人間として悪事を働くなら、それ相応の恨み辛みを買うことを覚悟しています。」
勿論、俺だってそれなりには分かっている。最悪の場合俺が死ぬことがあったのもわかってる。
その覚悟が足りているかどうかは知らないが、まぁ、俺だけが死ぬのなら特に大した問題ではない。
俺は生意気に、ワザとらしく笑って見せた。
「その証拠に、今回の一方的蹂躙劇は甘んじて受け入れたでしょう？
あんなのはもう御免ですけど、もうあの人に対して思うことはありません。」
今度は訝しむような視線を向けられる。
「随分と聞き分けのいい悪党ですね？」
俺はペットボトルに残った少しの水を煽り言い放つ。
「知らないんですか？生き方を、自由に決められるから悪党は悪党なんです。」
一瞬だけうらやましいだろ？と頬を上げて見せると、ホシグマさんは突然に笑い始め

た。

周りの視線が集まることに恥ずかしさを覚える。

が、笑い終えた後に言われた次の発言に俺は不快感を感じた。

「なるほど、ドクターがあなたを気に入った理由がなんとなくわかった気がします。」

しかめっ面になるのが自分でもわかる。

「嫌でしたか?」

その様子を見たホシグマさんは苦笑した。

「いや、俺からしたら誰に興味を持たれようとどうでもいいんですが、あの人に関してはなんとなく嫌悪感を抱いてまして。」

「嫌悪感?」

「何というか、気を許せば全てを持ってかれるような、、」

俺は弁明のため、自分でもよくわからない感情を抽象的に説明する、

「手玉に取られたことからの苦手意識、でしょうか?」

流石は人生経験豊富なお方。近しい答えが簡単に出てきてくれる。

「それもあります。ですけどそれだけじゃないような気がするんです。何て言えばいいのかな〜、、」

けど、まだ違う。俺の感覚はそれじゃあピンと来ない。

まだ何かあると、頭のなかでドクターを表す言葉を思案する。
「そう、例えばアイツに似てる、、、と、、、か、、、」
答えのでない問いにしびれを切らした俺の思考は記憶のなかでドクターに似てる人物を探しだす。
思い出されたのは一人の男。
俺がかつて父と慕い、そして同時に存在自体を否定した男の姿。
「あぁ、なるほど。」
自分の心情を整理して一つの答えに合点の行った俺は、ホシグマさんにもわからない一つの結論が出す。
「似てるんだ、あいつに。だから俺は、、、」
「あいつ？」
俺はドクターの才能や在り方に、俺が忌み嫌った父の背中を重ねていたのだ。
嫌な記憶がフラッシュバックする。そんな時だった。
「あいつというのは一体「ラウンドフォー！ファイトっ！」、？」
突如、モニターから審判の声が響いてくる。
驚いて視線を向けると、チェーンソー女の楽しそうな表情が映っていた。
「、、、ん？あの人、仕事放棄してバリバリ元気で遊んでませんか？」

確かチェーンソー女は着替えと汗流しに俺をここに放置したはずなのだが、今現在、俺の監視を放棄して試合に参加している。

ジト目を向けながら職務怠慢を指摘すると、ホシグマさんは苦笑しながら理由を説明してくれた。

「私が提案したのです。貴方の監視を引き受けるので、溜め込んだストレスを発散してくださいと。」

「八つ当たりされずに済むから喜ばしいですけど、でも犯罪者の監視より優先してるのはヤバいでしょ。」

「そこはブレイズさんが言っておりました。貴方なら大丈夫だと。」

なんとも自信満々な表情に当事者の俺が、頭を抱えた。

（ロドスは本気で大丈夫なのだろうか、流石にお人好し、と言うか他人を簡単に信じすぎでは？）

普通、どんな理由があろうと危険人物を野放しにするだろうか。

俺が侵入できるぐらいロドスの警備態勢はザルだと言うのに、捕まえた上でもこんな意識では何が起こっても不思議じゃないぞ？

俺が珍しくも心の底からロドスの未来を心配していると、ホシグマさんが可笑しそうに笑いながら追加でとある事実を伝えてきた。

「同時にこうも言っていました。貴方は確かに悪人だが、ちゃんと想いに答えてくれる誠実さはある、と。」
「、、、。、、、簡単に信用しすぎですね。」
「あ、照れてますか？」
「、、、。」
、、、全く、急に褒めないでもらいたいね。反応に困っちまうよ。
呆れたように見せたにも関わらず、呆気なくバレた俺は照れ隠しで口を手元で隠し、そっぽを向く。
「挑戦者！ノックアウトっ！ｗｉｎｎｅｒ、ブレイズっ！」
するとモニターから、また審判の声が聞こえてきた。
再度、モニターに映るのは嬉しそうな表情をするチェーンソー女。
（まぁ、もう、なんでもいいか。）
俺は気づけば、盛り上がった平和な空間に、彼女の魅せるその笑顔に無意識の内に絆されていた。
お陰で全ての困り事が、どうにでもなると、自信を持ててしまう。
安心と言えば良いのか、疲労による眠気が微かに襲ってきた。
「そう言えば、俺はもう試合、と言うか仕事はしなくて良いんですか？」

「はい、大丈夫です。あれだけ盛り上げて頂ければこちらとしては十分ですから。」
（そうか、ならもう体を休ませたいな。）
休息をとりたい俺はよっこらせと腰を上げる。
「なら、もう留置場へ案内してもらって良いですか？そろそろ休みたいので。」
「留置場？なぜですか？」
が、ホシグマさんが首を捻るから腰が宙で止まる。
「な、なぜって、、、え？俺が本来いるべき場所はそこなんじゃ？」
お互い首をかしげるほどに話が噛み合わない。
けど突然、ホシグマさんは思い付いたかのような声を上げる。
「あ、なるほど、そういうことですか。」
嫌な予感だ。これは相当に、、、嫌な予感がする。
「確かに貴方の本来の拘禁場所は留置所ですが、今回は極秘裏と言うこともあり場所が違います。」
冷や汗を流す俺を他所に、ホシグマさんは最高の言い笑顔でこう言い放った。
「貴方を拘禁する場所は、ロドスが基地内部に設置した我々職員の休憩場”宿舎”です。」
俺はあとでこう思い知ることになる。

俺の本能の警笛のスペックはクソザコナメクジである。

彼のひみつ

「はてさて、今ごろ彼はどうしているかな？」
それは侵入者を捕まえて2日目の、彼からしたら実質最初の夜。
私は一段落した仕事の息抜きに、彼のいる宿舎へと足を運んでいた。
「話じゃあ特に何かを企んでいる様子はないらしいけど。」
監視を任せたホシグマの定時連絡では、彼の仕事中ブレイズと一悶着あったようだが、彼のファインプレーで無事解決したらしい。
普通なら問題を発生させ、混乱に乗じて逃げ出すのが犯罪者の基本的思考なのだが、彼は律儀に私との取引を守る様子がある。
だからこそ、あまり彼について心配はしていなかったが、流石の私もそれなりに現状を確認する義務がある。
「まぁ、何かあったら取引は無効、やることはしないとね。」
私はあらゆる懸念を確認するべく、宿舎の扉を開けた。
「ひぃぐっ、、、うぐっ、、、」
「っ!?」

すると、まず視界に映ったのは、床に崩れように座り泣く侵入者、ヨルノの姿だった。
向かいのソファーに座るのは、監視を任せた1人であるシージ、仕事終わりのクロワッサンとエフイーターの三人。
「ナニコレ？」
宿舎には似合わない、一見何かしらの虐めが起こったような様子にすっとんきょな声を上げてしまう。
すると丁度酒の並ぶ棚の前にいたホシグマと目があった。
「ドクター、来てたんですか？」
「うん、仕事が一段落したからね、休憩がてらヨルノ君の様子を見るためにも立ち寄ったんだけど、、、このありさまは何？」
「アハハ、、、これには色々と事情がありまして、、、」
ホシグマにしては濁すな～、と思っているとテーブルの上に、何かの液体が入ったコップと積み上げられたお金、そして賭け事でもしていたのか散らばったトランプが目に入る。
「お、ドクターはん！今、新人に先輩の実力を叩き込んどったんやけどドクターもやる？」
「、、、何してたの？」

「お金を賭けたトランプゲームだよ～。」
「連続１０回最下位であの有り様だ。」
なんと、予想通り賭け事をして、侵入者である彼が大負けしたらしい。
しかし、彼がそれぐらいで涙を流すような魂だろうか？
私は疑問を解消するために机の上に置いてあったコップを手に取り嗅いでみる。
「お酒、、、まさか、飲んだの？」
アルコール特有の匂いを感じた私は、ホシグマとシージを交互に見た。
「私は飲んでないぞ、ほら、これはただのお茶だ。」
シージはコップを揺らし無罪を主張。
「わ、私も飲んでいません。ですが、、」
ホシグマも無罪を主張するが、何処か言い淀む様子。
「、、、。」
ジト目を向け、自白を強要すると、ホシグマは観念したのか苦笑混じりに口を開く。
「説明しますと、、、」
～～～～～～～
「賭け事？」
「そうや！どうや？やらんか？」

それは夕食も済み、隣にバーがある宿舎でのことだった。
極秘裏と言うこともあり、新人と言う肩書きを強制させられていたヨルノは、夜間の仕事前に暇潰しがてら宿舎を訪れたクロワッサンとエフイーターに勝負を挑まれていた。
「なんで俺なんです?」
当然、全く知らない人からのこの誘いには、ヨルノも困惑する。
「そりゃあ、君と親睦を深めたいからだよ。」
「いや、その理由も含めて意味がわからないんですけど、、、」
エフイーターが理由を説明するも、気に入られた理由がわからないヨルノは困惑したままだった。
しかし、それはクロワッサンの高ぶったテンションにより判明する。
「あれ見たでぇ〜!ブレイズはんとの真剣勝負!
あんなの見せられたらそりゃあ気になるってもんやろ!」
納得したヨルノはめんどくさそうに表情を歪めた。
「あぁ、なるほど、言わば物見遊山ですか。」
「正解っ!」
「まぁ要は、今後活躍するかもしれない新人とは縁を作っておきたいってだけだよ。」

そして大きなため息をつき、遠い目をする。
「、、、これは少し、目立ちすぎだなぁ～。どうにか存在感を消せればいいんだけど。」
ヨルノの愚痴に二人は呆れたような声を出す。
「もう遅くない？」
「多分やけどもう血の気の多い輩には目をつけられとるで。」
今度は、肺の中にある空気を全て吐き出すかほどの大きなため息をついた。
「ありゃ、気にくわなかった？いいやん。人気者やん。認められとる証拠やで？」
「血の気の多い輩な時点で良い分けないでしょう？」
「あたしはどんな相手でも認められるのは好きだけどな～。」
「流石俳優、言葉に説得力があるな！」
「貴女はそうでも、俺は目立つのは嫌いなんです。認められてもそれ以上の厄介事に襲われるのが世の常ですし、現にこうして面倒事が押し寄せてますから。」
ヨルノは胸の前で腕で×を作ることで拒否を示す。
「取り敢えず、俺はしませんよ。利益が確定しないことほどやってて虚しいことはありません。」
「「えぇ～、、、」」
二人は彼のその様子に不満を覚えたが、彼の表情が確固たる意思を見せていることに

気づく。
「う～ん、それなら、仕方ないわなぁ～。」
　諦めたかのようなため息にヨルノは安堵するも、エフイーターとクロワッサンの二人はヨルノの向かい側のソファーにドスリと腰を下ろした。
「じゃ、最初はポーカーからやな。」
「え、最初は大富豪しようよ。」
「ん？」
　そして拒否したにも関わらず、ヨルノの前に投げられる数枚のカード。
「ええで、じゃあ大富豪を最初に、、、となると人数が少ないな～。」
「私もしよう、ちょうど暇だしな。」
「あ、シージさんもやる？」
「あともう一人ぐらい欲しいとこやけど、、、お、良いとこに！バイソン坊～！」
　続々と集まっていく参加人数。唯一常識人のような少年もクロワッサンの説得により参加が決められる。
「ＯＫ～、これで人数は十分だね。」
「いや、あの、だから俺はしないと、、、」
「掛け金どうしようか？最初だしコイン一枚にしとく？」

「やな、ルールも1位総取りにするか。」
「だから俺は、、、っ！」
ヨルノの声を少年以外の誰もが無視し、そして今まさに始まろうとする瞬間、彼に視線が集中する。
「ほら、君からやで、時計回りに始めよう。」
有無を言わさない女性人の圧。ロドスで働く者の精神的強さを垣間見たヨルノは、これ以上何を言っても無駄だと悟り財布からワンコインを外に出す。
「、、少しやったらやめますからね。」
ここまで強引に自分を誘う女性陣の目的を理解できないまま、彼は拒否するよりもさっさと始めて終わらせた方がいいと解釈し、そのゲームへと参加してしまった。
その結果は約5分後、、、
「な、、なっ、、、!?」
ヨルノ手札3枚、他全員手札ゼロ。
勿論大貧民はヨルノに確定した。
圧倒的大破にヨルノは驚愕する。
「あー、新人君。、、流石に、、、弱いよ。」
エフイーターの呆れにも混じった哀れみの視線にヨルノはぐっと唇を噛み締める。

「顔に出すぎなんだ。何を待っているのかすぐ分かる。」
流石は大富豪シージのお言葉。
どうにか否定しようにも、結果が何よりも全てを物語る。
表情で分かるあんたらの方がおかしいと、常識を介して文句を言いたくなるが、あからさまに自分より年下の子が出来てる時点でそれは無様な言い訳になる。
ヨルノは反論も出来ず自分の実力のなさを自覚することしか出来なかった。
「まぁ、最初なんやしそんなもんちゃう?次やろうや次。」
「そ、そうですね!つ、次は勝てば良いだけの話なんですよ!」
悔しさからか次のチャンスの提示にまんまと乗っかるヨルノ。しかし又3分後、、
「い、イカサマだっ!」
ヨルノ手札4枚、他全員ゼロ。
ガバッと立ち上がったヨルノは大富豪となったクロワッサンへと詰め寄る。
「言い掛かりやなぁ〜。」
手札を配る前にシャッフルしたのは彼女であるのと、今度は圧倒的速度で敗北したことから、流石のヨルノもイカサマだと確信した。
「言い掛かりなもんですか!あからさまに始めから俺の出る幕なかったでしょ!いくら大貧民スタートと言っても限度があります!」

「自分の運のなさを棚にあげちゃあいかんで。」
「そうだそうだ～、それにイカサマなら証拠を出せぇ～。」
しかし、ヨルノには確信はあってもそれを裏付ける証拠が一切ない。
唯一指摘できるのは、スタートからパイソンと言う少年がクロワッサンにジト目を向けていた事実のみ。
「うぐっ、、、そ、そうですけど、、」
ヨルノは悔しがることしか出来なかった。
けど、そこに意外な助けが入る、
「そこまで疑うなら次は貴方がシャッフルしてみては？」
助け船の主はお盆に色のついた液体をいれたグラスを乗せるホシグマだった。
「これどうぞ、」
ヨルノの手にオレンジ色の飲み物が手渡される。
「ありがとうございます！そうですよ！次は俺がシャッフルしますからね！」
「ええでぇ～。」
「僕は構いません。」
「あたしも別に良いよ。」
「好きにしろ。」

起死回生のチャンスはまたも彼の手に。
ヨルノは貰ったグラスの中を一気に飲み干した。
（ん？オレンジジュースか？それにしてはなんか味が、、ま、いっか！）
何か変な風味を感じ取るが今は勝負に集中したい気持ちが強い。
「それじゃあ！始めますよっ！」
ヨルノはシャッフルしたトランプを全員に配り始めた。
５分後、、ヨルノ敗北
「ホシグマさん！もう一杯お代わり！」
さらに五分後、、ヨルノ敗北
「お代わりっ！」
さらに五分後、、ヨルノ敗北
「お、、おぉ、、おか、、わり、、」
さらに五分後、、ヨルノ大敗北
「なんでぇ～、、なんでなんだよぉ～、、」
ついにヨルノは自信の敗北を認めるしかなく、床に手をついた。
「ここまで来たら逆に才能やな。」
「途中からシャッフルでイカサマして負けるとはねぇ～。」

「あれだ、お前は嘘がをつく時、顔と動きで出すぎだな。少しは自制しろ。」
「あの～、大丈夫ですか？」
面々の物言いに何も反論が出来ないヨルノ。
パイソン君だけ優しいね！やったね！
「まぁ、どちらにしろ、敗けは敗けや。ほらほら、掛け金掛け金。」
「うぅ～、ち、ちくしょうっ！」
そして奪われるは財布の重さ。
ヨルノの心はボロボロとなった。
「負けた、、圧倒的に、、負けてしまった。」
知らずのうちにアルコールをがぶ飲みしたからか、ヨルノは泣き出しそうなぐらい顔が真っ赤になる。
財布を握りしめる姿はどことなく哀愁が漂っていた。
「しかし、大富豪はもう飽きたな。」
「そうだね～、これだけ勝ち続けると流石にね。次は別のゲームしようか？」
「はぁあ！勝ち逃げするつもりっすか！まだ終わらせませんよ！」
「やめたほうが、、、」
「俺はまだ！負けてない！」

しかし、シージとエフイーターの呟きにヨルノは過剰に反応する。
いつもなら懐の寂しさにこんな子と絶対にしないのだが、アルコールとはとても恐ろしい。
もうヨルノに正常な判断は出来なくなっていた。
「じゃあ、ポーカーでもする?」
「ぽー、かー?、、、しましょう!ホシグマさん!お代わり!」
「もうそれ以上飲まないほうが、、、」
掲げるグラスが何よりもその証拠となる。
まだ賭けれることの嬉しさに舞い上がったヨルノはパイソンとシージ以外の不適な笑みに気づけず酒を飲み干す。
「僕は知りませんからね?」
そして約３０分後、、、
一回戦：ヨルノ「ぶ、ブタ、、」
二回戦：ヨルノ「Ｊのスリーカード!」
パイソン「ごめんなさい、フラッシュです。」
三回戦：ヨルノ「フハハハハ!２と３のフルハウスだ!」
クロワッサン「残念、８のフォーカードや。」

四回戦：ヨルノ「す、すすす、ストレート、とと。」
エフイーター「ごめんね、フルハウス♪」
五回戦：ヨルノ「、、、ワンペア。」
シージ「ストレートフラッシュ。」
結果的に全ての勝負に負けたヨルノであったのだった。
（パイソン君は嫌な予感がして終わり次第逃げましたとさ。）
～～～～～～～
「とまぁ、このように、負けては酒を飲みを繰り返して、、、。」
ホシグマが1合の酒瓶を揺らし、中身がないことを示す。
「お酒に弱いのか2合を飲み干した辺りで、、こうなりました。」
呆れるべきか、叱るべきか、私は起きてしまった取り返しのつかない事実に頭を抱える。
半ば自業自得な部分もあるがそれはホシグマの飲ました酒が原因でもある。
こちらが後で攻められても文句は言えないだろう。
「うぐっ、、、うぅ、、」
しかし、隣から聞こえてくるすすり泣く声。
「で、彼はどのくらい負けたの？」

「財布を空にする程度やな。いやー、儲かったわ。」
「おぅ、それは気の毒に、、、」
出来るなら取り返してやりたいところだけど私もトランプゲームは苦手とするところ。
掛け金が高くなる場合はしないことに決めているのだ。
「ちなみに聞くけど強制ではないんだよね？」
「最初はちょいと無理矢理誘ったけどな～、三回目からは酔ってたのか煽ったら簡単に乗ってきたわ～。」
「ぐすっ、、、ぐすっ、、、ん、、、」
「そりゃあ、自業自得だね。」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」
おっと、どうやら聞こえていたらしい。
彼が正気なら絶対恥ずかしがっていたであろうほど、彼は泣き始めてしまった。
慰め方を知らない私はどうしたものかと悩んでいると、シージがため息をつき立ち上がる。
「ほら、食べろ。」
「うっぐ、、、ずびっ、、、ん、、、」

何ということだろうか、シージが飴玉を差し出したかと思えば、侵入者君はそれを舐めることに集中するためか泣き止んでしまった。
「お～っ、なんかスゴい。」
私は思わず関心してしまう。
「こんなのは子供をあやすのと同じ要領だ、なにも難しいことじゃない。」
シージーは特に気にも止めることなく、侵入者君をお姫様抱っこで抱き上げる。
5センチほど身長差からその様子はまるで姉に抱き抱えられる弟そのもの。
まぁ、慰められる弟としてはデカすぎるが。
「ドクター、こいつは寝かしてくるが、いいか？」
「あ、待って、少し聞きたいことがあるから私も行くよ。」
私は慌てて移動しようとするシージを止める。
酔っている今だからこそ聞けることもあるだろう。
だがその前に、、、仕事と散らかった宿舎を片付けるために指揮官らしく指示を出す。
「ホシグマ、後で任務の詳細について連絡する。それまではここで休んでてくれ。ブレイズにもそう伝えるように。」
「了解です。」
「そして、クロワッサンとエフイーターはここの片付けをすること。」

「「ええ～っ！」」
「じゃないと私の権限で儲かった分は強制回収するが。」
「「誠心誠意頑張らせて頂きます。」」
ようやく、私の臨機応変な指示によって宿舎で起きた問題は解決へと至った。
名目上の新人をいびったあの二人には後で罰としてキツイ仕事を回すとしよう。
そして場面は宿舎の仮眠室へと移る。
「、、、。」
ベットの上にはシージの言葉に素直に従い、ベットへと潜り込むそれなりの実力者であった侵入者がいる。
「これは、、 尋問は無理かな。」
私は彼の酔いまくっている様子に、こりゃだめだと諦めのため息をつく。
一応仕事上聞かなければならないことがあるのだが、状況的に彼の口から正しい回答が返ってくるか分からない。
嘘とわかるならそれはそれでやりようはあるのだが、これではそれすら不可能。
「ん？普通に聞かないのか？」
「聞いても真実かどうかハッキリしないから意味はないかな。」
「、、 ちょっと貸してみろ。」

私はシージに現在滞っている問題のリストを渡す。
駄目もとでも何か聞き出すつもりなのだろうか？
「おい、寝る前に一つ聞く。お前はいつも、便利屋として日銭を稼いでいるのか？」
ぼーっとどこか虚空を見つめる彼は、シージの言葉に素直に首を縦に降る。
「ということは、今回みたいな危険なことをいつもしているのか？」
「、、、違う。シスターと会ってからは、、、そんなに、、」
「シスター？お前は家は教会か？」
「、、、住まわせて、、、もらってる。」
何ということだろうか、彼がここまでアルコールに弱いとは。
真実かどうかはわからなくても、シージを信頼しているのか、それなりの情報が引き出せることに私は驚いてしまう。
「、、、彼女らは知っているのか？お前の仕事を。」
「知らない、、、はず、、、知ったら、、、止めに、、、来るだろう、、、から。」
「危険とわかっててなぜそんなことを続ける？」
そして彼は瞳に少しの涙を貯め、悔しそうに語った。
それはひとつの、彼のあり方を決めた情報。
それは間違いなく、彼の生き方を決めた情報。

私は確信させられた。
「だって、、、それでしか、、、護れない、、、。」
これは真実だ、と。　紛れもなく、彼が思い、感じ、記憶した情報なのだと。
結論から言おう。この瞬間、彼がただの金目当てでここに侵入するほど馬鹿ではないと理解させられる。
「君はこの仕事をして何を得る?」
私はシージの後ろから、彼の意識を覚醒させない音量で最重要案件を尋ねる。
それは、彼の行く末を予測するのに必要なひとつのピース。
それは、私がロドスをより良い未来へ導くために必要なひとつのピース。
それは、私たちと彼を取り巻く問題の行く先を決める、重要なピース。
「皆を養えるお金と、、、皆の自由、、」
私の描く未来の絵は、これで完成した。
「やっぱり、最悪のシナリオだったか。」
私は近くにあった椅子へと腰を下ろす。
下ろして、、、思い付いた私たちだけの最善の選択肢に対し、、、なんとも言えない感情に襲われた。
「どうしたドクター?大丈夫か?」

シージが私の変化に疑問を覚え、その優しさで私を心配してくれる。
「、、、っ、」
しかし私の理性が、まだ確定していない先を伝えるべきでないと本能に警告した。
私の感情が、余計な苦しみを仲間に押し付けるべきでないと私の心を抑止した。
私は司令官として、軽々しく開いた口を無理やりにでも閉じ、表情をいつも通りに戻す。
「、、、大丈夫、、、続けて。」
そして上官らしく、シージに、仕事を優先させた。
「お前にこの仕事を強制させたのは誰だ?」
だが、いくつもの質問でようやく意識が戻ってきたのか、彼はうつ伏せになってこう答えた。
「言え、、、ない、、、大事な、、、契約、だから、、、」
、、、恐らくここいらが尋問の限界。
酔っているから聞けることが増えていたが、彼自身に守るべき約束を思い出してしまった時点でこれ以上聞けることはないだろう。
「ロドスに何をしたかは?」
「それも、、、無理、、、」

やはり、これ以上は警戒心を抱かせるだけだな。
私はシージからリストを回収する。
「ん？もう良いのか？」
「職務上聞くべき情報はほぼ手に入ったよ、ありがとう。」
ロドスにおいて、知るべきことは知れた。
ロドスの未来のため、指針を決めるのに必要な情報は手に入った。
ロドスの在り方を否定しないため、するべきことの決め手となる情報は手に入った。
だから、、、
「だからこれからは、、、私の私情から来る尋問だ。」
そして彼の枕元まで椅子を近づけ、私は彼の顔を覗き込んでこう尋ねた。
「ヨルノ君。君の力を、私に教えてくれ。」
彼の口を軽くするには、私は出来るだけ褒めて、彼の調子を元気付けさせる。
「君は強い。その身体能力、その五感の精度、そして回復力、どれもが一般人のそれとは駆け離れていた。」
彼の心に住み着く警戒心を溶かす必要がある。
「その中でも回復力はずば抜けている。戦闘記録を見返したけど、あれは治癒なんてものじゃない。あれは、、、そう、、、まるで再生のようだった。」

しかし、好奇心は一度でも火が着けばなかなか消えない。
思っていたのとは違い、本音がポロポロと零れてしまう。
「けど再生をもとにすると何かスッキリしない。
私の思考が、君の異常性が高い身体能力と、そして狙いどおりに高められる五感がそれでは説明がつかないと言っている。」
となればこの際だ、酔っているのだから気を遣う必要もない、
私は自分の持つ好奇心に身を任せ、直球に、彼へと向き直る。
「教えてほしい、君のアーツは、、どんなものなんだ?」
褒めて緩めて探る作戦。これが普通の取引相手なら表情の少しの変化で成功かがわかる
彼の表情が上機嫌に変わるのであれば、今この瞬間彼の警戒心は解かれたことになる。
つまり目的通り、彼の気分が上がったのなら目的を達成できる、、はずだった。。
「これは、、強さ、、なんかじゃ、、ない、、」
しかし、私の期待とは裏腹に、彼の表情は苦虫を噛み潰したような表情へと変わる。
「これは、、遺産、、なんだ、、」
彼の声音が今にも泣き出しそうな少年のものに変わる。

「こんな俺のために、、、死んでいった皆の、、、唯一の形見、、」
彼は枕に自分の顔を埋める。
「それは、、、その力は一体、、」
まるで暗闇の取り残された子供のように、あまりにか細く、あまりに弱々しく、彼は私の質問にこう答えた。
「、、、不老不死、、」
まるで殴られたかのようだった。
爪先にまで電気が走るような衝撃が頭をかけ抜ける。
私はこれでも専門家の一人。
彼の力が全人類の夢であることを知っている。
全人類の到達点であることを知っている。
全人類の禁忌であることをわかっている。
だから私は、とっさに彼に詰め寄り叫んだ。
「一体それは!それはどんな!どんな能力なんだ!」
肩を掴み、打出の小槌のように情報が出ることを期待して、彼の体を揺する。
「頼む!教えてくれ!たの「無理だ、ドクター。そいつはもう寝てる。」、、、っ!」
しかし、結局は私が一番に知りたい情報は得られずに終わる。

彼は気づけば死人のような穏やかさで、静かな鼻息をたて眠りについていた。
揺すってもおきない辺り、酔いの限界が来たのだろう。
ならこれ以上は聞いても無駄だ。
「、、ふぅ〜、」
私は冷静になるためにも深呼吸をし、意識を切り替えて、シージに指示を出す。
「シージ、彼の監視は3時間毎の交代制にする、だから後二時間半よろしくね。」
「了解だ。」
「詳細は後で送るから、勤務時間が終わり次第、絶対に休むこと。」
「勿論そのつもりだ。ドクターこそ、何があったかは知らないがあまり抱え込まないようにな?」
「、、努力するよ。それじゃあ、また後で。」
私は立ち上がり宿舎を後にする。
そして窓に写る私の顔を見つめ、覚悟を決めるためにも呟いた。
「絶対に暴く。それが私たちの、為になるならば。」
私の言葉は虚空へと消えてった。

ロドスでの最終日

それはロドスに留置される最終日のこと

「さて、ヨルノ君、まずはどこから回ろうか！」

俺は最初、てっきり昨日の仕事よりもうんざりするような、それこそ血反吐を吐くような肉体労働させられるものと思っていた。

「…ソウデスネ、ドコデモイイト、オモイマス。」

だって俺はロドスからすれば無賃で働かせられる労働者。

「そうだな～、私のお勧めとしてはねぇ～、…」

（聞いてないし…）

ドクターのような使えるものはなんでも使う人種にとっては願ってもない都合な良い存在なんだ。

「最初は貿易所かな！」

そのせいで、昨夜の記憶を思い出せない俺は、こき使われて使い古されるものと思っていた。

「場所が場所なだけに最初に紹介すると後がスムーズになるんだけど…安心して！ちゃ

んと貿易所にも見所はあるから！」

しかし現在、何故か俺は後ろにシージさんを連れてドクターと共にロドスを歩き回っている。

ロドス内を歩き回されている。

「うちの貿易所はね～、なんと言っても目玉は最適化された管理プログラム！」

歩きながらロドスに関する授業を受けさせられている。

ドクターにとってこの時間は疑似休暇みたいなもので、そのお陰で俺とは対照的にテンションが馬鹿高い。

故に逃げられない。

「本来、輸入や輸出に関しては、機器による解析の次に人の手による確認で安全確認をしなければならない。

時間が取られるね。ほとんどの企業は現にその工程にあり得ないほど盗られているよ。

けど、そこで出てくるのがうちの特殊プログラム！」

（はぁ、なんでこうなったんだろう）

ドクターの目的は何か？

有効に使うでもなく、こき使うわけでもなく、ただ手を引かれ連れ回されるだけの今

日。

少しでも疲れを取り除きたいのに、積もり積もっていく疑問の数々。

「最新機器と人の手により得たデータを収集後、整理し独自に解析！そして各項目事に分類し優先順位を判断！問題が生じ次第、従業員へと送られる詳細！」

（なんなんだ？今更こんなことして、俺に何を求めてんだこの人は？）

別に見学自体は良い、血反吐を吐くような仕事をしなくて済むのならばそれはありがたい限りだ。

だがしかし…

「その上！従業員のデータを事前に入力すれば仕事の割り振りをも最適化が可能！どうよ！この凄さ！本来なら効率を最大限重視すると確実な安全性と最速の処理能力は生えられないんだよ！」

（あ、ヤバい、とてつもなく面倒くさくなってきた。）

問題はこのドクターだ。存在的に嫌っているこの人が、まるで旧知の友人のごとく自然に俺を先導する。

俺の先を行き、俺に知識とロドスに対する感情を植え付ける。

どうせなら気を遣う身にもなって貰いたいものだ。

今ですら発言一つで首が切られるかも知れない現状に億劫しているのだから…

「それを成すのが我がロドス！実際に見て貰うけどロドスの貿易所は他でも類を見ないぐらいに優秀なんだ！」
「あぁ、本当に…」
俺は疲れたかのように空を仰ぐ。
「さぁ！到着したよ！見に行こうかっ！」
そして独り言のように、願うなら俺の気持ちを気に求めないドクターに届くようにこう呟いた。
「休みたい…」
しかし、その願いは聞き届けられなかった。
ーーーーー
貿易所にて…
ドクター「さぁ！実際にやってみよう！」
ヨルノ「はっ!?俺がっ!?無理ですよやったことないですし！」
エクシア「あ！ドクター！良いところに！その人今暇？」
ドクター「どうかしたの？」
エクシア「なんか輸送中に事故があったらしくてね！急遽在庫にあるものをコンテナに運ばなくちゃいけないんだ！だからどうしても人手が必要なの！」

ドクター「あぁ、そう言うこと。肉体労働なら丁度いいね、いいよ、使って。」
ヨルノ「えっ!?ちょっとっ!?」
エクシア「ありがとう！一時間で終わるから！」
ヨルノ「ちょっとぉぅ!?結局肉体労働かよォォォォォォ!!!」
製造所にて…
カシャ「そこはカット、次に5分のとこまで字幕を入れて。」
ヨルノ「め、面倒くせぇぇ…っ！」
カシャ「ちょっと、誤字ってるよ、ちゃんと直して。」
ヨルノ「うぐっ！」
カシャ「そんなフォトサイズじゃあ映像が見にくいじゃん。作るときはちゃんと見る人の気持ちになること。」
ヨルノ（知るかよそんなことォォォっ!!こちとら初心者でぶっつけ本番でやらされているのにィィィィィィ!!）
ドクター「…頑張ってるなぁ～、」
製造所2にて…
ヨルノ「ウォォォォォォォっ!!重いィィィィィっ！」
サイレンス「そりゃそうでしょ、金属のインゴットなんだから。」

ヨルノ「なんで俺がこんなこんなことをオオオオオオオ!!」
サイレンス「はい、それは二番区画納品しておいて。」
ヨルノ「チクショオぉぉ！作成はボタン押すだけで済んだのにィィィィ!!」
サイレンス（そんなに重いなら横の滑車使えばいいのに。）
ドクター「ん～、ベルトコンベアで自動化したほうが効率が上がるかな～、、よし、後でクロージャに相談するとしよう。」
加工所にて…
ヨルノ「まぁ…流石に今回は俺は手を出しちゃいけませんよね。」
ドクター「これは流石にねぇ～、雑務とは違って間違ったら損失デカいし。」
ヨルノ「ナノフレーク、結晶回路、融合ゲル…あれ？確かここで作られたの昇進に使われるんですよね？」
ドクター「そうだね、ＳＯＣも使うよ。それが？」
ヨルノ「何に使うんです？」
ドクター「…」
ヨルノ「いや、作戦記録はわかるんですよ、見て技術を覚えてレベルアップってのは特におかしくはありません。
でも昇進素材は基盤だったり鉄だったり科学物質だったり…これらって一体、何に

使ってるんですか？」
ドクター「…あー、え～っと…武器の強化…とか？」
ヨルノ「じゃあ、ＳＯＣは何に？」
ドクター「…」
ヨルノ「ドクター、あんたまさか…知らないんじゃあ…」
ドクター「よし！次行こう！」
ロドスのとある廊下にて…
ドクター「ちょっとそこに立ってみて」
ヨルノ「？はい」
ドクター「ぽちっとな」
ヨルノ「ん？え!?ちょ、ちょっと!?床っ!?床が動いてるっ!?」
ドクター「どうよ！ロドス名物！通称動く床！」
ヨルノ「ヤバいヤバいヤバいっ!?ヤバいってこれ落ちるってぇ!?」
ドクター「本来なら安全確認をとってからの運用になるんだけど、今は私がいるからね。
今回は特別にドクター権限で動かしちゃう♪」
ヨルノ「何言ってんだこのド阿保！早くこれを止めてくれぇ！このままじゃ！このま

まじゃあ!?」

ドクター「横にも動くよ～」

ヨルノ「ぎゃあああアアアアアア!?落ちるウウウウウっ!?止めてくれえええええええ!!!」

シージ「…騒がしいな」

・・・

・・

・

「お疲れ」

昼過ぎて約二時間後、さんざん連れ回された俺はあまりの疲労に床に腰を下ろしていた。

そんな俺に横の自販機で買った飲み物をシージさんが渡してくれる。

俺はそれを受けとり、わざとらしくも大きなため息をついた。

「…はぁ、この数時間でロドスに詳しくなってしまった」

喜ばしいことか無意味なことか、疲労の代わりに手に入れたのは、個人的に今となってはなんの役にも立たない情報。

「…へっ、使えなそ」

無価値とは思えないが、今後それの利用法は見つからないだろう。
だってこの仕事が終われば誰にも見つからないよう逃げ出すしてロドスとは無関係になるのだから。
「驚いた、お前は売ったりすると思ったんだが」
俺の嘲笑交じりの一言にシージさんが反応する
「売りませんよ。というかまずもって売れませんし」
「そうか？ロドスの情報を欲しがるものは多いと思うが」
「そんなに恨まれてんすか、この企業は…」
返ってきた言葉が物騒にもほどがあるが、俺は呆れながらも常識を説く。
「あのですね、今日手に入れた情報なんてのは、ここに来れば手に入れられるものですよ。
需要はあれど供給が無限なものに、誰が大金出すっていうんですか？」
確かにと呟きながらも納得してくれるシージさん。
それなりの達成感を感じたが、ふとシージさんの先ほどの言葉を思い出す。
「てか、今気づいたんですけど、俺、金のためならなんでもするゲスのイメージが着いてんですね」
「違うのか？」

「否定はしませんね、実際ここにいることですし」
俺だってそれなりに信条ぐらいは持ち合わせると言いたいところだが、今となってはそれが守れてるのかすら怪しい。
まず、信条を優先するなら今回の仕事だって受けはしなかった。
欲に目が眩むとろくなことがないね。
「…しっかし、ドクターはなんで俺にこんなことするんだろう」
これは元々不思議に思っていたことだ。
急なドクターの接近と接触。
面倒臭いものは臭いし、嫌なものだが嫌なのだが、目的がハッキリしない以上それはとても不気味で怖い。
「昨日、何かあったのかな?」
「…さぁな、私は理由を知らないぞ。」
それなりに納得できそうな答えを期待したが、どうやら何も聞かされていないらしい。
これは、、、本格的に何か企みがあると見た。
「片腕犠牲にしても逃げ出そうかな?」
思考が警笛を発すると同時に、俺のとなりにあるあるドアがガバッと開かれた。

「いやぁ～！お待たせ！やっと諸事情が片付いたよ！…って、どうしたの？そんなに身を引いて？」
　狙ってのことなのかバッチリのタイミング。
　余計な思考をさせないところがドクターらしいとも言えるが、俺は思わずドン引きしてしまった。
「いえ、何も…で、次はどこに行くので？」
　取り敢えず立ち上がることで、何でもないように取り繕う。
「ん～、どこ行こっか？」
　しかし返ってきたのは気の抜けた言葉。
　ガクッと体の力が抜ける。
「正直主要な場所は見回ったんだよね。
　別にまだ紹介出来る所はあるんだけどここからは私の趣味みたいなものだから」
（どちらにしろ、俺が楽しんではないことに気づいてほしいんですけどね！本当に!!）
「制御室は案内しないのか？」
「流石にあそこは関係者以外はね。後で私がアーミヤに怒られてしまうよ」
　ドクターは俺のほうに向き直り、リストが映ったタブレットを渡してきた。
「それに時間もそろそろ限られてくる。だからこれからは君のみたい所を中心に回ろう

かなと」
「え～、別にどこでも…」
「もし候補がないのであれば私考案、全力ロドス体験コースになるけど」
「全力で選ばさせて頂きますっ！」
俺はすぐさまそのなかから一番気になるものを探す。
訓練室、事務室、応接室…
（うわ～、どれも別に興味ねぇ～）
しかし、内容のどれもが、なんの専門家でもない俺にとっては見たいものじゃない。
俺は溜まった疲労もあるのか、気づけば楽で休憩できる場所を無意識的に選ぼうとしていた。
「…ん…？医務室？」
そんな俺の目に止まるのはリストの中にある一つの施設。
内容は以下の通り、
ロドスにおける最新医療機器を集約することで感染者は勿論のこと、あらゆる病気に対して治療を行う医療施設の繋ぎの場所。
主に受付や診察の面で使用されている、とのことだった。
「この医務室って感染症の治療の様子も見れるんですか？」

「勿論、今なら患者の声も聞こえるんじゃないかな？何？医療設備に興味あるの？」
「いやまぁ、知ってて損のない情報ですし…それにあいつらの治療にも金はかかるからな～。」
今の世の中において医療知識は多少なりとも必須だ。
無知は罪、何一つ親切さがない社会なのだから金があろうと騙される可能性は大いにある。
となれば、表向きでも製薬会社であるロドスの行う医療の詳細を知ることは、人生において必ず利益になるだろう。
俺は無言でタブレットを弄り、顎に手を当て悩んでいると…
「医務室の近くには孤児や障害者、何かの事情を持つもの達を集めた保護施設がある」
ドクターが横から俺の思考に口を挟んできた。
「全てを教えることはできないけど、ロドスに住居を持つにあたっての条件ぐらいはそこで確認できるけど…どうする？私がいる今だからこそ調べられるよ？」
ドクターから発せられた言葉は、第三者からしたら繋がりのわからない内容。
俺の行動を操るのに必要なのか、不明な内容。
その証拠にシージさんはドクターの挑発的な態度に首をかしげている。
（マジかよ…この人）

しかし、本人である俺からしたら、ロドスの幹部であるドクターと直接的な取引をしている俺にとっては、その言葉に必然的に選択肢を奪われる。

俺はドクターに本気で呆れた視線を向けた。

「…本当に俺のこと調べたんすね。しかもそれなりに詳しく」

「私は事前準備を怠らない質でね、それも君ほどの秘密を持つものならなおさら」

「はぁ、マジであんたは何を企んでるって言うんですか…」

どうせ聞いても答えないだろうから、これ以上追及はしないが、これは乗った船。

どうせ俺には得しかないのだから従っておいても損はないだろう。

「じゃあ、もう案内は任せます。どうせ仕組んでるんでしょうし」

了解と笑いながら呟いたドクターは俺からタブレットを受け取ると、案内するためか前を歩き始めた。

俺は溜息をつきながらもその背中を追う。

しかしその最中、唯一状況の把握ができていない監視のシージさんが話しかけてきた。

「どういうことだ?なんでお前は医務室を選んだんだ?」

ま、まじか、マジかこの人っ!?俺が秘密にしていることはさっきの会話と雰囲気で分かっただろうに、ずかずかと遠慮なしに聞いてきやがったっ!?

どうしよう…っ、正直に言うことも出来ないし、言わなければ空気は重くなってしまうっ。

（あー…え～っと…そうだ！ここは濁して伝えることにしよう！）

「あー、あれですよ、ロドスは一応は製薬会社なわけじゃないですか、その医療設備が知れれば、それなりに役に立ちますから」

「ならなんで保護施設にも行くんだ？」

わざとか？わざとなのかっ、この人はっ!?

もしかして俺から情報を抜き取るためにこうするようドクターに言われたのか!?

「え、え～っとですね、、あ、そうです、ロドスがちゃんとまともな仕事をしているかを確認をしようかと。」

「なんでお前がするんだ？」

「、、っ！」

言葉に詰まった俺はドクターに懇願する視線を向ける。

「え～、ここまで来たら全部言ってあげればいいじゃん。私も合っているか確認したいし。」

すると帰ってきたのはニヤニヤとしたイラつく表情。

駄目だ、こいつも敵の一人だったっ!?

俺は頭を抱えこの追及からどうにか逃げ出そうと思案するが思い浮かぶことのない解答。

「、、ん～、、あぁぁぁぁぁもうっ！」

溜まっていた疲労もあり、こんな無駄な問答自体が面倒臭くなる。

だから俺は全てを振り払った。

「知りませんよそんなこと！秘密です秘密！誰が言うもんですか！」

初めからこうやって拒絶すればよかったのだ。

どうせ今日で終わる関係、気を使う必要すらない！

「あらら、振られてしまった。」

「案の定、気を悪くさせただけだったな。」

やはりわざとやっていたんだな！と反応するだけ負けだろう。

早足で先を行く俺は後方にいる二人に向けて叫ぶ。

「ほら！くだらないこと言ってないで案内するなら早くしてください！来ないなら先行きますよ！」

笑いながらも追い抜く姿にイラつくが、ここで感情任せに動いても無意味というもの。

俺は落ち着くため気づかれないよう小さくため息をつき、頭を掻きながらこう呟い

た。

「、、、本当、この人たちといると調子が狂うな。」

ーーーーーー

医務室にて、、、

ヨルノ「へぇ〜、意外と保証はちゃんとしてるんですね。」

ドクター「そりゃそうだよ。ロドスは慈善事業じゃない、けど救いたい思いはみんな等しく持ってるんだ。

だったら救える分は救う、お金がない、仕事がない、社会的信頼がない、それでもロドスが提示する条件を飲めるなら最大限の治療は施すよ。」

ヨルノ「等価交換ですか？」

ドクター「命に価値をつけてる時点であまり信頼性はないけどね。」

ヨルノ「無償でやる、なんて言うやつよりかは十分信頼できますよ。これならあいつらも、、、

感染症に対して有効な治療法は見つかってるんですか？」

ドクター「有効の定義によるかな、進行具合を遅らせることができても完治はまだ方法すら見つかってない。」

ヨルノ「、、、その様子だと色々な問題が追加で毎回来てそうですね。」
ドクター「いつもロドスはてんやわんやさ、今は取り合えず、人手が足りないね。、、、どこかに即戦力にでも人材がいればいいんだけど。」
ヨルノ「なんで俺を見るんすか。勧誘しても無駄ですよ、俺はロドスに嫌悪感はあれど恩義はこれっぽっちも感じてませんから。」
ドクター「それはそれは、非常に残念だ。」
ヨルノ（笑ってやがる、、、絶対残念に思ってないな。）
保護施設（孤児院）にて、、、
ヨルノ「ある程度の年齢を行けば、ロドス内で働くことを担保にし、いろいろな保証が着けられる、ですか？」
ドクター「そうだよ、ロドスで保護するものの内、保護者がいないものは、労働基準法に規定されてる労働者の最低年齢を越えるとその選択が与えられてるんだ。」
ヨルノ「、、、。」
ドクター「？この制度気に入らない？」
ヨルノ「いや、気に入らない訳じゃないんですが、これ実質、選択肢なくないですか？子供がこれを決断出来るほど勇気を持ち合わせているとは思えないんですが。」
ドクター「衣食住は提供されて、思考力と判断力もその歳になるまでには必要最低限

は必ず与えられている。ロドスだって万能じゃない。自分の身を考えられる者を養えるほど裕福じゃないさ。」

ヨルノ「、、、それもそうですね。ずっと面倒見れるほど、世の中甘くはないですよね。いつかは俺だってあいつらとは、、、」

ドクター「でも一応教えとくと、ロドスに入るなら条件次第で色々と優遇はされるよ。私との交渉次第にはなるけどね。」

ヨルノ「へっ、給料でもあげてくれるんです？」

ドクター「住と医療の提供、権利の譲渡、法的例外措置とか色々さ。」

ヨルノ「、、、。」

ドクター「基本的にロドスは公平を元にしている。

仕事に対してだってルールを破ることは絶対にない。

けど、ロドスの利を増やすのであれば、仕事を越えてロドスのために動いてくれるのであれば、相応の報酬は払うさ。勿論、それは本人の働きに左右されるけど。」

ヨルノ「、、、人道的ではない行為も、その働きには含まれているんでしょうね。」

ドクター「安心しなよ、契約を結ばないのなら強制はしない。」

ヨルノ「、、、。」

ドクター「それに、なかには新たな技術を産むものことでそれを成す者もいる。」

ヨルノ「‥‥。」
ドクター「君の場合はどうなるのかな？」
ヨルノ「‥、俺はロドスに入りませんよ。」
ドクター「世の中どうなるかは分からないさ。
もしかしたら君は明日にでもロドスへ入る宣言をしてしまうかもしれない。」
ヨルノ「‥、？‥、一つ聞く、何を企んでる？」
ドクター「そんなに睨まないでよ、私が君に私的に害するわけないじゃないか。」
ヨルノ「‥‥。」
ドクター「誓って、なにも、してないさ。君が取引に忠実であるならば、その条件を蔑ろにするつもりはない。
言っただろう？私達は仕事に対しては忠実なんだ、」
ヨルノ「‥‥。」
ドクター「まぁ、今は、ここで君がほしい情報でもなんでも集めるといい。このデバイスの中にあるものなら私の権限で見せられる。」
ヨルノ「‥、感謝はしませんよ、この不信感はあんたが原因なんですから。」
ドクター「お好きなように。私は君がロドスへの興味を深めてくれるのであれば、それでいいんだ。」

ヨルノ「、、、。」
ドクター「契約はまたいずれ、私はいつでも、君の返事を待ってるよ。」
ヨルノ「、、、。」

ヨルノ「、、、ドクター、どうかあんたは、俺を怒らせない人であってくれ。でないと俺は、、、」

あんたを殺さなきゃいけなくなる。

取引の終わり

『見捨てられた街』

それはこの世で多くある天災の跡地の一つ。

中でも唯一、本来行われるはずだった救助活動が国によって放棄された場所である。

元々この街が位置していた国は、貧困の格差が目立つ治安の悪い国だった。

上に立つ者が皆富裕層で、そんな彼らに搾取されるものが皆貧困層。

そんなあり方を国自身がよしとしていたこともあり、その国では貧困層によるデモやテロ活動が毎日行われていた。

そんな中、その国に起こった悲劇が小隕石による天災。

空から数多く降り注ぐ理不尽の権化は、中でも唯一まともだった富裕層貧困層を支えていた中枢区画へと降り注いだ。

その絵はまさに地獄絵図。阿鼻叫喚に溢れ、蔓延した感染症悪化により当時は至る所に死体が転がっていたという。

しかし天災は鎮めることができれば、オリジウムという新たなエネルギーを確保により産業革命が期待できる。

最悪の地獄を味わった一般市民も、それだけが国を復興させる唯一の希望の光だと懸命に生きながらえてきた。

だがその期待は、国の根幹に根ずく悪性が許さなかった。

天災直後、最小の被害で済んだ貧困層のテロ組織が国に対して反乱を起こしたのだ。

彼らの狙いは多種多様、富裕層がため込んだ財産だったり、彼らでは許されない地位や権利、はたまた国自体。

それだけでも天災の被害を受けた一般市民は堪ったものではないのに、重ねて、国の上層部の腐れっぷりがその最悪に拍車をかけた。

富裕層が皆、全財産をもって他国へと亡命したのだった。

結果、街に残ったのは、ルールも法律もないただオリジウムが豊富にある荒野と、傷と病気と感染症で苦しむ人々と、内部分裂の果てに徒党を組んだ集団のみ。

今では立派なスラム街と同様。

「今日、そんな見捨てられた街で時刻１９より、レユニオンを含む武装組織による、大量虐殺が行われると情報を得た。」

ロドスの会議室では、そんな悲惨な街における悲劇の予兆が議題としてあがっていた。

「初め、私たちはテロ組織の狙いが、街の人々を仲間に勧誘することとその街に未だに残

るオリジウムの両方だと思っていた。
感染者の割合が7割を超えたこの街なら、その心の傷に彼らが触れることなんて容易いからね。
しかし、、、」
ドクターの背後にあるモニターにいくつかの写真が写し出される。
「先日、アーツユニットを含む多くの武器が、彼らの手元に集められていることを知った。」
騒がしくなる会議室。
「加えて、現地にいる調査員の報告によると、テロ組織は誰一人として街の人々を確実に勧誘していない。」
状況の可笑しさはドクターの一言でその場にいる全員に伝わった。
「痕跡を見つけられなかった?・では?・」
「いいや、まずもってそんなことをしていなかった、が正しい。
街で流れていたのが、そんな組織がいるという噂のみだったのを調査員が確認している。そして相手も一部地域以外で全く姿を現していない。
そこでようやく私は作戦の根本を見直すべきだと考えた。」
そしてモニターに、今回の事件の最重要人物である青年、ヨルノの写真が写し出され

た。
「そんな時、ここにいるものは知っていると思うが、この男がロドスに侵入した。」
　ドクターは真面目な表情で事実の身を伝える。
「彼の身辺調査と尋問により分かったのが、彼はテロ組織の刺客、というのは大袈裟だが十中八九、テロ組織の雇われ者だ。」
「彼の狙いは分かっているのですか？」
「勿論だ、彼の所持品を検査したところ、中身が空のｕｓｂには特殊なウイルスが入っていた。
　彼がコンピューター室にいたことから、恐らく彼が依頼されたのは、ロドスのネットワークの混乱だったと推測される。」
　ドクターの説明最中、一人の男が手を上げることで気になっていた質問を通した。
「一応、そのウイルスは除去済みなんだよな？」
「勿論。クロージャによる最終チェックも済ましている上に、泳がすための準備もついで先程完了した。」
「ならそれがどう、テロリストどもの殲滅に繋がるんだ？」
　ドクターはモニターにヨルノの身辺調査の結果を大画面に表示する。
「私は彼を調べている最中にこう思った。

何故今からテロを行おうとするものが、特に名も知られていない者をロドスにまで送り込んだのかと。

確実性と効率を求めるなら流石に不自然だ。いくら蜥蜴のしっぽにするにしても、私ならそんな信頼もできない者を雇わない。

だから私はもしかしたら彼になにか特別な繋がりがあるのではないかと考えた。」

文で書かれた詳細のうえに貼り付けられたのは、５０代後半の一人の男に武装した数人と金を渡す姿。

「予想通り、ロドスに侵入した男『ヨルノ』には上司のように、見捨てられた街の第３地区を仕切る男が上にいた。

私は調査員にこの男とテロ組織の繋がりがあると確信し、秘密裏に調査を依頼した。」

ドクターはマスクで顔を隠すも、その怒りに満ちた雰囲気を露にする。

その気配を悟った面々に緊張が走った。

「結果、この男は物資をテロ組織に流すなど諸々の面倒ごとを引き受ける変わりに、自分の地区にいるものだけを殲滅から対象外にする契約を結んでいることが判明した。」

そしてその怒りの理由が言葉を聞かずとも全員に届く。

「ようはテロリストどもは、住民を殺戮してこの地を占拠することに決めたんだ。」

ここにいる者の敵も定まった。

「ここまで聞けば気づいているものもいると思うが、奴らは私達も殲滅の対象内に入れている。」
　この場にいる全員もやる気と熱意に満たされる。
「、、他国への救援要請は済んでいる。加えて、私達は最初から最悪を想定して動いてきた。正直に言おう、何一つ問題はない！」
　ドクターから発せられる事実が、安心感による自信を彼らに与えてしまう。
「再度、私達の勝利条件を告げる！
　住民の避難完了に加え、救援到着までの時間稼ぎ！それか、テロリストどもの掃討のみ！」
　この瞬間、ロドスの意志は一つの目的に集約された。
「作戦はすでに各自の端末に送ってある！ここで私が言うことはただ一つ！」
　ドクターは胸の前に拳を突き出し、こう告げる。
「勝つぞ！皆！」
「「おうっ！」」

ーーーーーー

「というわけで、ヨルノ君、私達はテロリストを掃討することにしたから。」

「何が、というわけで、ですか。内容が物騒すぎるでしょ。」
ロドスに捕まってから三日目の朝、早速、ドクターから貰ったトランシーバーから厄介事の香りが漂ってきた。
「いや、正直にいうとね、これを君に話すか迷ったんだよ?事が事だしね。」
(そりゃそうだ、一応俺はロドスからしたらテロリストの一人だし。言う方が馬鹿だ。)
「けど車あげてる時点で、結構今さらかなって。」
ロドスから俺の街まで約4，5時間。
到底、歩きでは時間内に辿り切れない距離、普通なら車での移動が望ましい。
しかし、ロドスへの侵入の際、運輸のトラックに忍び込んだ俺に車のような便利道具はありはしない。
帰りも盗むか忍び込むかで帰ろうとしていたため、今の俺には帰るための足がなかったのだ。
そこで助け船をだしてくれたのが、個人的取引を交わしたドクターだったのだ。
「それに、情報をあげて君に恩を売るのも悪くないしね。」
「、、、俺がポロッとテロリストに溢すとか考えないんですか?」
「ないない、君のあの街での立場を考えれば、君はテロリストを恨んでいるからね。彼らのために成ることを自分から進んでやるとは思えないさ。」

（有り難いがそれ故に不気味だな。）
多分だがここまで来て取引を不履行にしたくない、という思いもあったのだろう。
目的のためなら多少の犠牲は厭わない、それこそお金で済むのなら。
ドクターらしい考えだが、状況だけ見れば借りになるのは俺。
「それに約束もあるからね。」
俺は車を貰う代わりに、俺の持つ秘密の一つ、報酬の使い道について話す約束を交わしたのだった。
「、、、。」
約束は希望論、正直、それを履行にしたところで契約を結ばなかったドクターのせいに出来る。
しかし、その選択は自分の信条を歪めるなとに成る。
金を優先して飲んだ条件、果たさねばなるまいて。
「ありゃ？黙り？、、、仕方ない、車起爆ボタンを「すこしぐらいは考える時間をくださいよっ!?というかやっぱりそんなものつけてたんですねっ！」冗談冗談ｗｗｗ。」
焦りを静めるための深呼吸に、考えを整理するための時間を儲ける。
生命の危機を冗談で流されたが、この声は絶対に冗談じゃない。
信条と命を守るためにも口を開く。

「、、、報酬の使い道、それは外国での子供たちの人権確保です。」
それは法律で生きるドクターにとっては瞬時に理解できない言葉。
「人権確保？」
「、、、そうです、ドクターは外国の居住権にどのくらいのお金が必要か知ってますか？」
「言っても数万が最高金額だと思うけど？」
案の定、帰ってきたのは常識的な回答。
俺はそれに見捨てられた街に蔓延る問題が瞬時に分かるように返答した。
「そうですね、正式な手順を踏めばもっと安くなります。けど、こと俺の住む街の者においては、数百、数千万と桁が倍に成るんです。」
それは人としての生まれた瞬間にあるべきもの。
「俺の住む街はご存知の通り、今では無法地帯です。
国としては成り立っていませんし、治安は最悪の中の最悪、今生まれてくる子供たちはまともな教育を受けれません。
そのせいでこの街で生まれ落ちたものには皆、人権、ましてや、戸籍そのものがまずないんです。」
保証はなく、保険もなく、あるのは弱者は死に方すら選べないという事実のみ。
「最悪な環境で生きているという事実だけでも受け入れがたいのに、理不尽にも発症し

た感染症。
俺が調べた限りでは、自国の権利を無償で与えられる国はありませんでした。
事実、はした金では入国すら許されません。」
そんな中、無力な子供たちが生き残れるはずがない。
「しかし、国の中には必ずと言っていいほど金で動く輩がいる。逆に言えば、いくら邪道でも、金次第では権利や諸々を買うことが出来るんです。」
だから俺には金が必要だった。今すぐにでも、もて余す程の金が必要だったのだ。
「俺は依頼が終わり次第、教会の皆を強制的にでも連れてここを出ます。」
「、、、。」
「、、、報酬の使い道とドクターが気になっていた、俺が危険を省みなかった理由は、ここまで言えば分かったんじゃないですか？」
俺の長い説明にトランシーバーの向こう側は無音に成る。
恐らく考え事でもしているだろう。
一息おいて、ようやくドクターが返事を寄越す。
「あれだね、以外と君は馬鹿なんだね。」
「、、、あ？」
その言葉に俺は絶句した。

「いや、別にね、君のその選択自体はいいと思うよ。
計画は建てやすいし、実力次第では一番平和的に片付けられる。
けど問題は、君が取った行動だ。」
赤の他人が、俺の生き方に、俺の頑張りに、俺のやり方にイチャモンをつけてきた。
その事実にイラつくのが自分でも分かる。
「君は言った、強制的にでも連れていく、と。
この言葉から察するに、君、その選択を本人にも言わず、自分の中に押さえ込んでいるだろう?」
反論異論は経験した本人だからこそ沢山出てくる。
情報の流出阻止、教会のある地区のまとめ役の男にバレればそれは一貫の終わり、という事実をこいつは知らない。
「君からしたらその行動には意味があるんだろう。
君の実力が、君の経験が、君の自信がそれしかないと判断したのかもしれない。
恩人を守るための、恩人を幸せにするための、恩人を救うための行動が、それが君にとっても最善なのかもしれない。」
１０歳近くの子供にそんな地獄を見せてなんに成る?
現実的に借金を持ち地区長に逆らえない運営者の爺さんに伝えてなんができる?

最悪な目に遭っても信仰心だけは捨てないシスターに伝えてなにが起きる？
俺以外に、、、こんなこと誰ができる？
「けど断言して良い。その問題を一人で抱え込んだ君は、間違いなく、、愚か者だ。」
説明したのは俺だ、自分の言葉で、自分の経験を語ったのは俺だ。
ドクターの勘違いの原因も、積み上げた苦労を、頑張り続ける辛さを、感じてきた痛みを、ちゃんと伝えなかった俺にある。
「まずは前提を改めよう、君が今、救おうとしている人間は何人かな？」
「、、８人。」
「その数に対して救おうと動く人数は？」
「、、１人。」
「それだけ背負って尚、何で自分一人が頑張れば全て上手く行くと思える？」
秘密がある。誰にも言えない、誰にも言ってはいけない秘密がある。
だから、納得させる説明が必然的に出来ない。
感情にまかせてはいけないことだと知っているから、必然的にドクターを納得させる反論ができなくなる。
「あ、あの街で俺だけが、、っ！１％でもっ！それを達成できる可能性があったっ！それ以外に理由なんて、、っ！」

「、、、やっぱり君は大馬鹿者だ。」
「な、、、っ!?」
ムカつく、イラつく、何様だ、お前に何が分かる、お前が何を知っている、
沢山の言葉が胸の中をどす黒く渦巻いていく。
「いい?再度言うよ、君が背負っているものは、紛れもない他人の人生だ。
本来、その人自身が背負うべき、ものなんだ。」
「あいつらは子供っ「子供であろうとも!、、、老人であろうとも、女であろうとも、己の人生を決めるんだよ?自分で決断させなくてどうする?」、、、っ。」
なぜ言葉が喉につっかえる?
なぜ想いが口から先に出ない?
トランシーバーを握る力だけがいやに強くなる。
それでもなんとか、喉を震わせる。
「相談してなんとか成る保証は、何処にもないっ!」
「ないよ、でも上手く行かない保証もない。」
こんな問答は言ったもの勝ち。
どちらも正解でどちらも間違っているから、否定したものが主導権を握る。
「大方、只でさえ低い成功率を下げないために、そんなリスクを負いたくない、って言う

のが君の考えかな？
分かるよ、情報ってのはあるだけで厄介なものだ。
それをまだ未熟な子供に話せば漏洩する危険は高い。
でも、ならどうして、君が信頼するシスターには話さなかった？」
今はっきりと分かった。
俺がドクターを嫌うのは、ドクターの優秀な情報分析力が俺を苦しめるから。
「し、シスターに話しても「無駄だと思ったから、なんて言葉はやめてくれよ。」、、、っ!?」
ドクターの圧倒的な思考力が俺の価値観を狂わせるから。
「その言葉こそ、君の優秀さが生む傲慢さそのものだ。
現に君は何一つ状況を理解していない。
一人よがりの結果がどうなっているかも、、、。」
ドクターの想いが俺の弱さを顕にするから、、、俺はドクターが嫌いなんだ。
「君が慕うシスターは優しい人だ。その優しさからあの街にいる多くの人々から慕われているのを私は知っている。
子供たちを完璧に危険から遠ざけるほどの視野の広さだってあるのは君も保証できるんじゃないかな？」
俺は頷くしかない。事実しか言わないドクターの言葉を肯定する他ない。

「だったら私は、もし私が君の立場なら、シスターには安全な避難経路や逃走資金の確保、子供たちの避難訓練を頼む。」
間違いない、ここまで言われたら認めるしかない。
ドクターの案の方が正しいと。
だから、、だからこそ、、
「、、私は君じゃない。君の気持ちは分からない。
君がどう言う想いで日々をすごしたかなんて分からない。
もしかしたら、君は彼らを想う気持ちから「ドクター。」、、、。」
俺はトランシーバーを確かな力で握り締め、確かな声量でこう呟いた。
「黙れ。それ以上は俺も我慢ならないぞ?」
負け惜しみと言うのは分かっている。
「、、すまない。余計な、お世話だったね、」
それでも感情がそれを言わずにはいられなかった。
「、、一つ、確認する。お前は、、俺の敵じゃないんだな?」
負けたからこそ、生存本能が敵を定める。
「前も言ったと思うけど、私たちから害するつもりは全くないよ。」
全てを信じるわけではない。

ただ、抱いた嫌悪感が早くドクターとの関係を断ち切るべく、微かな信頼をもってその言葉を飲み込む。
「この言葉を忘れるなよ。」
俺は脅迫を残し、トランシーバの電源を落とした。

「、、、そう、私達は君を害することはない。
君の大切なものを傷つけることもない。
しかし、それと同時に私達が君を助ける道義もない。」
ドクターはトランシーバをもとあった場所に戻す。
「、、、これが、最後の気づくチャンスだったのに、君は最後まで、信じるべきではない人達を信じてしまったね。」
その表情には同情が浮かぶ。
「願っているよ、君の大切なもののために、君の運がまだ残っていることを。」

不安の発露

『ヨルノ、この依頼を受けろ。』

あの日、俺は居候先の教会がある地区のまとめ役、地区長に依頼内容書を渡された。

『急に呼び出したかと思えばご挨拶っすね、地区長。俺はそう暇じゃないんですけど?』

すぐに目を通さないことで自分の存在を大きく見せる.

『知ったことではないな、あの契約を結んだ以上、お前の自由権は俺にある。』

が、そんなものはいつも通りに、俺以上の神経の図太さを前に通用しない。

いつもとは違い、直接的に、重苦しく、否定される。

様子が違う。この場に俺しかいないとはいえ、教会の保持の代わりに俺が駒となる契約を口に出す時点で、この依頼に関しては茶化すつもりがないようだ。

『、、、。』

逆に考えれば、俺の手元にあるのはそれほどの依頼。

俺は黙って渡された書類の中身に目を通す。

『、、はっ、馬鹿かこの依頼。』

ある程度理不尽な内容だと予想はしていたが、案の定、嘲笑が出るくらいにふざけ倒

したものだった。
『まさかあんた、この依頼を受けろって言っているんじゃないでしょうね？』
依頼者は世界では有名な犯罪集団、世で言うテロリスト。
その詳細は、ロドスが持つ中枢通信網の破壊。
要は、ロドスをぶっ殺すから、その前準備として奴らの戦力を剃れ、という依頼だ。
社会を知っているものなら常識と言われるほどに有名なロドスの危険性。
毎日、レユニヨンともめ事を起こせるかの武力は国の軍事力と大差なく、名ばかりではない高度な医療技術はロドスの揺るぎない力の源になっている。
そんなロドスにケンカを売るのは、有体に言って死と同義。
俺だけじゃない、そんな力を持つならこの街だって無事ではすまないのは、いくら地区長といえど理解できることのはずだった。
『そうだ。お前にはこの仕事を受けてもらう。』
しかしらこの時初めて心と声が一致する。
『、、正気か？』
俺はこいつが嫌いだ、天変地異が起こっても、その気持ちに変わりはないだろう。
だがそれなりに、それこそ契約を交わしてもいいほどに信用はしていた。
『俺が冗談を言うとでも？』

こいつは自分の管轄にある住民をどんなことより第一に考える。
己が己にかけた使命に忠実に生き続ける意志がある。
どんなに低い確率でも、住民が大損を背負う選択肢は踏まない男だった。
だから信用した、信用だけは置いてやった。
（何かあるはずだ、、、）
この瞬間、感情に任せて問い詰めてもよかった。
でも憤り以上に残っていた理性が冷静な判断を促す。
０．１㎝程度残っていた信用を元手に今の状況を分析した。
『、、、まさかあんたっ!?』
この人の下で働き始めて以来、俺はこの街の事情については人一倍に詳しい自信がある。
そのこそ、起こる問題や背負っている悪性には誰より敏感で、外からの異物には誰よりもいち早く気づくほどだった。
そんな俺のアンテナは、丁度先週あたりに大量の武装集団を捉えていた。
『契約を結んだなっ!あの畜生どもにっ!!』
情報は分析してこそ役立つもの。俺は居候先の教会の人々を守るため、存在に気付いた瞬間から武装集団について出来うる以上に調べ上げた。

それこそ、地中深く根ずいた草木を掘り起こすかの如く。
だからこそ、すぐに分かった。
奴らは、この街の人々を抹殺するつもりであることを。
狙いはオリジウムというエネルギー源のみでここにいる人たちはどうでもいいことを。
そして、目の前のこいつと奴らはすでに接触していることを。
そしてこの依頼が、そいつらからの押し付けであることも。
『、、、。』
俺が胸倉をつかみ上げると、地区長はまるで苦虫を噛み潰したかのように表情を歪めた。
これで確信した、こいつは我が身欲しさに！取引という形で多の犠牲を許容したんだっ！
俺が知り得た情報だと持ち掛けられた取引はこんな形だったはずだ。
毎度肝心な時に邪魔をしてくる、テロリストとしては最大の脅威であるロドスを討つ協力をするのであれば、お前の運営する地区ぐらいは助けてやる。
つまりは、《死にたくなければロドスを潰せ》
『馬鹿かあんたはっ!?あんな奴らがまともなものでも契約を守る保証がどこにある!!最

悪、みんな死ぬかもしれないんだぞ!!

あんたの、あんたのこの街を守る意志は嘘だったのか！俺が信じた、あの言葉は全部嘘だったのか！』

俺は怒りのまま、怒鳴り散らした。

感情のまま俺の知る事実を話した。

『外の奴らからしたらここはゴミ溜めだ！間違いなく塵取りで集めて燃やしたいと思うようなものなんだよ！

外を見たことがあるあんたなら！それは十分わかるだろ！

テロリストにこそ仁義がないのだって、あんたが一番知ってるはずだ！

なのに、、なのになぜ！部外者を受け入れた!!この街が大事なんじゃなかったのか！』

しかし、地区長の次の一言で俺の言葉は止まる。

『部外者のお前がっ、お前が言う外部の人間であるお前がっ！俺の街の事情に口を出すな！』

俺の手は振り払われた。

『それにこの街を守るだって？一番にここから出ようとしているお前がよくその言葉を発せられたな？』

襟を正すこいつの言葉に驚愕する。
秘密裏に行っていた教会の皆を他国へ移籍させる手筈.
現在は残り金策集めだけという所で、一番知られたくない奴にバレた。
どこだ、どこでバレた?根回しは完璧だった、少なくとも口の軽い輩とは一切の情報交換を交わしてない。
(もしかしてカマをかけて、、いや、違う、この表情は間違いなく確信から来てる、、っ。)
こうなればバレていることを前提として言葉を選ばなければならない。
今俺に重要なのは教会の全員が移籍するまでこの街を守ることのみ!
『そ、それでも、、っ!この依頼は無謀だ!成功率はあり得ないほどに低いうえに失敗すればロドスも加わって挟み撃ちになる!』
『失敗の要因は?まさか、なにもないのに出来ないとは言わないよな?』
『ロドスの武力を甘く見てるのか?あそこは国を相手にしても不足ないんだ!
金策力は勿論のこと、あそこの警備力、統治力、技術力は一個人が相手していいものじゃない!
今までのマフィアやギャングとかの犯罪集団とはわけが違う!』
『つまり、力では敵わないと?』
『仮にだ、侵入出来ても向こうのネットワークセキュリティキーは最先端中の最先端!

知識の半端な俺じゃ突破なんて不可能だ！』
考えれば誰でもわかることを馬鹿でも理解できるように説明する。
これで改めてくれるはずだ、と無言で思案するこいつに期待したが、次に帰ってきた言葉でそれは裏切られた。
『なら問題ない、受けろ、その依頼。』
『なっ!?』
あからさまにおかしい、こいつはこんなに馬鹿じゃないはずだ。
大局を見るその観察力だけは俺より優れていたはずだ。
『、、あんた、それを本気で言っているのか？』
怒りが満ちるのがわかる。何かの冗談だと信じたい俺は再度問いただす。
『本気だ。俺がくだらない嘘をつかないのはお前も知っているだろう？』
『ふざけるな！なんの！何の根拠があってそんなことを『お前なら！、、、お前が持つあの力を使うなら、、、バレずに侵入ぐらいはできるだろ、、、っ！』、、。』
しかし、返ってきた地区長の表情が真実であることが告げる。
追い込まれていて取引を交わさざる負えなかったことも知らされる。
その証拠として、こいつは俺の逆鱗に触れてしまった。
『、、、確認するぞ？』

感情がクリアになった、信じられないくらいに現状が認識できる。
頼む、嘘であってくれと心が願う。
『お前あてにした力は、、俺の中にある、兵器としての力のことで間違いないな、、？』
だが、頷こうとしたのか、頭が下がり始めたのを瞬時に理解できてしまった。
こいつとの付き合いは長い。
お互いを性格までよく知るとまではいかないが、ビジネスとしては両者が持つ武力はある程度把握済みである。
それこそ、現場で仕事をする俺の力は、一方的と言えるほどに、こいつにはバレているのだ。
だからこそ俺は事前にこいつに伝えておいた。
俺が持つ『兵器の力』は当てにするな、と。
頼ったならば最後、契約を結んでいようとも……俺はこう告げた
殺す
『頼む。』
『、、っ!?』
しかし、地区長が机に頭をつけたことで、潰そうと向かった俺の拳が止まる。
『もう、こうでもしないと、、全滅するほかないんだ。』

突然に現れた、信頼した者の情けない無様な姿。
俺が対等と認めた男の、こんな形で見たくなかった姿。
俺はこいつが背負ったものを想像してしまい、歯を食いしばることでしかもう逆らうことは出来なかった。
『、、、。』
仕方ない、そう諦めて命を賭けるのは簡単だ。
その行為自体、今までの仕事と何一つ変わりはない。
しかし、今回ばかりは、命を賭したとして全てがうまく行く保証がない。
『、、、仮に、仮にだ。侵入出来たとしてその後はどうする?』
この言葉は引き受けたことを意味するものではない。
『俺にハッキングの能力はない。多少機械いじりは出来るがネットワークを破壊できるほど知識はないんだ。
俺の実力では依頼は達成できない。』
しかし、選択肢のない俺は1%でも成功率をあげるために情報を集める。
どうせ受けることに成るのだから、やるしかない。
地区長は俺の言葉を予測していたのか、そのぶっきらぼうな表情を変えず、俺の後ろを指差した。

『、、、なるほど。』

全ては織り込み済み。

後ろの扉から武装した男が三人と入ってきてそう理解した。

『、、、すまない。』

背中か聞こえる地区長の謝罪。

俺は全てを理解して、一つの深呼吸で感情を整える。

そして、すこしでも愛想良くするため、営業スマイルを顔に張り付けた。

『どうも、便利屋ヨルノと申します。ご依頼、お聞きいたしましょう。』

結局、またも俺は背負うことを選んでしまったのだった。

不安の成就

『情は弱み』

それに気づかされたのは、初めて最愛を失った時のことだった。

俺は過去、自分の中で最愛の人が皆、理不尽に自分の目の前で、自分のせいで死ぬという体験をしたことがある。

なんてことはない、このテラという世界においてはごく当たり前で理不尽な最悪だ。

しかし、そんな当たり前からでも、冷静になれば気づくことがあった。

『この絶望は自業自得だ』

別にこれは守れなかった後悔から来るものじゃない。

守れなかったその事実が消えることはないが、ただ単に観点の話で言えば、この絶望には他の見方があるということだ。

最悪の中、愛した者の死体を抱く中、俺が精査するために条件付けた現実はただ一つ。

俺だけが生き残っていること。

これからなにか分かるのか。

幼く、経験だけはいっちょまえな俺が導きだした答えは…。

『死んだのは本人の弱さのせい』

強ければ死なない。こんなのはごく普通の理論。

第三者からしても元凶は殺した本人にあるのは間違いないが、死においてこの現実は切っても切り離せない事実。

けど俺は最初、それを認めなかった。他者から理由もなく与えられた理不尽な死を、そんなものを正当化するようなそんな客観的思考、それ自体を許せなかった。

でも思いついてしまったのだ。

冷静さだけが残った思考の中で、抱き寄せた最愛を零れ落とした時に、こんな事実があることに気が付いてしまったのだ。

そんな時、俺の心を壊した張本人の言葉を聞いてしまう。

『お前のせいだ、お前がいたから皆が死んだんだぜ?』

まるで呪いだな、そう言い放った彼の言葉は全くもってその通りで、俺に俺の存在が危険であることを決定づける。

何もかもが事実で、何もかもが正しいからこそ、俺の心はこの瞬間、このままでは生きれないと限界を迎えたのだった。

しかし、俺は託された命の持ち主として、生きると言う目的を達成しなければならなかった。

身勝手な想いで死ぬことは許されず、愛した人たちが残した願いである『生きろ』と言う言葉を裏切ることは出来ない立場にいた。
だから気づけた。
心が死なないように少しでも前を向けるよう、俺は考え方を改めたことでこれに気づけたのだ。
『最初から愛さなければよかった』
何と独りよがりな考えか。
『あぁ、そうだ。愛さなければ傷つかない、関わらなければ俺のせいで誰も死なない』
でも生きなければならない現実に直面した俺はこの想いにすがる。
つまり、俺は情を弱点と知ったことで、もう誰とも関わらないことに決めたのだった。
敵を殺して生き延びて、寿命まで待ち独りで死ぬ。
それを初めて最愛を失ってようやく心に誓ったのだった。
しかし、世は思い通りには進まない。
俺が俺でいる限り、この体を求める輩がいる、敵がどれだけ殺しても尽きなかったのだ。
殺して、
殺して、殺して、

殺して、殺して、殺されて、
殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して…

気づけば、名も知らぬ街の教会で、助けられていた。

助けてといった覚えはない。
返せるものはを持っていたわけでもない。
それどころかいるだけで負担にしかならないのに、教会に住む人達は俺を救ってくれた。
汗をかきながら働いて、腹を鳴らしながら食べ物をくれて、俺の秘密を見ても手を握り俺を繋ぎとめる。
今思えば、振り払うことは出来たはずだ。
死力を振り絞り、彼らのもとから立ち去れたはずだ。
なのに俺は、気づたころにはまたも、彼らに絆されてしまっていたのだった。
後悔が押し寄せる。未来の不安が溢れ出す。涙が止まらない。

敵がどれだけいるかもわからないからこそ、彼らが死んでしまう未来があることが、とてつもなく憎らしい。
でも、俺は知っている。
この思いは止められない。この絆は千切れない。こんな俺じゃあ、見捨てるすら叶わない。
だから俺は決めた。腹を決めた。
この人達は何が何でも助けよう。
俺のせいで命が狙われるのだから、命を賭して守り続けよう。
助けてくれたのだから、何を使ってでも彼らに安心と安全を届けよう。
これなら、この覚悟があるなら、俺が結果的に死ぬことも、俺を愛してくれた人達なら許してくれるはずだ。
姉さん達なら優しく迎えてくれるはずだ。
達成したうえで寿命を迎えられたなら・・・
・・・
・・
・
「そろそろか…」

報酬の受け取り時間を知らせる携帯端末に設定されたアラーム。
暗い裏路地に潜んでいた俺はゆっくりと立ち上がる。
すぐ横の路地へ行けば取引の場所。
「毎度、この瞬間は慣れないぁ～」
俺は依頼をやり通したと証明される瞬間を前に心構えを整えていた。
何時もなら最低限の条件を守れたこともあり、依頼者が納得することにこんなに怯えることはなかったのだが、今回だけは事が事。
「大丈夫だといいけど…」
依頼の本命は恐らく対策はされただろうが達成済みと言えど、依頼主の情報を漏らすなと言う条件は守れなかった。
加えて、数日間と言えどロドスにいたことはバレていたはず。
向こうの依頼達成を確かめる術が、ウイルス経由でのロドスでのハッキングしかないのは分かっているものの、やはり失敗はバレてても仕方ない事実。
ゴリ押しと運でどうにか報酬を受け取ろうと画策しているからこそ、いつもより不安は3倍増しとなっていた。
「はぁ～、これも全てドクターが変なこと言わなければ」
抑えても抑えきれない不安の矛先は、自然に際ほどまで俺に説教垂れたドクターへ、

俺の人生観を馬鹿にしたドクターへと向かう、
「…こんな嫌な予感は初めてだ」
頭のなかで整理されるのはドクターの数々の言葉、
それらは全ては間違っておらず、そして俺の予想していた成功率を正確な数字へと下げる効果を持っていた。
思考が最悪な未来を予想して止まない。
まるで早送りで何度もリピートしている映画を見せられてるようだ。
だが、ここで弱気になっては全てが無駄になる。
「いや、言い訳だな、最初から想定は出来てた。だからちゃんと準備もしたんだ」
いざとなったときに備えて教会の皆には武器を渡して、誰も知りえない逃走経路を教えている。
ドクターは知らないだけで、打てる対策はちゃんと打っているのだ。
だからこの脳裏に焼き付いた不安は、ドクターの不用意な発言によるもの。
俺がそう察したものではないと結論付ける。
「…大丈夫」
そう結論付けて、確かな握りこぶしを作る。
「お前ならやれる、やり通せる」

それは無力だった過去に押しつぶされそうな勇気を奮い立たせるための意思表示。
「あの時とは違うんだ、もうお前は強くなった」
声に出すことで確かなものにした俺は、路地から何人かの大柄な男の足音がしたのを捉える。
「便利屋！出てこい！いるのはわかってる！」
どうやらもう、グダグダと考えてる暇はないようだ。
「…行こう。」
重たい脚を動かし、明るいほうへと向かう。
路地へ抜ける前に顔を覗かせて、一応取引相手を確認する。
（さすがに武装してるか）
ガラの悪そうな男を筆頭にした５人の武装集団。
肩には全員がテロリスト特有の羽の生えた髑髏の入れ墨をしており、取引相手であることが確認できた。
（…多分、あいつら手駒だよな？）
そして小物感がする様相と取引成立時の偉そうな面々がいないことから代理が立てられていることを知る。
（大金の受け渡しに切り捨てられる駒を使うだろうか？戦争の前に顔を出すのを嫌がっ

たか？）

どことなく妙な感覚を覚えた俺は、取引愛店も心の内を探る。

未確定で良い、あらゆる可能性を事前に想定しろ、そう思い資格から得られる外部情報をもとに分析しようとした瞬間、リーダと思われる大柄な男と目が合った。

「安心しろよ、金はちゃんと持ってきた」

筋肉が隆起した片手でアタッシュケースを軽々しく抱える男は挑発するような笑みを浮かべる。

ドクターとは違いただ純粋に悪意しかない笑み。

（こっちを侮っている…？）

まぁ、どちらにしろ雇ってもらっている側なのだから多少の礼節はわきまえなければならないだろう。

「…取引の際にいた人は？貴方方の顔に覚えはないんですが？」

「上の命令で俺たちが来たんだよ、今は無駄な時間を浪費している暇はないらしくてな」

「無駄…？」

だが、男は俺に対して嫌に喧嘩腰な態度を取ってくる。

「なんだ？自覚ないのか？いくら期限内とはいえ、まさか3日も経ってようやくロドスから出てくるような仕事の遅い奴を待つのなんて無駄だろ？」

何でそんなに小物感満載の様子を振り撒くのだろうか?その理由は次の男の言葉ですぐ理解した。
「俺だったらもっと早く終わらせてるぜ?」
男達は出来ることならば、この仕事を自分等で成し遂げたかったのだ。
元々、彼らからした俺のした仕事は、ロドスに恨みを持つ彼ら自身がすべきこと。
しかし、今までの負け続きな実績と、手も足も出なかった経験からだろう。
男達の上に当たる人は、実績による確実性と万が一の失敗対策で、その仕事を俺に依頼した。
「まぁ、殺しの依頼だけは退ける甘ちゃんには無理な話なだろうがな」
ようは、逆恨みと言うわけだ。
「そうですね、でしたら次からはご自身でやってください。もう会うことはないでしょうが」
下らないと一蹴りして相手をわざと苛立たせても言い。
しかし、相手は暴力を厭わない組織、それで戦闘が起こり、報酬がお釈迦になったら本末転倒。
とは言っても、このままそうですねと認めるのも癪に触る。
よって俺は、適当に自身のプライドも守り、相手の図星を付く肯定で返した。

「…チっ、まぁいい、早速例のものを渡せ」
見せつけるように舌打ちをした男はとあるものを要求する。
「…」
俺はそれに答えるように腰から、ロドスのコンピューターにウイルスを侵入させるため使用した、携帯用タブレットを取り出した。
そして男の前へと差し出す。
男は俺が素直に要望に答えたのが面白かったのか、頬を引き上げタブレットを取ろうとするので…
「まだ駄目です」
持ち上げることでそれを阻止した。
すると男の顔がイラついたように歪み、流石の戦闘のプロの動きで、俺の頭に銃を突きつけた。
「…俺達に喧嘩を売る気か?」
なぜこんなのが、彼らにとって大事な交渉材料に成るのか。
これは『なぜテロ組織が戦争前に不用意に相対して報酬を渡さなければならなくなったのか』に繋がってくるのだが、それらは俺の本依頼とは別に受けた副次依頼に由来する。

その内容がロドスのネットワークセキュリティの解析データの収集。
遠隔から解析対策が万能なロドスに対して、現地に忍び込む俺でしか出来ない仕事であり、ロドスに対して恨みのある彼らからは喉から手が延び出るほど欲しい代物なのである。
「俺は高額な報酬を受け取る代わりに、この依頼を受けました。
貴方ですら頼まれなかった、一歩間違えれば死んでしまうような難しい依頼を、です」
ならば、それを簡単に手放す道理はない。
「俺は最初、この依頼を引き受けるきはありませんでした。
だって取引相手は武力ですべてを握り潰す野蛮な組織。
その上言葉一つ間違えれば、明日には理不尽に殺されてるかもしれず、報酬を払って貰える確証すらない。
俺の判断は客観的にみれば特に不思議なものじゃないでしょう。
それでも俺は、最終的には貴方方に信用を置きました」
特にこれで新たなにかを得るわけではないが、使いようによっては報酬が受け取れる確実性を上げられる。
「なぜかわかりますか？」
危険性の線引きは経験からの感覚でしかないが、俺は確率を上げるのに集中する、

「それは貴方方の組織のトップに立つものが、面と向かって交渉をしてきたからです。
真剣に話し合いの場を設け、武力で訴えるのではなく対等に接してきたからこそ、俺も紳士的にそれに応じたんです。だからこそ、俺は信用してこの場に来ました」
万が一の最悪が起こる確率は減らしておいて損はない。
俺は舐められないためにも少しばかり殺気を滲ませた。
「なのに結果はどうですか?蓋を開けてみれば感謝はまだしも誠意もない、極めつけは見たこともない相手が自分たちが受け取ると証拠もなしにほざく」
「回りくどいな…何が言いたい?」
俺は男の要望通りに直接的に想いをぶつける。
「これが欲しければ先に報酬を寄越せ、それが条件だ」
男のこめかみに力が入るのが見えた。
そして、再度俺に警告するように銃の先端を俺の頭へとねじ込む。
「そんなの、?めるわけがないだろ」
…まぁ、それもそうだろう、この男は見た限りこの集団のリーダー。実質、上から命令された張本人ともいえる。
そんな男がたかが便利屋として働くだけの男に引き下がったとあればそれは恥。
暴力を好き勝手利用する者だからこそ、部下の手前、舐められるのだけはプライドが

許さないのだろう。
それにこの条件を飲むということは、組織の大金を持ち逃げされる可能性を妥協するということ。
リーダーとしても、組織としても、この条件は男にとっては呑めるものではなかった。
「…」
しかし、俺だって引けない。怒らせすぎたら武力行使に出られる可能性があるが、俺が吹っ掛けたからには簡単には引き下がれない。
「状況はわかってるよな？」
それは男も理解してか、苛ついている様子をあえて隠さず俺に警告する。
こうなれば、もう俺に選択肢はない。
弱いところを見せれば敗けの世界、俺は虚勢でも堂々と見栄を張った。
「ええ、ですが俺にも仕事にはプライドがあります。
苦労したらした分、タダ働きは絶対に許せないたちでしてね、もしそうなった場合、相手の利益は全て消去、そして一龍門弊でも多くの損害を死んでも出すことで報復としています。」
俺は危ない橋をわたっていると言う自覚を持ったまま、堂々と言い放った。
「数穴開ければ俺が死ぬと思ったら、大間違いだ。」

お互いに平行線、どちらかが妥協しなければ事は進まない。
しかし互いに譲れぬものがあり、妥協なんて許されない。
「…」
睨み合いが続く。沈黙のなか、何時でも動けるように、何時でも対処出来るように構えを続ける。
先に動きを見せたのは男の方だった。
「、、、武器を下ろせ」
男は銃を構えようとした仲間を一睨みで止め、持っている武器を手放すよう命令した。
そのお仲間さんは驚いた顔をしながらも地面に武器を置き実質的に無力になる。
そして男から金が入っているであろうキャリーバッグを受けとり、一人で俺の隣へと移動した。
「渡せ、今なら許してやる」
…なるほど、考えたな。ここだったら何があっても俺が最速で報酬を手に入れられて、何があっても彼らはその武力を行使できる。
恐らくこれが男にとっての最大限の妥協、
そしてこれ以上は譲渡出来ないと言う意味。

「…」
俺は警戒しながらも男にタブレットを差し出した。
「調べろ」
男は仲間に中身を調べさせる。
俺を視線から外さないあたり、ただの阿保ではないようだ。
これは戦闘を踏まなかった判断は正しかったようだ。
「隊長、データ確認しました、ウイルスの操作痕も確認済みです」
「偽造の可能性は？」
「復元の跡がありましたが、他におかしなところはなかったです」
男は俺を一瞥し、仲間からタブレットを受け取る。
銃を脇に挟み、中身を捜査しているところを見ると、恐らく最終確認をしているのだろう。
十数秒、息を呑み男の一挙手一投足に注意していると、男は面白そうに笑い、タブレットを再度仲間へと渡した。
「取り合えず、ご苦労、とだけは言っておこう。おい」
男が俺の隣にいる仲間へと合図を送る。
するとその仲間は手にあるキャリーバックを開く。

「…」
中にあるのは大量の札束、あまりの圧に唾液が喉をつっかえる。
しかし俺の同様をよそに、男の仲間がキャリーバッグを閉じて手持ち部分を向けてくる。
（よし！この金があれば…っ！）
俺は警戒もなく、そのバックに手を伸ばした。
「ガ…ッ!?」
それが悪手だったのにも関わらず。
バックに手が触れた瞬間、全身に電気が走った。
一瞬でも神経に錯覚として残る強大な痛み。
脳は電気に起因した痛みなどの瞬間的情報量を整理すべく、数秒間身体への命令を取り止める。
「そして、さようならだ、便利屋」
身体の硬直に逆らえない俺は、銃を向けられても逃げられない。
男の悪意ある笑みだけが視界を埋め付くし、聞きたくもない男の不快な声だけが耳を埋め尽くす。
「安心しろ、」

感情が混濁する海のように渦巻いていく。
何がなにかわからず、現実が現実なことだけがはっきりする。
だからこそ、聞き逃さなかった。
「寂しくないよう、ちゃんと全部送ってやる」
全部、その言葉が何を意味するのか。
全部、その言葉が何を示すのか。
全部送ってやる、それがどんな結果を産み出すのか。
そんなの考えずとも、聞いただけで全て理解できた。
だからこそ、意味がわからなかった。
だからこそ、余計に混乱した。
だからこそ、思考は停止した。
「…は？」
だからこそ、俺の頭は撃ち抜かれたのだった。

願い

『頭を撃たれた』
痛い…
痛い痛い…
痛い痛い痛い…
……いたいいたいいたいイたいイたいイタいイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイっ！
脳が破損した
思考が働かない
身体が動かせない
「あんだけ豪語してたわりに一発で死んだな」
「ちょっと隊長っ！俺の間近で撃たないでくださいよ！血が飛ぶじゃないですかっ！」
「ハハッ、すまんすまん、こいつの警戒心が意外と強くてな」
攻撃された
致命的な攻撃を受けた

『死』
死、死、死死死死死死死死死死死死死死…
「しかしこの便利屋、なんか可笑しなこと言ってましたね、数穴開けたぐらいでは死なないって。」
「ただの虚勢だろ？頭に穴開けて生きれる奴がこの世のどこにいるってんだ、実際にこうやって死んでるわけだしなぁっ！」
なぜ？なぜなぜ？なぜなぜなぜなぜなぜなぜ？
なぜ撃たれた？
なぜ蹴られている？
「そうですかね…？」
「なんだ？なにか気になることでもあるんか？」
死…死、しｓｈｉシ、死？駄目だ、まだ…
『生きなきゃ…』
そうだ、起きなきゃ…
立ち上がらなきゃ…
「いや、確か上の連中、こいつを殺す時は注文付けてませんでしたっけ？」
「…確かに、珍しく燃やし尽くせって念を押してた記憶がありますよ、隊長」

「馬鹿だなお前ら、そんなのどうせこいつが滅茶苦茶反感買っただけのことだろ？
どーせ、自分で片付けられないから俺たちにめんどくさい方法を命令したに決まってる」
治そう
治れ、治れ治れ…
治れ治れ治れ…
「にしては切羽詰まってたような…」
「めんどくせぇこと気にする奴らだなぁ～、ほら、これでいいだろ」
パンっ、パンっ、パンっ
痛覚を感知
肺の損傷を確認
心臓の損傷を確認
これは…『敵の攻撃』だ
「ほら、さっさと次行くぞ、まだ仕事は終わってねぇんだ」
「燃やさなくていいんすか？」
「安い金で働かせる阿保の要望を聞く理由はないな、それにどうせここはすぐ戦場になるんだ。

死体の一つや二つ転がっていようとどうと言うことはねぇだろ、『あー、こちら第3部隊、報告だ、障害は排除した、繰り返す、障害は排除した、よって次の作戦に移行する。お前ら暇なら先に始めてていいぜ』」

…敵だ…敵なんだ…

てててててて、てき…

てきだ、てき…的だ笛だ嫡だ滴だ摘だテキだ

『敵がいる』

「隊長、次はどこだ？」

「あ？お前、作戦案見てねぇのか？」

「俺は難しいこと覚えるのが苦手だ。」

「…毎度のことだが、お前は力が強いのに馬鹿なことが傷だな。」

敵…敵敵敵…敵は…

そうだ、敵は殺す、敵は殺さなければならない！殺して！殺して！殺しつくして…

『…なんで？』

…なんで敵は殺す？

…なんで敵を殺さなくちゃいけないの？
「いいか、一度しか言わないからよく聞けよ」
…思い出した…敵だからだ
敵だから奪う
敵だから奪われる
「現地で先行部隊と合流した後…」
また、奪われるの？
また？また、またまたまた？また奪うっていくの？
また…奪うのか…
「手始めに、便利屋の関係者を殺す」

ふざけるな

「まぁ、多分これには少しでも情報の漏洩を防ぐって意味合いがあるんだろうな」
リーダーである男は歩く、前を向き、ただ普通に歩く。

警戒心もなく、本人からしたらいつも通りの不真面目に、ただ前を歩く。
これがもし、後ろを見ていたり、もう少しの警戒心があったり、自分の上司の言葉にもう少しだけでも違和感を覚えていたのなら、彼は気付けていた。
彼らは気付いたはずだ。
「どちらにしろ、沢山ぶち殺すから変わらないんだがなぁ～」
音もたてずのゆらりと立ち上がる、脳を撃った便利屋と呼ばれる青年に。
しかし、彼らは気付かない。
全ては問題なく終わったと思い込む彼らは生き返ったことにすら気付かない。
だからこそ、これはすでに正しく機能した結末の一つだったのだろう。
「お前ら、暴れてもいいがくれぐれも優先順位だけは間違え…っ!?」
リーダー格の男の後ろにいた四人の仲間は、声を上げる間もなく生き返った便利屋に即死させられた。
一人は首を３６０度曲げられ…
一人は心臓に穴が開き…
一人はナイフによって脳天一撃…
そしてリーダー格の男はというと、何が起きたかも分からぬまま、抵抗する力を遮るように突進され、地面へと倒れ伏したのだった。

腰首の痛みから閉じた視界に光を入れる。
「あ…あぁ…」
途端、『何が起きたのか』認識できなかった男の表情は、たった『三つ情報』から恐怖の色へと染まる。
動きを止めるために刺した両足のナイフ
男からしたらトドメを刺したはずなのに、生きて馬乗りになる俺。
そして、振り上げた殺意だけが込められた拳。
「死ね」
痛みが教える現実に、理解すら出来ない結果に、予想できる最悪の未来
便利屋は男に考える間も与えず、何度も、何度も、何度もっ！…顔面に向けて拳を振り下ろした。
ごふっ、
がふっ、
かはっッ、
声を上げる暇すら与えず、気絶させる余裕も与えず、逆らう隙すら与えず、振るわれるその拳。
便利屋は正確に、一番頑丈な場所に、何度も殴れるよう、その拳は振るっていく。

あからさまな奇襲であれど、逃げることの出来ない現状をもって、男に実力差を教え込むに充分のものだった。
「ひぃィっ!?許し…」
大きく振り上げた瞬間で、男がとっさに唯一動かせた手を顔の前に出すことで許しを乞う。
が、再度、俺は問答無用でその手ごと殴り始めた。
指の全てが潰れようが、鼻が螺曲がろうが、頬の骨が歪もうが、歯のほとんどが折れようが、唇が裂けにさけ血みどろになったとしても、男の眼球の端が真っ赤に染まろうとも、…
支配的な暴力で、便利屋は男の心に圧倒的な恐怖に叩き込んだ。
「…」
グチャ、
グチュ、
グチョ、
辺りは生々しい音だけが響き渡る。
男の血が粘液性を持って便利屋の手にこべりつくが、反抗する意思を、逃げようとする意思を、謝罪しようとする意思すらをも、許されていないことを悟らせるべく振るい

続けるその拳。
気絶できない絶妙な力加減で、与えられる気付けに丁度いい痛みとともに、男に許しがないことを悟らせる。
ドゴっ
ドチャっ、
バギュッ、
この暴行は永遠に渡り行われるんだぞ、と。
この恐怖は怨嗟のように続いていくんだぞ、と。
この最悪はお前らから始めたんだから終わりなんてないんだぞ、と。
『どうすればこの恐怖が止まるのか』
便利屋の狙いなのか、俺は男の思考からそれ以外の全てを放棄させた。
どう謝ればこの地獄は終わるのか
どう償えばこの最悪は消えるのか
どうすればこの状況を変えれるのか
そんな方法なんて実際はないのだが、恐怖を煽ることで男の生存本能に解を導きださせる
生きたいのかすら分からなくなっているだろうが、ひたすらに解を求めさせ続ける。

（こいつはもしかして…全て…聞いていたのか？）

何分たっただろうか？

再度便利屋が拳を大きく振り上げたとき、男はとっさに出せうる限りの大声で叫んだ。

「ざ、ざいじょがらっ！おまへらあっ、ごろすよていだった！」

便利屋の拳が止まる。

「う、うえがらあっ、ほうしろとじかっ！きはさへてないんはっ！ほんどうあっ！」

止まったことで確信を得た思考が全てを話す。

本当であるからこそ、嘘偽りだと便利屋に感じさせないために必死に話す。

「…作戦内容は？」

突如としてされた質問。

これは助かる道への光明か、

男は状況の変化に対してそう喜んでしまい、一瞬だけ答えるのが遅くなってしまった。

「いがぁっ!?」

便利屋は男から余裕を取るため、肘の間接を折った。
人としての心はなく、見たものからはただ修羅としか感じぬよう、１８０度綺麗に折った。
「アアアァっッ…ッ！」
あまりの鋭い痛みに男は叫ぶ
うずくまることが許されない男は叫ぶしかない
涙と血でぐちゃぐちゃの視界の中、膝見つけられた恐怖が便利屋の振り上げられた拳で戻る。
男に残っていた最後の楽観的思考は壊された
「ご、ごのぢぐをっ！お、おどすこどでっ！ぜ、ぜいふぐするさくぜんだったんあっ！」
「…なぜ？ここだ？狙うなら狙うで他にも適した「え、えいぎょうりょぐでいへあっ！ごこがぁっ、いひばんっ！づよがっあっ！
だ、だかはっ！こほがっ、え、えらばれだんだ！」
「…っ！」
告げられた事実。初めて便利屋が表情に感情を見せた。
「なら…っ！なら何でっ！あんな大層な契約を結ぶ必要があったっ！」
切羽詰まったその表情は、さっきまでとはまるで別物。

あまりに人間らしく、怒りが全てというより、悲しみによるもの。
しかし、視界すらまともに働かない男からしたら、満たされた恐怖でそれに気付けない。
だからこそ、知ってか知らずか、男は便利屋にとって最悪の事実を吐く。
「ゆ、ゆいいづのっ！ふ、ふあんようぞあっ！の、のぞぐのがぎまりぃになぁっであっ！」
便利屋の動きが止まる。
男の言葉は確信をついたのか、便利屋は掴み揺らしていた胸ぐらを止める。
「まさか…全て…俺を殺すために…？」
男は気付かないが、便利屋の表情は無となる
「いや…でも…だとしたら…」
「っ？」
「俺が…？…また、俺が…っ!?」
そして移り変わる悲痛に満ちた表情
「…そうだ…確認…しなきゃ…」
便利屋の呟きは男には聞こえない。代わりに、視界で掲げられた拳の影が写る。
「命は助けてやる、答えろ」
停止した状況と、変わった様子に、未来を期待するだけ。

「それはあいつも知っているのか？」
男は困惑する。便利屋の示すあいつが誰に当たるのか分からなかったからだ。
男が知るのは作戦のみ、ゆえに便利屋に上層部と面識があるかも知らない。
しかし候補はある。
それは便利屋にとって身内とも言える存在。
名義場は便利屋との仲介人である、攻め落とそうとした地区の第一責任者
便利屋が『地区長』と呼ぶもの
だが、先程も言った通り、男が知るのは作戦内容のみ。
誰が関わり、誰が暗躍し、誰が望んだのかなんて知り得ない。
人を殺すことに快楽を覚える男にとってそんなことはどうでもいいことだったのだ。
だからこそ、内にある恐怖で嘘がつけなかった男は素直に答えてしまう。
「知らな」
言い終える前に男は頭はつぶされた。
年相応に鍛えられた拳によって叩きつぶされていた。
幾度の戦場を経験したであろう男の生は、ここで呆気なくも終わりを告げたのだった。
「……あァっ…アぁ…っ！」

そんなプロを容易くも殺めた便利屋は、その死体のうえで汚れた己の手を見る。
「まただっ…また俺は…っ！」
後悔からか、悲しみを嘆くように、苦しみを拭うように、汚れた手で握り拳を作る。
懺悔でもしたいのか、震えた声で嗚咽を吐きながら、何かを守るようにその場でうずくまる。
「もぅ…もうっ……もうっ！」
死にたいほどの罪悪感は、頭を撃たれても死ねない便利屋にとって苦しみ以外の別物ではない。
行き場がないからこそ、それはこべり付き、離れることを許さず、便利屋の心を蝕んでいく。
生き地獄を経験させられる。
死ぬことが許されない彼だからこそ、生きて地獄を経験させられる。
そして、その結果を示すように…
遠くの方で、爆発音が鳴り響いた。
「…行かなきゃ…」
反響した音から距離を無意識にあぶり出し、最悪を予想するも、期待する心から万が一の可能性を視野に入れる。

便利屋は目的だった大金に目もくれず、自分の居場所へと…駆け出した